

日本韓国研究

第1号

〈研究論文〉

絶対的な文学と些細な差異としての民族

—金東里の文学論における文学と民族の関係について—

金 景彩

近代朝鮮における古典認識について

—『文章』（1939-1941）を中心に—

柳川 陽介

朝鮮時代に 쓰여진 『老乞大』 諺解類에 관한 考察

—『乞老大』 諺解類의 慣用表現을 中心으로—

金 美順

リキャストの使用言語と学習者の自己訂正に関する考察

崔 銀景

韓日の対人コミュニケーションにおける身体接触行動の一考察

—ドラマ『グッド・ドクター』（韓日版）を資料として—

任 炫樹

〈寄稿論文〉

攻撃的発言に対する反応

—高校生調査を中心に—

河 正一・金 美順・大上 博右

〈書評〉

在日コリアンを眼差す鍵としての「継承」（橋本 みゆき 編著 猿橋 順子・高

正子・柳 蓮淑 著『二世に聴く在日コリアンの生活文化-「継承」の語り』） 洪 里奈

飯倉 江里衣著『満洲国軍朝鮮人の植民地解放前後史-日本植民地下の

軍事経験と韓国軍への連続性-』

崔 誠姫

趙 智英著『『宇治拾遺物語』 夢説話の研究』

高橋 梓

2021年9月

日本韓国研究

第 1 号

2021 年 9 月 30 日

日本韓国研究会

目次

〈研究論文〉

- 絶対的な文学と些細な差異としての民族
—金東里の文学論における文学と民族の関係について— 金 景彩 3
- 近代朝鮮における古典認識について
—『文章』（1939-1941）を中心に— 柳川 陽介 23
- 朝鮮時代に 쓰여진 『老乞大』 諺解類에 관한 考察
—『乞老大』 諺解類의 慣用表現을 中心으로— 金 美順 37
- リキャストの使用言語と学習者の自己訂正に関する考察 崔 銀景 53
- 韓日の対人コミュニケーションにおける身体接触行動の一考察
—ドラマ『グッド・ドクター』（韓日版）を資料として— 任 炫樹 72
- 〈寄稿論文〉
- 攻撃的発話に対する反応
—高校生調査を中心に— 河 正一・金 美順・大上 博右 92
- 〈書評〉
- 在日コリアンを眼差す鍵としての「継承」（橋本 みゆき 編著 猿橋 順子・高
正子・柳 蓮淑 著『二世に聴く在日コリアンの生活文化-「継承」の語り』）
洪 里奈 112
- 飯倉 江里衣著『満洲国軍朝鮮人の植民地解放前後史—日本植民地下の軍事経験
と韓国軍への連続性—』 崔 誠姫 108
- 趙 智英著『『宇治拾遺物語』 夢説話の研究』 高橋 梓 116

絶対的な文学と些細な差異としての民族

—金東里の文学論における文学と民族の関係について—

金 景彩（東京大学大学院博士後期課程）

<要旨>

本稿は、解放（1945年8月15日）直後の朝鮮において文学者・金東里が展開した文学論と民族概念の関係を検討することで、解放がもたらした思想の閉塞性の内実を明らかにしたものである。解放後に金東里は「純粹文学」論を通じて、人間が生まれ死ぬという人間一般の運命を悟り、その打開のために人間それぞれが努める生のあり方を追求した。このような金東里の議論は、一種の純粹主義として、そこに現実への批判的対象化の契機と他者抹消の契機が同時に介在する。1930年代、金東里はそのような「純粹文学」の理想を「民族」「朝鮮的なもの」の固有性に求めていた。それは、帝國的な擬似普遍（「東洋」）に対抗するものとして、帝国の言説に対する批判的対象化の産物であった。しかし、帝國的言説との差異化が不必要になった解放後の朝鮮において、人間の「生」そのものと重ねられた「純粹文学」は外部を持たない絶対性へと化する。その際、差異を前提とする「民族」概念は、人間一般に見出されうる些細な差異として、その固有性が除去されるようになる。解放直後に見られる思想の閉塞性の根底には、「民族」に代表されるナショナル・アイデンティティではなく、「民族」さえも包摂してしまう絶対化された文学があった。差異が除去された文学、文学化された民族は、南北間のイデオロギー対立が激化するのちの時代的な流れに符合するものであった。

キーワード 金東里、解放、純粹文学、生、民族

1. はじめに

ポスト植民地における〈解放〉とは何を意味するか。文学に対する発展論的な認識に基づき、その変遷を追跡してきた従来の研究において、植民地という

状況は専ら正常な文学の成立を妨げる障害物であった。文学は、近代的主体を産出する装置や政治が閉ざされた植民地において、それに代わる機能を果たしていたものと考えられる傾向があり、植民地の問題は常に、より自由で個人主義的な文学＝主体を抑圧するもの、また体制協力／抵抗のいずれかを強いるものとして理解された。そして、植民地への上記の認識と対をなす形で、解放（1945年8月15日）¹後の状況は、まさに抑圧されていたものが解放され、政治への欲求が噴出した時空として捉えられた。抑圧／解放の認識枠は、従来の研究に依然として残存しているのである。

申知瑛（2012）が指摘したように、植民地期の朝鮮は「不在」の時空であった。朝鮮の知識人たちは、「国家と「民族」という概念を認識するや否やそれが不在であることを直視」したのみならず、「未だ存在すらしていない国家を失う危機」に瀕した。しかし申知瑛は、植民地期の朝鮮が経験せざるを得なかった「不在」から、或る可能性を見出す。既存の「朝鮮」「近代」「文学」といった範疇そのものが、その「不在」のゆえにこそ再構築される可能性である（申知瑛、2012：21-23）。植民地期をこのように捉え直したとき、解放もまた全く別のイメージをもって浮かび上がってくる。解放が「不在」から「存在」への転換をもたらしたのなら、植民地期に「不在」によって開かれていた言説空間は、逆説的にも解放によって閉ざされたことになるからだ。本稿は〈解放〉という歴史認識によって見落とされがちな、1945年8月15日以降の思想的閉塞性の内実に迫ろうとするものである。

「存在」が作り上げた言説空間の閉塞性が垣間見られる人物に金東里（1913-1995）がいる。朝鮮プロレタリア芸術家同盟（KAPF）が解散した1935年に登壇し、小説家としては『花郎の後裔』（1935）、『巫女図』（1939）などの土俗的な作品で知られ、批評家としては「純粹文学」論に代表される右翼的な文学論を唱えた人物である。金東里に対する従来の研究は、彼の文学作品に表れた土着的な要素（古代新羅のモチーフやシャーマニズム）と批評の主軸である「純粹文学」をどう評価するかという問題をめぐってなされてきた。既存の議論の概略は以下の通りである。解放の前後を問わず、金東里の「純粹文学」論は、その土着性ゆえに反近代的な志向をもつものであり、代案的普遍として東洋的なもの、朝鮮的なものを探究するという点で、戦時期日本のいわば「近代の超克」論の反復にすぎない。したがってそれはファシズムの産物である、云々²。あるいは、反近代を志向しながらも、「民族」のような近代的主体に頼

¹ 本稿における「解放」とは、1945年8月15日の日本の敗戦による植民地支配からの「解放」のみならず、韓国文学研究において広く共有されている「解放期」という概念を強く意識したものである。

² 金東里の作品および文学論をファシズムの観点から捉えたのは、金哲の研究である。金哲

っている点で、意義と限界を同時にもつ（韓壽永、2003：147-176）といった議論が主流になっている。金東里の文学論をファシズムとの関連において分析した既存の研究は、その大半が、彼の反近代的志向が「朝鮮的なもの」あるいは「民族」という壁にぶつかり、近代性の深淵に座礁してしまった——「純粋文学」を主張しながらも最終的には政治化してしまった——という結論に至っている。

しかし、金東里の「純粋文学」論と「民族」論を対立的に捉える従来の認識は、植民地期と解放後について重要な事柄を見落としている。前述した、「不在」から「存在」への転換と閉塞性である。「民族」概念の有無だけでは「不在」から「存在」への転換、それによってもたらされる思想の閉塞を説明できない。その根底に「不在」への認識があったとはいえ、植民地期を通して「民族」ほど強力で具体性を帯びた概念はなかった。それは、帝国への同化を迫られる植民地において、自らを差異化することが切実な課題であったからであろう。解放後の状況は言うまでもない。左右を問わず唱えられた「民族文学」は、イデオロギー対立を超えて共有されていた〈国づくり〉への欲望の産物だったのだ。したがって、逆説的にも〈解放〉の閉鎖性を捉えるためには、「民族」や「朝鮮的なもの」とは別の側面から接近する必要があると本稿は考える。この別の側面とは、文学を絶対的な価値として位置づけ、「民族」さえも文学化してしまうロジック、いわば文学主義である³。

従来の認識と異なり、解放以降の金東里は、「民族」や「朝鮮的なもの」を論じてはいたものの、それらを特定の主体とその固有性の次元で論じなかった。「民族」、「朝鮮的なもの」の概念は、植民地期と異なり解放以降の彼の文学論において、その具体的な内容が空白になっていたのみならず、彼の文学論を貫く「純粋」という概念は「民族」と短絡されていたのである。そこからは、「民族」の位相変化（「不在」から「存在」へ）による困難さえも感じ取れる。金東里に見られる「土着性」や「民族性」をすぐさま閉鎖的なナショナリズムとして批判できない所以がここにある。

は「韓国の近現代史は本質的にファシズムの自己展開過程およびそれとの拮抗の歴史」であるとし、金東里の作品『黄土記』（1939）から「ファシズム美学の主要な特性」である、「いかなる合理的説明も不可能な、破壊と消耗への衝動」、「虚無への志向」を読み取る（金哲、1999：247-276）。一方で金コヌは、金東里を西田幾多郎の哲学に由来する戦時期日本のいわゆる「近代の超克」論との影響関係の中で分析した（金コヌ、2008：263-290）。

³ このような問いを設定する際に李銀珠の研究から多くの示唆を得た。李銀珠は、金東里に対する従来の批判を、文学に対する期待によるものとして分析した。つまり、文学こそが現実に批判的に介入でき、真理と政治を擁護するものとして歴史を牽引することができる、したがって国家権力と距離を置かなければならないという文学への期待が、金東里を批判する論理の根底にあるというのだ（李銀珠、2014：33-60）。

本稿は、解放後の金東里におけるこのような「民族」の位相を彼の文学観に由来するものと捉える。結論から言えば、金東里にみられる「文学化された民族」にこそ〈解放〉の閉塞性の根拠を求めると、本稿は主張する。

〈解放〉が逆説的にも閉塞的であると言える根拠は、先行研究に反して、彼が固有な「民族性」を主張した事実にあるのではなく、むしろ「民族」概念がもつ様々な差異と固有性を抹消してしまう文学概念のうちにある⁴。解放後の金東里の文学論は、彼が植民地期に企てていた「朝鮮的なもの」の固有性を除去してしまう過程に他ならず、外部をもたない絶対化された文学概念こそがこの「民族」概念の固有性の除去を引き起こしたのだ。そして、金東里が作り上げた「文学化された民族」は、「民族」を容易に語ることが不可能になってしまう1948年以降の思想的状況⁵に符合するものであった。

本論では、解放後に展開された金東里の純粋文学論の構造を明らかにし、それが「朝鮮的なもの」、「民族」といったナショナル・アイデンティティの位相変化に即応した様相を捉えることで、解放直後の韓国の思想的状況に迫りたい。金東里の「純粋文学」論は、植民地的状況からの〈解放〉の意味、より根本的には文学概念と主体の関係を問いに付すための格好の材料である。

2. 純粋主義としての「純粋文学」論

まずは、解放後の金東里が文学という概念をどう位置づけていたのか検討してみることにする。金東里にとって文学とは、特定の分野や物語様式を指す用語ではなかった。1948年に発表した文章の中で金東里は、「〈文学すること〉はまず〈生きること〉でなければならない」とし、〈生きること〉を広い意味での「生命現象」と「職業的生」に分類した後、文学をそれらと区別される「第三の生」に位置づける⁶。「第三の生」が意味するところは、以下の引用に

⁴ 本論は、従来「右翼的文学論」と言われていた金東里の議論を分析対象とするが、金東里にみられる閉塞性が「右翼的」なものに限られるとは考えない。用いられる概念や具体的な内容に異なる部分はあったものの、左右を問わずあらゆる政治的実践が文学という概念を経由せざるをえなかったことに、閉ざされた時空としての〈解放〉があると本論は考える。したがって解放直後の言説空間を政治化した文学という観点から捉える見解（金允植、2006：18）には同意できない。そのような見解は、政治化していない〈本来の文学〉を前提する点で、文学——限度のない全体性としての文学——そのものへの問題提起が根本的には不可能であった解放直後の思想状況を反復しているからだ。

⁵ 1948年8月15日に南朝鮮と北朝鮮にそれぞれ別の政府が樹立されることにより、朝鮮半島全体を指す概念としての「民族」は次第に「国民」へと置き換えられるようになる。

⁶ 「生」をこのように分類する金東里の文学論には、ベルグソンの生哲学の影響が認められ

明確に表れている。

我々は一人一人が天地の間に生まれ、一人一人が天地の間で生きられるという事実を通じて、せめて我々と天地の間には離れようにも離れられない有機的連関があるということと、この〈有機的連関〉に関する限り、我々には共通の運命が付与されていることを発見するのだ。我々は我々に付与された共通の運命を発見し、その展開を志向しなければならない。我々がこの事実を遂行しない限り、我々は永遠に天地の破片に留まってしまふのであり、我々が天地の分身であることを体験できないのであり、この体験をしない限り我々の生は天地に同化されないからである。そして我々は、我々に付与されたこの共通の運命を発見し、その打開に努めること、これをすなわち究竟的生⁷と呼び、また文学することというのだ。(88)⁸

金東里が言う「共通の運命」とは、「一人一人が天地の間に生まれ、一人一人が天地の間で生きられるという事実」だが、ここで言う「共通の運命」は別の文章では、「結局人間は皆死んでしまうということは、時代と社会を超越し、人間が永遠に有する人間の一般的運命」(81)⁹という表現に言い換えられる。

る。金東里自身もいくつかの文章でニーチェ、ベルグソンなどのいわゆる「生哲学者」から影響を受けたことを述べている(金東里「私が影響を受けた外国作家」『朝光』1939年3月;金東里『自分を探し求めて』民音社、113頁;金東里『飯と愛、そして永遠』思社研、1985年、247頁など)。これらの「外国作家」から金東里が影響を受けた背景には、当時の日本における思想界の潮流があったことは言うまでもない。ただ、後に論じることになるが、本論が注目するのは金東里における「生」の問題そのものよりも、彼がその独特な「生」観念を文学概念に重ねることで、現実に存在する様々な差異を形而上学的な観念のうちで解消していることに対してである(本論ではそれを「純粹主義」の観点から分析することになる)。

⁷ 金東里のいう「究竟的生」の意味を明確に把握することは容易ではない。それは、彼自身が当の概念を明確に定義していなかったからである。Benoit Berthelier (2016) は、金東里の「究竟的生」に確かな意味や意図があると前提するよりは、彼がそれについて「どう語るのか、なぜ一貫して曖昧な説明に留まるのか」という、「無論理の論理」に注目した方が有意義であると論じた。

⁸ 初出「文学することについての私考——我が文学精神の志向について」『白民』1948年3月号。以下、金東里の文章を引用する際には、引用文の最後に全集(金東里、2013)のページのみを記し、初出情報は脚注に表示する。全集ではなく、初出時の資料から直接引用した場合には、脚注にその書誌情報を記す。金東里の全集(2013)は、『文学と人間』(ソウル:白民文化社、1948年)を底本にしている。

⁹ 初出「文学的思想の主体とその環境——本格文学の内容的基盤のために」『白民』1948年7月号。

彼によれば、「共通の運命」を発見し、志向し、さらに打開することは、時間的恒久性と空間的普遍性をもつ文学本然の思想性であり、社会性や功利性を掲げる「功利主義文学」、あるいは「政治主義文学」と「本領の文学」とを分かち決定的な基準となる。ここで「功利主義文学」、「政治主義文学」は、当時の左翼側の文学論を指している。金東里のいう「本領の文学」が、解放後に激化したイデオロギー闘争において左翼を圧倒するためのものであったということは、彼の「純粹文学」論を理解する上で見落としてはならない側面である。つまり、時間的恒久性と空間的普遍性をもつ文学は、左翼側が唱える政治的理想を時間的・空間的に制約されるものとして、容易に無効化できたのだ。

このような金東里の「文学」論は、その内容からして新しいものではない。韓国内においては無論のこと、日本で出された文学論を参照しても、いわば「大正生命主義」¹⁰とその影響下にあった小林秀雄の議論を連想させる部分が多いのである。例えば、文学作品を「自然」＝「無限」と等価のもののみなし、「人間精神は絶対自然と常に照応するというただ一つの座標を持つのみだ」と断定していた小林秀雄の言葉（小林、2002：28）は、「天体の無窮さ」を人間生活の中心に置くことに（純粹）文学の意義を見出していた金東里の議論（12-28）¹¹と、時代的文脈においても、論理構造においても重なっている¹²。しかし、金東里の問題にアプローチするためには、何よりも彼の文学論における純粹主義（purism）的な側面に注目する必要がある。なぜなら金東里の文学論は、その構造において純粹主義の二面性の中で揺れ動いており、この二面性にこそ、金東里の時代性が刻まれていると考えられるからである。

鷺田清一は、20世紀初頭、様々な分野で登場した純粹主義を、「論理や法、経済法則や芸術そのものの自律してあるべき固有の領域が、それにとって偶然的で非本質的な契機の混入によって崩壊しつつあるという危機意識」から出発し、「現実的な事象そのものを確実にとらえるためにこそ、それを妥当的なも

¹⁰ 生命主義を一概に定義することは難しいが、本論では鈴木貞美による「大正生命主義」の分析を参照している。鈴木は、「大正生命主義」の背景に日露戦争による不安感情の蔓延があると分析しながら、〈自己〉〈自我〉の自覚から原始から連なる〈永遠の生命〉の自覚へたどり着くことを唱えた木下尚江を「大正生命主義」の先駆けに位置付けている（鈴木、1996：101-119）。

¹¹ 初出「自然主義究竟——金東仁論」『新天地』1948年6月。

¹² 金東里と小林秀雄の類似性を最初に指摘したのは、金允植である。彼は「関係の絶対性」を通じて「思想の相対性」を克服しようとした点に小林秀雄と金東里の共通性を見出した（金允植、2003：15-19）。そこで意識されている小林の文章は「様々なる意匠」（1929）、「無常といふ事」（1942）などである。むしろ、金東里と当時の日本思想界の関連性は、小林秀雄に限られない。金コヌも指摘したように、金東里自身は日本の思想からの影響について言及しなかったものの、京都学派を含む広い意味での「近代の超克」論に彼が深く影響されたことも確かであると思われる（金コヌ、2008）。

の自律的で形式的な関係の明晰さの下に置くという強固な意思」として定義した。鷺田によれば、(偶然性を排除するという点で) 反自然主義、反心理主義、反ロマン主義、反歴史主義の傾向をもつ純粋芸術は、具体的な現実を再現的に表象したり (représenter)、指示したりするのではなく、それ自体がひとつの現実を構成するような芸術を目指す。このような純粋芸術の追求には、現実に対する批判的対象化の契機と他者抹消の契機が同時に介在する。鷺田は、「形式と質料、存在と妥当、そして永遠と時間を和解不可能なかたちで厳しく分離」する純粋主義が、「純粋性の名の下に歴史的な特殊性を徹底的に排除し、また形式性の名の下に具体的な意味を次々と消去してゆく」という点で、いわゆる純血主義よりもいっそう根底的な排除方式となりうる可能性を指摘した(鷺田、2002: 101-113)。純粋主義は、それが成り立つための根拠、すなわち定礎の根拠を自らに求める自己完結性を有する点において、外部の現実との間に批判的距離を確保できるが、他方、まさにその自己完結的な性格のゆえに、純粋主義をそもそも可能にしている非純粋の領域(真の定礎の根拠)を排除し、無意識のうちに忘却させるのだ。

鷺田が要約した純粋主義の特徴は、金東里の文学論に概ね当てはまる。他の純粋主義と同様、金東里は文学を「現実を再現的に表象」するものとして考えなかった。彼にとって文学とは「生」そのもの——鷺田の言葉を用いれば「それ自体がひとつの現実を構成する」もの——であり、各人間がそれを通じて運命を発見し、打開しようとする過程そのものである。さらに、質料より形式を、妥当より存在を、時間より永遠を優位に置く傾向を見せる点も、金東里の文学論を純粋主義との関連において分析しうることの根拠となる。例えば金東里は、土俗的な自然を描いた小説家・李孝石¹³に対し、「小説を裏切った小説家」という批判を向ける。その根拠は、李孝石の作品が自然=神に無条件的に帰依しようとする「詩の精神」に傾倒し、プロットと人物の性格に支えられる「散文精神」の「本質的なスタイル」を疎かにしたからであった¹⁴。金東里からすれば、

¹³ 李孝石(1907-1942)は、植民地期の朝鮮の小説家である。プロレタリア文学の退潮後、純粋文学を標榜する文学団体「九人会」の結成に関わり、自然を背景としたエロティシズム、異国趣向が特徴の作品を多数著した。金東里と同じく「純粋文学」を唱えた文学者として知られる。

¹⁴ 「だとすれば、なぜに李孝石は、〈山〉と〈野原〉に帰り、草と木になろうとしたのか。なぜに自然に同化しようとしたのか。なぜに神に帰依しようとしたのか。それは彼が詩精神の番人だったからだ。[……]彼にとっては散らかっている街の〈人間〉および〈散文〉と対比される世界がすなわち詩の世界であり、詩の世界の核心が自然(あるいは神)だったからだ。[……]彼の文学の決定的な懦弱性は、〈プロット〉の貧困と性格創造の欠如にある。彼のいかなる作品においても、人物の性格が主題になったことは一度もない。そして、彼の

自然＝神への帰依は、打開すべき「人間の一般的運命」を超越的に解消してしまう——神という絶対者を打ち立てることで人間が運命の打開に努める必要がなくなる——ものであるため、当然批判の対象になるだろう。さらにそれは本来の——純粋な——小説形式にも反するというのが金東里の論理である。一見、李孝石に対する批判と矛盾しているように見える、^{キム・ドンイン}金東仁¹⁵に向けられた批判からも金東里の純粋主義的な側面が窺える。金東里は、「神、または神の居住地である空の無窮性を人類から追放」したことに自然主義の限界があると指摘し、その自然主義を体現した人物として金東仁を挙げる。金東里によれば、小説『狂画師』（1935）¹⁶で作者の金東仁は、作中人物の瞳から「精神や魂」ではなく、「物質と肉体」をみてしまう。それは金東仁が「極めて限られた地上の平面」に安住し、「機械的、物質的、動物的」な人間観を「寸歩も譲らなかった」から、すなわち「神と無限と立体を喪失」したからだと言う¹⁷。時空に制限されない、より「本質的」で永遠なるものへの金東里の志向が表れるところで

全ての作品に登場する全ての作中人物の性格描写において鮮明に〈浮き彫り〉になった人物は一人もいない。例えば、彼は〈色々な若菜を食うと体が緑に染まりそうだ〉と、作中人物の〈私〉の口を借りて自分の意思を代弁させることはできても、それをある人物の性格そのものに見出したり、そのような人間型を創造することはできなかつた。〔……〕しかし、周知のように、〈プロット〉と〈人物の〉性格を離れて小説文学の気骨は維持できないのであり、小説様式の壮大な総合性と普遍性は、あくまでも〈プロット〉と〈人物の〉〈性格〉を主としてのみ成就されたのである。そして、これが散文精神の本質的スタイルでもある」（36-42）。初出「散文と反散文——李孝石論」『民聲』1948年7-8月。

¹⁵ 金東仁（1900-1951）は、啓蒙主義的な文学を唱えていた李光洙に対抗し、芸術至上主義、金東里の言葉を借りて言うならば、純粋文学を唱えた小説家・批評家である。

¹⁶ 金東仁自らが創刊した雑誌『野談』に、1935年12月に発表された小説作品である。自分の醜い容貌を悲観する絵描きの率居は山にこもり、女性の究極の美を絵に描く夢を抱いている。偶然出会った盲人の女性の顔（表情）に純粋な美を見出し、絵を通じてそれを形象化しようとするものの、盲人の目を描くことに苦勞してしまう。目が描けない中、率居は彼女と一夜を過ごす、翌日彼女の表情からは彼が求めていた美が消え、そこには愛欲だけが浮かぶ。怒りに満ちた率居は彼女を殺し、その際に飛び散った墨が絵の中の女性の目になる。発狂した率居は、その女性の絵をもって放浪し、死んでしまう。

¹⁷ 「「今日こそ瞳を完成させよう」とモデルの目を見つめたとき、ああ「しかしその目は男の愛を求める女の目であった」。昨日見たその「七色玲瓏な竜宮」を求めていた「夢の理想」の目ではなく、一晚にして肉体に目覚めてしまった——今や性欲の目が変わってしまったのだ。〈率居〉〔作中人物〕が描こうとする美人の目は、動物的な肉体の目ではなく、七色で玲瓏な龍宮を探し求める〈夢と神秘〉の目であった。だとすれば、作者がこの場合、モデルの瞳に〈夢と神秘〉を付与するのか、肉感と性欲を付与するのかというのは、作者の人間観を決定する最終的な焦点となる。なぜかという、それはすなわち、人間の瞳に浮かんでいる生命の光彩から精神と魂を直観するか、物質と肉体の組織を発見するのかという問題に関わるからである」（20-21）。初出「自然主義究竟——金東仁論」『新天地』1948年6月。

あるが、ここでの「神」の肯定は、李孝石への批判に見られる「神」の否定と決して矛盾しない。金東里のいう文学の思想性とは、神への超越（帰依）でも、神なき現実への安住でもなく、人間精神そのものの無窮性を要諦とするからだ。李孝石、金東仁が金東里とは異なる角度から「純粋文学」を唱えていた人物であったことを考慮すれば、彼らに向けられた批判には、金東里の「純粋文学」がいかに徹底して純粋主義的であったか、いわばその潔癖性が表れているといえよう。

金東里の「純粋文学」を一種の純粋主義として読む場合、鷲田のいう「批判的対象化」の契機と他者抹消の契機は、それぞれどこに介在していただろうか。次節では、金東里の純粋主義的な文学論（「純粋文学論」）の問題性が具体的にどの点に存在するのかについて検討してみる。

3. 絶対的な文学とその問題性

金東里によって「純粋文学」が唱えられ始めたのは、日中戦争勃発後の朝鮮においてであった。解放後に提出された議論ほど体系的なものではなかったが、後に彼の文学論の鍵概念、「(究竟的) 生」「運命」などは植民地期においてすでに用いられていた。そして、それらの概念のもつ含意は、1930年代後半、帝国化する日本を思想的に支えていた「運命」の論理に対する有効なアンチテーゼになり得たと思われる。例えば、京都学派の一員である高坂正顕は、「時代の展開は運命の展開」であるとし、「人間の運命」を日本という「歴史的な身体」に重ねていた（高坂、1937）。しかし、その内的論理と思想的賭け金が何であれ、高坂のいう「世界史的な日本の永遠の歴史」によって規定される人間の歴史的「生」は、金東里からすれば容易に批判できるものである。というのも、繰り返しになるが、金東里が理想とする「(究竟的) 生」とは、「時代と社会を超越し、人間が永遠に有する人間の一般的運命」という「生」の最も基本的な形式を悟り、時代や社会への超越的な感覚を生きることで「運命」を「打開」しようとするところに宿るものであったからだ。彼がシャーマニズム的な土俗信仰に積極的な意味付与をしていたことも、「歴史」を超越しようとする意思から解釈できる。「運命」を受け入れるか、打開するかという問題以前に、「日本」のような時間的、空間的に限定された主体性は、金東里が求める「生」の形式の中で、常にすでに、解消される。

要するに金東里の「生」と「運命」は、具体的な歴史や限定された主体性をもたない。だからこそ特定の「歴史的な身体」からなる国家主義的な「生」に対し、「批判的対象化」が可能だったのだ。しかし、帝国日本という対抗すべき擬似普遍を失った解放後の状況下では、彼の議論は、それ自体「批判的対象化」

が不可能な、「歴史的な特殊性」をもたない全体性としての位置を占めるようになる。そしてその全体性は、あくまでも文学を絶対化（「純粹」化）する論理によって支えられていた。

問題は、金東里が文学を「具体的で現象的なものであるよりかは、具体的で現象的なものの根底にある、一貫した一般性を意味する」ものとして扱うことで、文学と文学以外のあらゆる知的実践の区別を曖昧にしてしまったことにある。当時、この問題を鋭く指摘したのは、同じく右翼文学者であった趙演鉉¹⁸である。彼は、金東里が「観念と信仰を思想と混同したことで、文学を宗教や哲学の領域にまで誘導している」と指摘し、金東里の文学論が宗教および哲学と区別されないこと、したがって空疎であることを、その文学論の限界として論じた¹⁹。趙演鉉の批判に対する金東里の反論は次の通りである。

まずその形式において宗教は、賛美し、祈祷し、帰依するが、文学は思索し、想像し、創造（表現）するものである。そしてその内容において宗教は、すでに発見され、体現された神に対して服従し、信仰し、帰依するが、文学においては各々が自分自身の中に、あるいは自分自身を通して永遠に新しい神を探し求めるのだ。〔……〕ここでとりわけ私が一つ警告したいのは、西洋人の観念的体系が近代にきて文学やら哲学やら宗教やら政治やら科学やら数学やらをあまりにも職業的に分業化し、あるいは紛然たるものにしてしまった事実である。我々はしたがって、いかなるものも他のものに隷属させられ、支配されることを容認できないと同時に、いかなるものもその求心的なところに〈究竟的生〉を拒否してはならないと考えるのである。〔……〕〈究竟的生〉は、文学を通じて、政治を通じて、宗教を通じて、哲学を通じて、あるいは教育を通じて、科学を通じて、全く同じように可能であることが原則であり、実際に可能だったのも事実である。（90-91）²⁰

要するに金東里が言いたいことは次のことである。西洋的な観念体系が文学、哲学、政治、科学、数学を分化させてしまう以前には、彼のいう「究竟的生」は、分野を問わずそれらの求心的位置に置かれた「本質的思想」であったが、近代以降、そのような「本質」は文学に託された。文学は——現代の宗教とは

¹⁸ 趙演鉉（1920-1981）は、金東里と同じく、韓国のいわゆる「右翼民族主義文学陣営」を代表する文芸評論家である。政治的な理念よりも「民族の生理」が優位にあるという観念に基づいた「純粹文学」を唱えた人物であり、とりわけ、1955年から1961年までの間に書かれた『韓国現代文学史』は、「主体の自己展開」、または「文学思想の集団的な自己展開」という観点から文学史の記述を試みたものとして知られている。

¹⁹ 趙演鉉「文学の領域」『白民』1948年5月。

²⁰ 初出「文学することについての私考——我が文学精神の志向について」。

異なり——「思索し、想像し、創造（表現）する」という点で、「各々が自分自身の中に、あるいは自分自身を通して永遠に新しい神を探し求める」実践であるという点で特権的である。

文学を特権化するこのような主張は、文学と政治の間の距離を測ろうとする別の文章でも繰り返される。金東里は、「文学と政治は、同じく広い意味において人間生活を対象にするという点においては」ほとんど相違ないにもかかわらず、それらが多々衝突してしまう理由を他でもなく文学の「総合性」に求める。文学は「文学そのものがもつ性格の総合性が強大であるゆえに」（136-137）²¹、他の概念を包摂しうるのであり、その区分が困難な場合があるというのだ。すなわち、彼にとって文学とは、特定の芸術ジャンルや学問分野としてのそれではなく、文学外部のあらゆる知的実践を圧倒しうる概念であり、芸術のそのものを意味する概念であったと言えよう。そして、このような文学の位相は、彼が「歴史」について論じる際に最も際立つ。

以下は、金東里がニコライ・ブハーリンの『唯物史観』を批判する一節である。金東里の「歴史」に対する認識が垣間見られる文章であるため、やや長い以下に引用する。

では、この〈自由向上の欲求〉とは一体何であろうか。これについての体系的な理論をここで紹介する暇はないため、まずここでは生命力であると言っておきたい。だとすれば、この生命力が精神なのか、物質なのか問われるかもしれない。それに私は、当然、精神と物質以前のものであるとしか言えないだろう。ここでマルクス学徒たちは次のように反発するだろう。生命力とは生物のものではないのかと。それゆえ〈生物とは結局歳月が流れる間初めてこの地の上に発生したものである。地球がまだ冷却された流星になる前に、〔地球が〕今日の太陽のように、いくぶん炸裂状態であった頃に、地球上にはいかなる生命も存在しなかったのであり、また思考する動物もいなかったのである〉（ブハーリン「第三章弁証法的唯物論」『唯物史観』参照）と言うだろう。要するに、〈生物〉とは、無生物あるいは〈死んだ自然〉（ブハーリン）から出てきたと言うのだ。〔……〕しかし、私に言わせれば、微生物が生まれることができた地球、それはすでに〈死んだ自然〉ではなく、〈生きた自然〉だった。土壌と雨露と光線と空気の運動そのものがすでに生命力をもった一個の〈生きた自然〉だった。〔……〕生物が生まれる以前の地球、あるいは微生物が生まれる頃の地球は、今日の我々の概念で規定された精神やら物質やらよりも以前の、それらを超越した一個の生命体であったことを、我々はいかなる理由で否定で

²¹ 初出「文学と政治」『文学と人間』ソウル：白民文化社、1948年。

きるだろうか。(106-107)²²

目の前に広がる事件の連鎖とその歴史的前後関係の脈絡を消去してしまうという点で、また「歴史」を本質的な生成の無垢を侵害する障害物として捉えるという点で、金東里の文学論は「反歴史」的である²³。上記の引用が含まれる文章の中で金東里は、人間の「自由向上の歴史」が「ルネサンスヒューマンイズム」によって認識可能になったと述べてはいるものの、その根底にある「生命力」を、唯物史観が前提とする物質的事件の歴史よりも遥かに遠くの、「地球の出处と太陽界の母体」にまで遡及させる。物質的事件以前の「生命力」を追究できない唯物史観は、特定の時空に束縛される「實在」に取り憑かれ、「人間の創造的意欲と個性的機能と精神的自由を滅却させる」「出鱈目学」とされる(108-109)。その際、文学は歴史的な實在を超えて、根源的な「生命力」に接続できる実践そのものとして、現在最も必要とされる本質的な課題かつ追究の対象になるのである。

結局、金東里が構築した「純粋文学」は、その絶対性により、特定の意味や志向——時間的・空間的制約を受ける——から自由な、事実上〈無〉の概念だったと言える。このような言説がもつ限界は明らかである。外部的なもの、すなわち他者をもたない金東里の文学論は、いかなる批判的介入も許さず、したがって自己更新が不可能なものである。批判(Kritik, critique)が、自他を分別することで得られる、自らの臨界に対する認識(廣松他、1998: 1322)に関わるものであるなら、金東里の文学論は、未だ人間史によって区画されていない全体としての自然そのものを文学と重ねる点で、批判を可能にする他者的な契機をもたないのだ。無論、普遍性を根拠に自らの正当性を説得しようとするのは、すべての主義・思想に共通するものであり、それゆえ、マルクス主義をはじめとする多くの主義・思想は、普遍に符合しない現実の差異を説明するために奮闘しなければならなかった。

ここまで金東里の文学論を検討してみると一つの疑問が浮かび上がってくる。彼の文学論が、「解放」という事態に直面したときの困難についての疑問である。解放後に、唯物史観を文学概念によって〈解消〉しようとした彼の文学論は、何よりもまず左翼側の文学論に対抗するためのものであった。朝鮮文学家同盟²⁴を中心に、1946年にはすでにマルクス主義を中核とする「民族文学」を

²² 初出「純粋文学と第三世界観——金秉達氏に答える」『大潮』1947年8月。1948年に刊行された評論集『文学と人間』には「本格文学第三世界観の展望——とりわけ金秉達氏の抗議に関して」というタイトルで再録された。

²³ このような「反歴史」の規定は、宇野(2003)を参照した。

²⁴ 林和が主導した朝鮮文学建設本部と李箕永が主導した朝鮮プロレタリア文学同盟の統合によって成立した左翼文学団体である。

掲げていた左翼側に対して、彼は批判的な態度を示しており、その批判の内容は、左翼側が文学概念を専有しているというものであった²⁵。問題は、左翼に専有された文学を奪い返すための反歴史的な「純粋文学」が、文学よりも強力な、歴史的な差異に基づく「民族」概念と齟齬をきたさざるえないことにある。金東里と同じく右翼側に立っていた趙演鉉が彼を批判した根底には、彼の文学論が「民族」に対してもつそのような危うさがあったのかもしれない。

「民族文学」を語る事が可能になり——「民族」が「存在」するものとして語られるようになり——、また喫緊の課題として認識されるようになった1945年8月15日以降の言説空間において、金東里の文学論は「差異」を前提とする「民族」概念をいかに説明していただろうか。今までの議論に基づき、問いをより具体的に言い換えればこうである。植民地期においては、金東里の唱えた文学論は、その反歴史的な特徴のゆえに、帝国日本の「歴史的主体」の外部を想像させるものであった。彼は「歴史的主体」の外部において、「民族」＝朝鮮を論じたのであり、それは帝国日本の「歴史的主体」に対する一種のアンチテーゼたりえたのである。しかし〈解放〉によって帝國的言説との差異化の必要性がなくなると、彼の文学論は相対化が不可能な、外部をもたない絶対的な議論に変貌する。左翼の文学論に対抗するその文学論において、「不在」から「存在」に移行した、いわば「歴史的主体」としての「民族」概念はどう処理されるだろうか。

4. 「純粋文学」が民族を語る方法——些細な差異としての民族

事実、「純粋」という理念は、民族の純粋性、固有性に関する議論と全く矛盾しない。というのも、偶然と非本質的な要素を排除する純粋主義は、民族の必然的運命と共通経験を掲げながら、民族を外的なものに汚されない純粋無垢なものとして表象する民族主義 (ethnic nationalism) の上位概念でもあるからだ。その際に民族主義が用いるナラティブ戦略においては、当の民族に固有な神話やシンボル、歴史的記憶、中心的価値が重要な位相を占める (スミス、1999: 19)。近代において創り上げられる民族言説は、たとえ超歴史的な神話の世界に起源を設定する原初主義的なものであっても、究極的には民族の起源と現在を無理なく接続しうる連続的な歴史観念に依存するのである。しかし、

²⁵ 金東里は「〈党の文学〉系列の文学人たちは、自らの文学的標語を真正面から〈階級文学〉だと〈傾向文学〉だのと言わずにこっそりと〈民族文学〉という潜称を使用してきた」(147)と批判した(金東里(2013)「党の文学と人間の文学——1947年上半期創作総評」)。

前述したように金東里の文学論は、「具体的で現象的なもの」を排除した、内外の境界が存在しない無垢の生命力を最高の価値としていた。このような文学論にとって「民族」という概念は、その論理体系の中に亀裂を生じさせる、処置困難な対象に他ならない。その困難はたとえば次のような一節に見られる。

しかし、このような科学主義的な現代の偶像崇拜熱は、世界史的な文化創造への意欲を妨げるのみならず、真の民族文化樹立においては癌になるということをも反省しなければならない。なぜなら、民族文学とは、原則として民族精神がその基本となるべきであり、民族精神とは本質的に民族単位のヒューマニズムに他ならないからだ。我々は、民族的に、過去半世紀の間、異族の抑圧と侮蔑で苦しんでいたが、長い歴史の中で培養された豪邁な民族精神がその解放を招いて、今日の民族精神伸長の歴史的实现をみることになり、これはすなわちデモクラシーに代表される世界史的ヒューマニズムの連続的必然性に由来する民族単位のヒューマニズムとして規定できるのだ。このように、民族精神を民族単位のヒューマニズムと見なすとき、ヒューマニズムをその基本内容とする純粋文学と民族精神を基本とする民族文学との関係は、すでに本質的に別個のものではあり得ないことがわかる。(96)²⁶

これは金東里が「民族文学」における「純粋文学」の意義を論じた文章である。「異族の抑圧と侮蔑」、「豪邁な民族精神」、「民族精神伸長の歴史的实现」などの表現は、典型的な民族本質主義に見え、また「民族」を「世界史的ヒューマニズム」の普遍性に接続させる点は、「国民文学」²⁷の前夜に影響力を発揮していた戦時期日本のヒューマニズム論とも重なっている²⁸。

しかし、解放以前とは異なり、金東里は「朝鮮的である」ことが具体的に何を意味するのか、その内容的な特質についての言及は控える傾向を見せる。例えば、次のような主張は解放以降に発表された評論ではほとんど見られない。

「外来の或る固有な概念が範疇化され(消化され)その民族特有の体臭と形を

²⁶ 初出「純粋文学の真義——民族文学の当面の課題として」『ソウル新聞』1946年9月14日。

²⁷ ここで言う国民文学とは、1930年代後半から1940年代にかけて日本浪漫派を中心に唱えられた文学論のことを指す。

²⁸ ヒューマニズム論の「正常にして当然の発見」が「新日本主義」であると主張した林房雄や、「現在に於けるヒューマニズムの要求と「新日本主義」の要求とは本来別個のものではない。公式への奴隷からの解放と云うことであり、やがては日本人として新たに文化的に出直すと云うことである」とした浅野晃が代表的な例であろう。林房雄「文藝時評——新日本主義論争の意義」『読売新聞』1937年3月28日；浅野晃「現代日本の『西洋と日本』——「日本的なもの」の問題の所在に就いて」『改造』1937年6月号。

帯びて発揮される」²⁹、「朝鮮の巫俗とは、その形而上学的な理念を追求したとき、それは風水説とともにこの民族特有の理念的世界である神仙観念の発露であることは明らかである」³⁰。すなわち、解放以降の金東里は、既存の「純粋文学」論の構造はそのまま維持しながら、「民族」の固有性を特定する部分のみを消去したと言えるのである。

解放以降、金東里が「民族」に言及する方法は、彼の「純粋文学」論とその他のヒューマニズム論の間の差異を露呈させる。上記の引用からもわかるように、金東里は「民族」を、ヒューマニズムの理想を唯一実現できる特権的な位置に置くことはしない。戦時期の日本におけるヒューマニズム言説が、「日本的なもの」をヒューマニズムの旗手として承認する方向へ安易にも滑り落ちてしまったことに対し、金東里の「民族」はあくまでもヒューマニズムの一単位に留まっているのである。「豪邁な民族精神」のような修辞は、具体的な内容や文脈が与えられないまま、「人間性の実現」、すなわちヒューマニズムの必然性を再確認する次元で動員される。また、金東里が同じ文章の中で論じるところによれば、「文学精神の本領が人間性の擁護にあるとすれば、今日のような民族的現実での人間性の具体的高揚は、祖国愛や民族魂を通じて発揮されているのであり、それらの真の文学的具現こそ——文学以外の目的意識によって硬化したものでなければ——真の純粋の精神にも通じていると言わざるを得ない」(134-135)³¹。この場合も、「祖国愛」や「民族魂」はヒューマニズムが既に「発揮されている」³²ものとして、その具体的な内容とは無関係に、「個性の自由と人間性の尊厳」が経験できる個別性の領域を踏み越えない。「結局人間は皆死んでしまうという」、「時代と社会を超越し、人間が永遠に有する人間の一般的運命」を認識し、それを打開するために、「永遠に新しい神を探し求める」ことが、金東里のいう「究竟的生」であり、「純粋文学」の実践に他ならないのなら、金東里の「民族」は「新しい神を探し求める」各々の方法に過ぎない。このような「民族」は、それぞれの人間が各自の人生を生きながらも、終局には「天地の一部」として死を迎えるという、極めて些細な差異に与えられた概念であり、論理上、「今日のような民族的現実」が有限である以上、いつでも別の概念に置き換えることができるもの、すなわち現象的なものである。したがって金東里の文学論において「民族」にいかなる内容を託すかとい

²⁹ 金東里「新世代の精神」『文章』1940年5月号。

³⁰ 金東里「新世代の文学精神——新人としての俞鎮午氏へ」『毎日新報』1940年2月21日。

³¹ 初出「文学と文学精神」『海東公論』1948年4月号。

³² 既往の「ファシズム」的なヒューマニズム論は、「日本的なもの」をより未来型のヒューマニズムに近いもの、将来構築されるであろう新しい文化を導くものとして捉える傾向がある。

う問題は、あくまでも「各々」に委ねられる。

金東里の文学論において固有性に関わる言及が姿を消したことには、前述したように解放という契機が影響を及ぼしたと考えられる。植民地期の金東里の

文学作品における「朝鮮的なもの」を探究した韓壽永^{ヘン・スヨソ}は、西洋的近代への懐疑が顕在化した 1930 年代中盤以降、「朝鮮的なもの」を既存の歴史化された東洋文化のサブカテゴリーとしてではなく、西洋／近代に立ち向かう代案的普遍として掲げようとする局面で「シャーマニズム」が発見され、それを通じて金東里は、日本の代案的普遍（「東洋」）³³に包摂されずに済んだと分析する（韓壽永、2010）³⁴。本稿の分析に基づけば、植民地期の金東里が「東洋」とは区別されるもう一つの普遍に接続し、「東洋」の外部において「朝鮮」を論じた根底には、彼の文学規定があった。しかし、「東洋」という記号の内実が、日本産東洋言説を想起させる問題的な概念から「まだ共産化していなかった過去の中国」を指示する、より非政治的な概念へと徐々に調整され（金景彩、2015）、それに伴って、帝国日本が構築した「東洋」と朝鮮との差異を明確に示す必要性が縮小した解放以降の状況下においては、「朝鮮的なもの」あるいは「民族的なもの」の具体的な内実を特定することは、「純粋文学」論の内部に矛盾を生んでしまう。なぜなら、前述したように、金東里の「純粋文学」においては、「朝鮮」「民族」のような、特定の時空に限定される主体の名は、現象的＝非本質的なものとして否定されるからだ。

以上の議論をまとめれば、金東里が植民地支配からの解放という時代の要求に応えるために、「純粋文学」論の体系の中で「民族」に無理なく言及できたのは、それを固有の歴史性や象徴性をもたない個別性の単位として処理することによってであった。このような「民族」の論じ方は、金東里の議論と戦時期日本のファシズム化したヒューマニズム論、さらには「近代の超克」論を区別する根拠にもなる。というのは、金東里が文学の純粋性を貫くために文学を他の領域と区別しえない絶対的な概念に純化したとき、「民族」の固有性を語る

³³ Stefan Tanaka (2003) によれば、近代以降の日本において「東洋」は、西洋によって規定された Orient とは区別されるものであり、日本を除いた他の地域（主体）を「日本の不完全な変形」として新たな総体性の中に包摂する役割を果たす概念だった。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてその起源がみられる日本の「東洋」言説は、近代への懐疑的認識が浮き彫りになった 1930 年代中盤以降、いわゆる転換期に際し、西洋（近代）に代わる代案的な価値を有するものとして、積極的な意味が付与されるようになる。

³⁴ 韓壽永 (2010) は、金東里の「朝鮮的なもの」をめぐる議論は、「普遍」への迷妄を「対抗普遍」という別の迷妄に置き換えたため、つまり西洋／東洋という図式に取り憑かれていたため、なぜシャーマニズムが「朝鮮的なもの」の固有な表徴なのか、朝鮮が経験した近代の本質が何であったかについては問うことができなかつたと指摘した。

ことができる場を無意識に消去してしまったからだ。しかし、この金東里の文学論に対して、「他者との共通運命を確認する方向に進んでいると同時に、生活が繰り返される個別の単位を認め、それぞれの単位が平和に共存できるところに至ろうとした思惟」である点でファシズムと異なるという評価（洪基敦、2010）を性急に下してはならない。なぜならば、金東里の文学論と固有性を排除した些細な差異＝「民族」は、ファシズムとは異なる点において主体性の暴力的な抹消の契機を内包しているのである。

固有性を排除した金東里の「民族」＝文学化された「民族」は、政治的な立場の相違を非本質的なものと捉え、「民族」を複数の差異が競合した結果得られる概念としてではなく、一種の自然に近い概念として処理する。つまり、「民族」が生活上の些細な差異の総合に過ぎないのなら、それは概念の臨界や成立の歴史的経緯を問うことのできない、価値判断から自由な真空に置かれるのだ。金東里はいわゆる範例主義的普遍主義 (universalisme exemplariste)³⁵ のように、朝鮮民族を世界的な道義を実現する選ばれた主体として掲げなかったし、また表面上「社会」や「歴史」を否定しなかったが、個人（個性、人間）と「民族」を無媒介に重ねることで、彼が重視していた「人間の主体性」を究極的には否定してしまう。「人間が時代と社会を離れては生きていけないからといって時代と社会が人間そのものであるわけではない」（80）³⁶と彼が書く際にも、人間が「時代と社会」に対して発揮できる政治的な決断、より根本的には人間が「時代と社会」を定礎する政治の領域はそもそも考慮されていないのだ。このように、「民族」の固有性が個人の生活上の些細な差異に還元され、「民族」が政治的決断の場から引き抜かれた主体性なき個人と重ねられることで得られた「文学化された民族」は、「民族」間の対立が激化する1948年以降の時代をも、無理なく潜って行けたはずであろう。これがすなわち、「不在」から「存在」へ移行したナショナル・アイデンティティに即応するようにして、植民地期から解放後にかけて、金東里が「文学化された民族」概念を鑄直した過程である。

無論、これは金東里にのみ見出せる問題ではない。普遍性をあらゆる階級、民族、国家、人類が共有する、「反省」を伴わない共通感覚として捉え、主体を批判の不可能な聖域にしてしまうのは、芸術（文学）を外部なき自律的なも

³⁵ ジャック・デリダが哲学的普遍性とナショナリズムが結びつく現象を説明するために導入した概念である。デリダは、特定の集団や制度を一種の「メシア」として、責任と使命を担った普遍的存在に特権化する傾向を範例主義的普遍主義と規定した（高橋、2015：275-276）。範例主義的普遍主義は、朝鮮戦争勃発後、戦争の意義を「道義的韓国」、「世界史的主体としての韓国」と結びつけて論じた文章の中で多々見られる。

³⁶ 初出「文学的思想の主体とその環境——本格文学の内容的基盤のために」。

のとして絶対視する立場に共通してみられる傾向である。金東里の文学論とその限界をファシズムとは異なる文脈で、すなわち文学の絶対化の系譜の中で読解しなければならぬ理由がここにある³⁷。

5. 終わりに

本稿では、解放直後の朝鮮の思想的状況にアプローチするために、金東里の文学論（「純粹文学」）と「民族」概念（あるいは「朝鮮的なもの」）の関係を「文学化された民族」という観点から分析した。植民地期において金東里が打ち立てた文学論および「朝鮮的なもの」は、現実政治からの批判的距離を確保し、帝國的な普遍言説としての「東洋」に包摂されない外部を模索する実践であった点で、限界とともに一定の可能性を有していた。しかし、「朝鮮的なもの」がもはや帝国との「差異」において語られる必要性が失われた解放後の朝鮮においては、金東里の文学論は外部を持たない全体性へと化す。金東里が唱えた「究竟的生」は人間が生まれ死ぬという人間一般の運命を悟り、その打開のために人間それぞれが努める生のあり方を意味するものだが、文学はそのような生のあり方と一致するものとして提示される。そして従来は「差異」を生み出し、帝國的な（擬似）普遍を問いに付すものであった「朝鮮的なもの」あるいは「民族」概念は、人間一般の運命に符合する形でその意味が調整され、一般性の中に存在する些細な差異として位置付けられるようになる。金東里における文学と「民族」の関係は、ナショナリズムとは別の側面で、解放直後の思想の硬直性を裏付けていたと言える。

金東里の「純粹文学」論とそれにおける「民族」の位相は、植民地期に企てられたある思想が植民地支配からの〈解放〉という歴史的転換を迎えて直面せざるを得なかった困難を露呈している。金東里の文学論からわかることは、植

³⁷ 遡れば「近代文学」が朝鮮に輸入された1900年代初頭から現代に至るまで、文学を絶対化し、文学への批判的問いを容認しない態度は、その都度の時代的な文脈の中で、「朝鮮」「民族」「国民」といった特定の主体性を創り上げる役割を果たしてきた。例えば、1910年代にみられる李光洙の啓蒙的な文学論と金東仁の「美」の対決、1920-30年代のプロレタリア文学批評における政治と文学の問題、4月革命をきっかけに浮上した「純粹と参与」論争、60-70年代のいわゆる新世代文学者たちによって構築されたあらゆる抑圧に対抗できる文学の観念などが挙げられる。これらの議論は、文学の固有性を主張していたという点で共通しているが、それらが構築しようとした主体のあり方においては、時代的な文脈によってそれぞれ異なる様相を呈する。韓国における文学の固有性に関する議論の歴史的流れに関しては、李光鏞（2001）に詳しい。

民地的状況からの脱却が直ちに政治的主体³⁸の〈解放〉には繋がらなかったということである。彼が作り上げた「文学化された民族」から抜け出すためには、再び「民族」を差異化し、単なる一般性ではない普遍性³⁹を模索する必要があった。しかし、そのような普遍性への企図は、次の世代を待たなければならなかったのである。1950年代後半以降、「民族文学」をめぐる議論は新たな展開を迎えるが、その議論が主体の〈解放〉をついに達成したか否かについては、さらなる検討を要する。金東里の文学論と後続世代の「民族文学」論の関係については、今後の課題としたい。

＜参考文献＞

- 李銀珠（2014）「文学に対する期待とルサンチマン——金東里の文学論に対する研究を対象に」『人文学研究』19, カトリック関東大学人文学研究所, pp. 33-60.
- 李光鎬（2001）「文学の呼名——文学の自律性をめぐる理論の年代記」『文学と社会』（2001年8月号）, 文学と知性社, pp. 1083-1097.
- 宇野邦一（2003）『反歴史論』せりか書房
- 柄谷行人（2010）『トランスクリティーク——カントとマルクス』岩波書店
- 金景彩（2015）「民族と国家の間——1950年代の韓国における「東洋」論を巡って」
東京大学大学院総合文化研究科修士論文
- 金コヌ（2008）「金東里の解放期評論と京都学派の哲学」『民族文学史研究』37,
民族文学史研究所, pp. 260-290.
- 金哲（1999）「金東里とファシズム——『黄土記』を中心に」『現代文学の研究』
12, 現代文学研究学会, pp. 247-277.
- 金東里（2013）『金東里文学全集 32 文学と人間』季刊文芸
- 金允植（2003）『日帝末期、韓国作家の日本語創作論』ソウル大学出版部
——（2006）『解放空間、韓国作家の民族文学創作論』ソウル大学出版部
- 高坂正顕（1937）『歴史的世界——現象學的試論』岩波書店

³⁸ ジャック・ランシエール（2005）は、「政治的主体」が特定のアイデンティティの主張ではなく、むしろ同一化されたアイデンティティ——金東里における人間一般の「生」と差異が除去された「民族」もこれにあたる——から離脱し、「不和」を起こすことで可能になると論じた。

³⁹ 一般性と普遍性の違いについては、柄谷行人（2010）に詳しい。柄谷は、カントにおける普遍の問題を分析しながら、単に「経験から抽出」された「個別性」の総合である一般性とは異なり、普遍性は「先取りできない他者」としての未来に向かって個々人が「現在の公共的合意に反して」でも行う実践によって可能になるとした（柄谷、2010：147-151）。

- 小林秀雄 (2002) 『小林秀雄全作品』1, 新潮社
- 申知瑛 (2012) 『不／在の時代——近代啓蒙期および植民地期朝鮮の演説、座談会』ソミョン出版
- ランシエール, ジャック (2005) 松葉祥一他訳 『不和あるいは了解なき了解——政治の哲学は可能か』インスクリプト
- 鈴木貞美 (1996) 『「生命」で読む日本近代——大正生命主義の誕生と展開』日本放送出版協会
- 高橋哲哉 (2015) 『デリダ——脱構築と正義』講談社
- 韓壽永 (2003) 「『純粹文学論』における『美的自律性』と『反近代』の論理——金東里の場合」『国際語文』29, 国際語文学会, pp. 147-176.
- (2010) 「金東里と朝鮮的なもの——日帝末金東里の文学思想の形成構造とその性格について」『韓国近代文学研究』21, 韓国近代文学会, pp. 385-419.
- 廣松渉他編 (1998) 『哲学・思想事典』岩波書店
- 洪基敦 (2010) 「金東里、新しいルネッサンスの企てとその失敗」『ウリ文学研究』30, ウリ文学会, pp. 53-79.
- 鷺田清一 (2002) 『時代のきしみ——〈わたし〉と国家の間』CCCメディアハウス
- スミス, A. D. (1999), 巢山靖司他訳 『ネイションとエスニシティ——歴史社会学的考察』名古屋大学出版会
- Benoit Berthelier (2016) 「生の修辞学——金東里文学に表れた発話戦略としての「究竟」概念」『現代文学の研究』59, 現代文学研究学会, pp. 131-173.
- Tanaka, Stefan (2003). *Japan's Orient: Rendering Pasts into History*, Berkeley: University of California Press.

- ・受付：2021年6月29日
- ・修正：2021年9月20日
- ・掲載：2021年9月30日

近代朝鮮における古典認識について

—『文章』（1939-1941）を中心に—

柳川 陽介（東京外国語大学）

<要旨>

本稿は、文芸誌『文章』を中心に近代朝鮮における古典認識について考察した。『文章』には同時代の文学作品とならび、様々な古典が掲載されたが、そのほとんどはハングルで書かれた作品であり、漢文で書かれた『渡江録』も現代語訳が掲載された。『文章』における古典の範疇には、朝鮮後期に書かれた『恨中録』から開化期の『血斗涙』に至る諸作品が含まれる。しかし文章社編集部は、1910年代後半から1920年代前半に活動した文人に、朝鮮文学の真髄といわれる短編小説の寄稿を求めるなど、文壇の「過去」を想起させる企画もいくつか行っている。その一方、現役作家の新作を一挙に掲載する小説特集号や推薦制度を持続させることで、文壇の「現在」と「未来」に対する配慮も欠かさなかった。

キーワード 『文章』、古典、李泰俊、朝鮮文学史

1. はじめに

本稿は、近代朝鮮において発行された文芸誌『文章』（1939-1941）と古典の関係について論じる。近代以降、朝鮮では様々な定期刊行物が刊行された。とりわけ1920年に創刊された日刊紙の『東亜日報』と『朝鮮日報』、月刊総合誌の『開闢』や、1930年代に新聞社から刊行された月刊誌『新東亜』『新家庭』『中央』『朝光』『女性』『少年』などには、毎号時事関連の記事とともに多くの文学作品が掲載された。『文章』は1939年2月に文芸誌として創刊され、1941年4月の廃刊に至るまで通巻26号が発行された。廃刊号には国策に応じて廃刊するとあるが、これは事実上の強制廃刊であった。この前年には『東亜日報』と『朝鮮日報』が廃刊に追い込まれるなど、朝鮮語による発表媒体が相次いで消滅していた。

『文章』の発行元である文章社は、1938年10月に金鍊萬（生没年未詳）の資金提供により設立された出版社である¹。金鍊萬の生涯は不明な点も多いが、朝鮮原皮販売株式会社の社主を務めるなど、実業家として活躍した人物である。金鍊萬は大学を卒業するにあたり、父親から受け取った大金を教育機関に寄贈しようとしたが、その際に梨花女子専門学校に勤める李泰俊（1904-?）に出会い、出版事業に関心を持ったといわれる。李泰俊は『文章』の主幹として活躍した小説家であり、数多くの小説や随筆を残した。

『文章』には他誌にはみられない幾つかの重要な特徴がある。まず注目されるのが、当時の小説界を俯瞰した特集号である。臨時増刊号として企画された「創作三十二人集」（1939.7）と3巻2号の「創作三十四人集」（1941.2）は、新人から中堅に至るまで、現役文人の作品を網羅した小説特集号であった。多くの雑誌が一度に数編の小説を掲載していた当時の出版事情を踏まえると、こうした企画が如何に異例であったか分かる²。次に、創刊号から実施された新人推薦制が挙げられる。この制度は詩、時調、小説の三部門から構成されており、それぞれ鄭芝溶、李秉岐、李泰俊を選者に立て、三度の推薦を受けることで登壇できる仕組みであった。実際に新人推薦制を経て多くの新人作家が登壇した。こうした特徴が文壇の現状整理と新人の発掘、すなわち「現在」と「未来」に関するものとするれば、古典の再掲載は「過去」に焦点を当てた企画といえる。

『文章』には、創刊号から朝鮮時代にハングルで書かれた『恨中録』³や、各種テキストに詳註を加えた李熙昇「朝鮮文学研究抄」が掲載されるなど「過去」の作品に対して強い関心を示していた。創刊一周年を迎えると「特別付録」や「附録」という名称のもと、様々な古典が再掲載された。

『文章』に関する研究は、概説的なものから新人推薦制に関するものまで幅広く行われている。とりわけ本稿の議論と関係するのが、『文章』と古典の意味を考察した研究である。정주아（2007）は小説や随筆にあらわれた古典の意味に着目する一方、차승기（2009）は推薦制度の選者を務めた鄭芝溶、李秉岐、李泰俊を通して『文章』の「朝鮮」認識について論じた。そのほかに新人推薦制の実態については、이봉범（2007）に詳しい。新人推薦制を経て登壇した文

¹ 文章社の概要については야나가와 요스케（2019：12-13）の記述を参照した。

² このほかに1941年6月頃『現代短篇文学選』を出版する計画が進められていたが、廃刊により実現には至らなかった。同書は朝鮮文学の「精金美玉」である短編小説を集めた菊版の「豪華本」であり（「余墨」『文章』1941年3月）、金東仁、林和、兪鎮午、崔載瑞、白鉄、李源朝、李泰俊の合同編輯で準備されていた（『文章』1941年4月、誌面広告）。

³ 現在の韓国では一般的に「閑中録」と称されるが、本稿では『文章』にならい「恨中録」に統一する。정병실（2008：176）によれば、長らく「恨中録」が用いられてきたが、朝鮮時代の書名の付け方に従うと「閑中録」が適切であると指摘している。そのほかに「閑中録」という名称もあるという。

人に、朴南秀、金鍾漢、趙芝薫、朴木月、朴斗鎮、曹南嶺、林玉仁、池河連などがいる。上記の研究は、『文章』と古典の関係に注目した先駆的なものとして評価されるが、文学史観という観点から『文章』の作品を再構成したものではない。新小説から李光洙・金東仁、そして『白潮』に至る文学史と『文章』の関係論を論じた研究は、まだ行われていない。

本格的な議論に先立ち、文学における「古典」の概念について言及する必要がある。古典という言葉や概念自体は古くから存在するが、本稿の問題意識と関連して重要なのは、近代以降に再編成を経て「創造された古典」という見方である。ハルネ・シラオ（1999：13-45）は古典を近代以降に創造されたものと見做し、テキストに権威が付され古典として定着する過程を考察している。テキストの内容に限らず、その価値が再生産される諸制度や、社会的背景を視野に入れた研究方法は、『文章』と古典の関係を考察する上でも有用である。なぜなら『文章』に掲載された古典作品の傾向を通して、李泰俊をはじめとする文章社編集部が文学史に対する認識を推察できるためである。

1930年後半の朝鮮では、実証科学の手法を身に付けた朝鮮人知識人を中心に、学術的な性格を帯びた朝鮮学が出現していた。とりわけ朝鮮出版界では、原典批評がなされた古典が文庫本として出版され、朝鮮の読者層の間で広く享受された。趙寛子（2007：110-144）が指摘するように、日中戦争が本格化する当時の朝鮮では、思想統制と同化政策が強化されていたが、その一方で古典復興の熱気は高まっていたのである。こうした動きは、近代以前の文学作品が古典として再編成される過程として解釈可能である。『文章』の編集方針も多分にその影響下にあった。ただ毎号古典を載せるという方針は『文章』特有のものであった。

上述した問題提起を踏まえ、本稿では『文章』にあらわれた古典の意味について考察する。はじめに、『文章』に掲載された古典の傾向と特徴について考察する。その上で、主幹・李泰俊の文章を手掛かりに『恨中録』の価値が見出された背景と、朝鮮近代文学の先駆者ともいわれる文人との関係に着目する。『文章』が近代文学の第一世代ともいえる文人に原稿を依頼していた事実は、先行研究ではほとんど言及されていない。しかし、これは『文章』の古典認識を把握する際に重要な意味を帯びる。

2. 活字化された古典

2.1 漢文古典の是非

『文章』には、同時代の文学作品だけではなく、近代以前に書かれた作品も多数掲載された。創刊号から連載された『恨中録』や、『仁頭王后伝』と『渡江

録』、附録として掲載された「古時調選」や『春香伝』など諸作品が活字化され、朝鮮の読者に享受された。この背景に 1930 年代の朝鮮で活発化した古典復興の動きがあったことは、先述の通りである。では、文章社編集部はどのような基準で古典を選んでいたのであるのか。『文章』に掲載された古典作品は、次の通りである。

表 1 『文章』に掲載された古典作品一覧⁴

発表年	作品名	備考
1939. 2-1940. 1	恨中録	李秉岐註、12 回連載
1939. 10-1940. 12	渡江録	李允宰訳、10 回連載
1940. 2-9	仁顕王后伝	李秉岐註、6 回連載
1940. 2	血斗涙	李人植著
1940. 3	古時調選	李秉岐選
1940. 4	鼠大州伝	白文のみ掲載
1940. 5	兎鱉歌	가람 (李秉岐) 解説
1940. 7	鳳山仮面劇脚本	宋錫夏解説
1940. 9	巫覡의 神歌	孫晋泰解説
1940. 11	要路院夜話記	李秉岐註
1940. 12	春香伝	「卷之全」
1941. 1	春香伝	「卷之上」
1941. 3	春香伝	「卷之上」
1941. 4	春香伝	「単」

『文章』に掲載された古典は、小説から仮面劇の脚本、神歌に至るまで多岐にわたるが、それらの大部分はハングルで書かれていた。漢文で書かれた作品は、朴趾源の『渡江録』（『熱河日記』所収）と作者未詳の『鼠大州伝』のみであった。『鼠大州伝』は白文が掲載されたが、『渡江録』は李允宰による朝鮮訳が連載された。当時の朝鮮では、朝鮮文学の範囲をめぐる議論が活発に行われていた。「漢文古典是非」の核心は、朝鮮文学に漢文による作品を含めるか否かであった。その背景には三ツ井（2010：337）が指摘したように、近代以降、漢字／漢文との地位の転換によりハングルの価値が高められたことが挙げられる。とりわけ 1930 年代の朝鮮語学会をはじめとする朝鮮学運動が大きな影響を与えた。後述するように、こうした認識の変化が『恨中録』の再評価とも直結する。

『文章』の「新春座談会－文学의 諸問題」（1940. 1）では、「漢文古典是非」が独立した項目として登場する。出席者の意見は、漢文を含めるべきという点

⁴ このほかに附録として朝鮮語学会発表「外来語表記法」（1940. 7）と李秉岐「朝鮮語文学名著解題」（1940. 10）が掲載されたが、古典ではないため一覧から除外した。

で一致している。『渡江録』が「朝鮮漢文古典」として取り上げられた理由も「漢文古典是非」と深く関係していた。李允宰は文章社からの要請を受け、愛読書であった『渡江録』の翻訳に着手したと述べている（李允宰「渡江録（1）」『文章』1939年11月）。朝鮮語学者として漢文の素養も兼ね備えた李允宰は『渡江録』の翻訳にふさわしい人物であった。『渡江録』は10回にわたり連載され、解放後には単行本として刊行された。

一方『鼠大州伝』は「純漢文朝鮮小説」として白文のみ掲載された。신해진 (2006)によると、朝鮮時代に書かれた『鼠大州伝』は「鼠類訟事型寓話小説」に分類される作品であり、『文章』に掲載されたテキストが現存する唯一のものだという。『鼠大州伝』は訴訟の発生から解決に至る過程を扱った物語だが、注目されるのは掲載に至った経緯である。編集後記によれば、『鼠大州伝』は編集者が古書籍商から偶然手に入れ、内容が興味深いという理由で掲載が確定したという（「余墨」『文章』1940年4月）。そのため附録として掲載された作品が、無作為に選定されていた可能性も考えられるが、あくまで『鼠大州伝』が例外であった。これは李秉岐「古時調選」の序にあるように、編集部から突然の依頼を受け作業に取り掛かったという記述（가람「序言」『文章』1940年3月）や、『渡江録』の翻訳を李允宰に依頼した事例からも確認できるだろう。

2.2 『恨中録』を取り巻く諸問題

『恨中録』や『仁顕王后伝』をはじめとする朝鮮時代の古典の場合、筆写本の内容を検討した上で専門家が語釈を施す必要があった。『文章』に掲載された古典の校注は誰が担ったのだろうか。『鳳山仮面劇脚本』と『巫覡斗神歌』の校注は例外的に解説者の宋錫夏と孫晋泰により行われたが、そのほかの古典の校注の多くは、原典の所有者である李秉岐が担当した。『恨中録』と『仁顕王后伝』は原典の提供を含め、李秉岐の全面的な協力を得て『文章』に掲載されたのである。『恨中録』と『仁顕王后伝』は1930年代に書かれた朝鮮文学史では全く言及されなかったが、解放後の韓国では朝鮮後期を代表する小説として評価され現在に至る⁵。これは『文章』を通してテキストが活字化されたためである。

⁵ 解放後の韓国における『恨中録』研究については정명실 (2008 : 173-176) を参照。朝鮮民主主義人民共和国における『恨中録』研究については不明な点も多いが、1960年代に単行本『한중록. 인현 왕후 전』(조선문학예술총동맹출판사, 1965년)が刊行されている。同書は朝鮮時代の女性文学をまとめたものであり、『恨中録』以外に『仁顕王后伝』『祭針文』『閨中七友争功論』が収録されている。『恨中録』の底本に関する言及はないが、章立てなどを対照すると李秉岐註解『恨中録』(白楊堂, 1947年)を参照したと考えられる。『仁顕王后伝』についても、李秉岐註解『仁顕王后伝』(博文書館, 1946年)を底本にしている可能性が高い。今後さらなる研究が必要である。

『恨中録』は創刊号から12回にわたり連載されたが、1940年1月に突然打ち切りとなる。思悼世子の葬儀に差し掛かったところで、連載はなぜ中断したのだろうか。従来の研究では『恨中録』が連載された事実を強調する一方、中断に至った経緯について顧みられることはなかった。だがイ병기(1976:505)は1939年12月24日の日記に、『恨中録』の内容がつまらないという理由で、連載が打ち切られたと書いている。つまり編集部の意図とは異なり、『恨中録』は当代の読者にさほど受け入れられなかったのである。そのため創刊一周年を迎えるにあたり、編集部は『仁頭王后伝』の連載を新たに始めたと考えられる。『仁頭王后伝』は中断することなく最後まで連載が続いた。

『恨中録』は、文学史的評価が未確定であったため、一部の専門家から「真贋」をめぐる問題が提起された。評論家の李源朝は『恨中録』を「真作」とみるならば、その根拠を明示すべきだと主張する(李源朝「二月創作評(3)」『朝鮮日報』1939年3月2日)。同評論では、以前から『恨中録』が「贋作」と喧伝されていたことにも言及されている。李源朝の指摘を受け、李秉岐は『文章』に「典故真贋論」(1939.5)を発表する。李秉岐は『恨中録』を恵慶宮洪氏の「真作」とする見解と、その弟である洪楽任の「贋作」とする見解があることに触れつつ、「真作」とする理由として、次の二点を掲げる。ひとつは、思悼世子との日常を綴った部分が洪楽任の死後に完成している点であり、もうひとつは、外部の人間が到底知り得ない宮中の事情や語彙が駆使されている点である。上記の理由から『恨中録』が恵慶宮洪氏の著述ではなく、第三者の手によるものならば、さらに驚くべきことだと結論付ける。つまり宮中での生活経験があり、なおかつ壬午禍変に直面した恵慶宮洪氏でなければ『恨中録』を書き得なかったというのである。李秉岐は別の文章においても、恵慶宮洪氏が経験した数々の不幸が『恨中録』という作品を生み出したと指摘している(李秉岐「恵慶宮洪氏」『朝鮮名人伝』3, 朝鮮日報社出版部, 1939年)。その後「真贋」をめぐる議論は沈静化し、今日に至るまで恵慶宮洪氏の著述と考えられている。

2.3 「古典」としての『血斗涙』

次に、李人植の『血斗涙』が古典として掲載された背景について考えてみたい。『血斗涙』は、創刊一周年を記念して掲載された。新小説の嚆矢ともいわれる『血斗涙』が古典に分類された理由は、近代文学への過渡期に発表されたためと考えられる。編集後記では李人植を「古代小説と現代小説の橋渡しとなった者」(「余墨」『文章』1940年2月)と位置付けている。このような位置付けは、当時の文学史研究の成果を反映したものであった⁶。1930年代の文学史

⁶ 李人植について、金台俊は「文学運動의先駆」と評価する一方(金台俊『増補版朝鮮小説

研究では、李人植の作品は文体や主題上、李光洙以降の文学史に直結する古典として評価されていたのである。

掲載に至ったもう一つの大きな理由として、当時の出版状況が挙げられる。再び編集後記をみると、『血斗涙』は貴重な作品であるにも関わらず、長らく絶版であったため全文掲載に踏み切ったと書かれている（「余墨」『文章』1940年2月）。つまり文学史的な意義が認められているにもかかわらず、作品に接することが難しいため、全文の掲載に踏み切ったのである。강현조（2007: 98-99）は『文章』に再掲載されたことで、林和が初めて『血斗涙』を一読できたと指摘している。これにより『血斗涙』は林和の「新文学史」に書き加えられたのである。1930年代後半の朝鮮出版界では一部の出版社から文学全集が刊行され、文庫本の短編小説選も登場した。しかし依然として近代文学の第一世代の作品や、それ以前の文学作品に触れることは容易でなかった。新聞や雑誌に掲載された作品をスクラップしなければ、再読さえ困難な状況であった。

3. 李泰俊の文学史認識と『文章講話』

『文章』に掲載された諸作品の傾向から、どのような特徴が浮かび上がるのだろうか。本稿では文章社編集部という表現を用いてきたが、『文章』の編集方針は実質的に主幹の李泰俊と李秉岐を中心に決められていたと思われる。編集後記には、李泰俊、金鍊萬、吉鎮燮、鄭人澤、趙豊衍など執筆者名が明記されている場合もあり、上記の5人が編集に携わっていたことが確認できる。出資者の金鍊萬と、表紙画や挿絵を担当した画家の吉鎮燮以外はいずれも文人だが、創刊準備の段階から主幹であった李泰俊が編集方針を定め、鄭人澤と趙豊衍が実務を担当していたといえよう⁷。李秉岐は編集には直接加わらなかったが、『恨中録』や古時調の校注を通じて『文章』の方向性を決定づけた。

では、李泰俊が考える朝鮮文学史とは、具体的にどのようなものなのだろうか。1930年代の李泰俊は小説家として活動する傍ら、専門学校で朝鮮語の講義を担当していた。講義は作文や童話の創作方法に関するものであった。注目すべきは、授業教材用に作成された文章論が「文章講話」として『文章』に発表された点である。創刊号から9回にわたり連載された「文章講話」（1939. 2-10）

史』学芸社、1939年）、林和は李光洙と同じ系譜に属する作家と位置づけている（林和「続新文学史」『朝鮮日報』1940年2月2日-5月10日）。

⁷ 鄭人澤は創刊当初から編集に携わったが、1940年秋に趙豊衍との入れ替わりで文章社を辞めている（「余墨」『文章』1940年10月）。

は、同誌に発表された「文章의 古典、現代、言文一致」(1940. 3)とあわせて、1940年4月に文章社から単行本として刊行された。その内容は文章作法の意義から推敲の方法、対象の捉え方、文体に至るまで体系的に整理されている。随所に引用された文範は、ハングルで書かれた多様な文体のアーカイブであり⁸、単行本の巻末には文範の索引もついている。

『文章講話』の第9講「文章의 古典과 現代」は、題名が示唆するように文章の古典と現代に関する項目である。ここでいう古典に、漢文作品は一切含まれていない。李泰俊はハングルで書かれた古典のなかでも『恨中録』を高く評価している。その理由は『恨中録』が「独立」した文章で書かれているためであった⁹。これは朗読や唱のために記録された『春香伝』『興夫伝』『沈清伝』と異なり、『恨中録』が内簡体で書かれた散文であることに起因する。李泰俊は意味よりも音に忠実な『春香伝』をはじめとする古典が、朝鮮の散文の「発達」が遅れた病弊の一つであると批判する一方¹⁰、声の文化から「独立」した文体により書かれた『恨中録』を評価したのである。

『恨中録』に対する李泰俊の評価について、배개화(2009: 293)は李秉岐の文学研究の影響が指摘されている。そもそも筆写本のみ存在する『恨中録』の活字化が、李秉岐の協力により実現したことを踏まえると、両者の影響関係は明白であろう。李秉岐が『恨中録』を評価した最大の理由は、内簡体と称される文体にあった。内簡とは朝鮮時代に宮中を中心とする女性が交わした書簡であり、内簡体はその際に用いられた文体を指す。朝鮮時代は使用文字の棲み分けがあり、のちにハングルと称される「諺文」は女性が専用する文字であった¹¹。李秉岐は内簡体の特徴として「典雅」な言葉が多用されている点を挙げる(李秉岐「解説」『文章』1939年2月)。この特徴は、韻律があり猥談の混ざる歌詞体とは対照的であった。歌詞体は朗読や唱、すなわち『春香伝』などに使われた文体である。

一方、류준필(1998: 293)は李秉岐が数あるハングル作品のなかから『恨中

⁸ 문혜윤(2020: 197)によると、解放期の作文教材である朴泰遠『中等作文』(正音社、1948年)には『文章講話』に掲載された小説や随筆が再引用されているという。こうした事実は『文章講話』が一種のアンソロジーとして機能したことを裏付ける。

⁹ 이태준(1940: 317)

¹⁰ 이태준(1940: 99)ただ、李泰俊はあくまで文字として記録された『春香伝』を批判するにとどまり、作品性を否定したわけではない。同時期に書かれた別の文章では、소리(소리)として耳で聞く『春香伝』を高く評価している。その理由は小説として読む際に生じる一連の不自然さが、ソリではすべて解消されるためと説明される(李泰俊「通俗性其他」『文章』1940年9月)。そのほかにも附録として『春香伝』を掲載するにあたり、李泰俊は「わが古典のなかで最も偉大」(「余墨」『文章』1940年10月)であると評価している。

¹¹ 朝鮮時代の使用文字の棲み分けについては、伊藤(2010: 153-157)を参照。

録』を評価した理由として、文体以外に個人の内面が具体的に記されている点を指摘する。この指摘を踏まえて、『春香伝』や『興夫伝』を「現代人の小説観念からは極めて遠く離れている」（李泰俊「朝鮮의小説言」『無序録』博文書館，1941年）と批判した李泰俊の見解を再考すると、『恨中録』は「現代人の小説観念」、すなわち個人の内面が描かれているため評価されたことが分かる。つまり『恨中録』の重要性が再認識された背景には、文体だけでなく内容も深く関係していたのである。

4. 呼び戻された第一世代の作家たち

『文章講話』の第9講は、前半で「文章の古典」に触れた上で、後半以降は「文章の現代」として開化期から1930年代に至る文体の変遷を扱っているが。その変遷過程は、書き下し文のように適宜助詞を補った「半翻訳運動」、漢字語を全廃し固有語のみで書かれた「言語浄化運動」、崔南善が大胆にも試みた言文一致の文章を経て、李光洙の『無情』以降の長編と金東仁の短編により言文一致が完成したと説明される¹²。その後、言文一致に基づいた様々な文体が登場したが¹³、とりわけ1930年代に活躍した李箱や鄭芝溶、朴泰遠は、個性的な文体を創出した作家として紹介される¹⁴。いずれも朝鮮のモダニズム文学を代表する作家であり『文章』にも作品を多数発表した。

『文章講話』で整理された文体の変遷過程は、決して特異なものではない。ただ『文章』の特徴を踏まえると、李光洙や金東仁をはじめとする近代文学史の第一世代への待遇は注目に値する。文学史の叙述において、時代区分は重要な要素の一つである。本稿では1910年代中盤から1920年代前半に作家として頭角を現した李光洙や金東仁を、便宜上第一世代と捉える。こうした認識は『文章』の主幹である李泰俊をはじめ、1930年代に活躍した小説家の間でも共有されていた¹⁵。

¹² 이태준 (1940 : 324-325)

¹³ 李泰俊が構想する朝鮮文学史には、1920年代中盤に勃興したプロレタリア文学がほとんど含まれていない。これは『文章講話』の文範に、プロレタリア作家の文章がほとんど引用されていない点と合わせて考察すべき問題である。もちろん朝鮮のプロレタリア作家である李箕永、崔曙海、金基鎮の文章も引用されているが、その内容はいずれもプロレタリア文学とはほど遠いものであった。つまり李泰俊はプロレタリア作家そのものではなく、その文章から距離を置いたといえる。『文章』の巻頭に、韓雪野や李箕永の作品を掲げたことがその証左である。

¹⁴ 이태준 (1940 : 326)

¹⁵ 「世代」を中心とする直線的な文学史観は、作家や作品の取捨選択を経て形成されたもの

こうした認識を踏まえると、『文章』の創刊号と第二号の巻頭作品に、李光洙の「無明」と金東仁の「金妍実伝」が掲載された点は非常に興味深い。「無明」は病人監房を舞台とした一種の転向小説であり、「金妍実伝」は新女性・金妍実の末路を描いた作品である。『文章』の創刊当時、李光洙と金東仁は文壇の第一線から離れていた。李光洙は同友会事件により収監を強いられた際に、持病が再発し病床にあった一方、金東仁は野談を中心に創作活動を行っていた。このように文壇の表舞台から退いた作家に対して、文章社編集部は短編小説の執筆を依頼したのである。『文章』の巻頭には、代表的なプロレタリア作家である李箕永と韓雪野の作品も掲載された。巻頭を飾った作家のなかでも、とりわけ金東仁に対する関心の高さは「創作三十四人集」における位置づけから確認できる。同特集に掲載された「잡주름」は「金妍実伝」の続編にあたる作品だが、未定稿であるにも拘わらず巻頭に掲載された。編集後記には、金東仁を省きたくない編集者の強い思い入れから¹⁶、未定稿として掲載に踏み切った経緯が書かれている（「余墨」『文章』1941年2月）。そのほかに、文章社からは金東仁の作品集『徘徊』（1941）も刊行されている¹⁷。

執筆依頼のほかに、『文章』はインタビュー企画と特集を通して1920年代の文学に注目している。「沈黙의 巨匠－玄鎮健氏의 文学縦横談」（1939.11）は、1920年代に短編作家として活躍していたにも拘わらず、その後は「沈黙」を続ける玄鎮健へのインタビュー記事である。この時期に玄鎮健は長らく勤めた新聞社を辞め、養鶏業を営んでいた。もちろん文筆活動を完全に辞めたわけではなく、新聞に長編小説を連載していたが、玄鎮健は過去の人物として認識され

である。例えば和田（2007：127-128）は、開化期文学（李人植）と近代文学（李光洙以降）の区分が必ずしも明瞭ではない点を指摘し、その根拠として、李光洙の『無情』（1917）が前近代的な物語の流れを受け継いでいる点を挙げている。こうした指摘は重要だが、本稿では『文章』を中心に、朝鮮文学史が構築される過程を検証するため、李光洙や金東仁を第一世代と見做す。その根拠として新聞に掲載された「檄！胸襟을 열어 先輩에게 一彈을 날림」（『朝鮮中央日報』1934年6月17日-29日）について触れたい。この企画は、朴泰遠や金起林など文学団体・九人会の会員が、李光洙や金東仁、玄鎮健など文壇の「先輩」に、自身の思いを訴えたものである。内容を分析した현순영（2017：124-128）によれば、彼らは一世代前の諸作家が通俗的な長編小説ではなく、芸術的な短編小説を創作することを望んだという。このように創作活動を始めて間もない青年作家たちは、「先輩」に続く集団として自己規定していた。

¹⁶ これには主幹・李泰俊の意向が強く反映されていたと考えられる。李泰俊は「新文芸の遺産が赤貧なわが文壇」（尚虚「金東仁의 短篇集 『감자』」『朝鮮中央日報』1935年3月14日）において、金東仁の作品は最も重要であると評している。

¹⁷ 文章社からは、朴泰遠『小説家仇甫氏의 一日』（1938）や李秉岐『嘉藍時調集』（1939）など7冊の単行本が刊行された。金東仁以外の著者は、いずれも推薦制の選者など文章社と関係の深い人物ばかりであった。

ていた。玄鎮健への質問は「沈黙」を続ける理由から、現文壇に対する認識まで多岐に及んだ。「沈黙」の理由については明言を避けたが、玄鎮健に「再出発」を求めたことは明らかである。ここでいう「再出発」とは、作家として再び短編小説を創作することを意味した。ただ玄鎮健は小説の代わりとして『文章』に評論「歴史小説問題」（1939.12）を発表するだけであった。

こうした編集方針は『白潮』（1922-1923）特集を試みた点からもうかがえる。『文章』1940年12月号には、夭折した羅稻香の草稿の入手を契機として、『白潮』同人の新作が一斉に発表される予定であった（「余墨」『文章』1940年11月）。しかし、実際には羅稻香の「未定稿長編（遺稿）」¹⁸と月灘の解題「稻香의 人物斗 作品」、そして朴鍾和の小説「아랑의 貞操」が掲載されるにとどまった。月灘は朴鍾和の雅号であるため、そのほかの『白潮』同人の作品は掲載されなかったことになる。その理由について、이봉범（2007：112）は検閲により掲載が阻まれた作品があったためと指摘している。『文章』と検閲の関係については不明な点も多いが、少なくとも『白潮』特集を準備する過程で、企画の大幅な変更を迫られたことは事実である。同特集の企画意図については、『白潮』時代は混乱を極める植民地末期の朝鮮において再吟味に値する時代であり、文学史に不可欠な「その前夜（그 전날 밤）」であるためと説明される（「余墨」『文章』1940年12月）。ここでいう「前夜」とは『白潮』時代を経て朝鮮近代文学が本格的に始動したということの意味する。

では『文章』はなぜ近代文学史の第一世代に原稿を依頼したのだろうか。様々な理由が考えられるが、少なくとも創刊に際して李光洙と金東仁の作品を巻頭に載せたことは、象徴的な意味合いを帯びていた。『文章』は単に同時代の作品を載せる媒体ではなく、朝鮮近代文学史の流れを汲むことを文壇内外に示すために、李光洙と金東仁を必要としたのである。とりわけ新人作家から中堅まで文壇を網羅した「創作三十四人集」に、金東仁の作品を何としても載せようとした編集者の姿勢は注目に値する。そのほかに植民地末期という時代状況も合わせて考慮する必要がある。1940年には『東亜日報』と『朝鮮日報』が廃刊に追い込まれ、一部の作家は日本語創作を並行して行うなど、次第に朝鮮語による創作が困難になっていた。こうした時代のなかで、かつて文壇を牽引した諸作家に「再出発」を促す行為は、朝鮮文学の多様性を読者に再認識させることにつながったのである。附録として掲載された古典作品も同様の役割を担っていた。

¹⁸ このほかにも『文章』には李箱や金裕貞の「遺稿」が掲載されたが、それらはいずれも作家の死後に発見された草稿を活字化したものである。

5. おわりに

最後に『文章』における「朝鮮」の意味について考えたい。上述のように、当代の文学作品とともに古典を重視する雑誌の編集方針は、李秉岐の全面的な協力により支えられていた。李泰俊が『春香伝』の偉大さに感嘆する一方で、『恨中録』を激賞した最大の理由は、典雅な内簡体で書かれていたからであった。こうした評価は李秉岐の見解を踏襲するかたちで提出された。朝鮮時代の閨房で使用された内簡体は、近代以降、漢字／漢文に代わりハングルの地位が高まるなか、朝鮮を代表する文体として新たな価値が見出されたのである。これは朝鮮学運動によりハングルの価値が「再発見」される過程で起きた変化であった。

李泰俊や李秉岐が、内簡体に「朝鮮」の美を見出したことは明らかである。その一方で、『文章』の周辺で活躍する文人たちが、朝鮮時代の士大夫文人に文化的アイデンティティを求めたことに注目したい¹⁹。李泰俊をはじめとする文人や画家は、朝鮮後期の士大夫文人に倣い、書画骨董の蒐集と鑑賞を趣味として享受していた。『文章』の表紙には、筆や文机の並ぶ文房風景や山水画が多く描かれたが、これは士大夫文人とその文化への憧れを如実に示している。創刊号の編集後記のなかで、李泰俊は出版物の最終的な価値は表紙の装丁により決まると述べている（「余墨」『文章』1939年2月）。朝鮮後期の士大夫文人の生活は李泰俊が考える「朝鮮」そのものであり、『文章』の目指すところであった。

こうした事実を踏まえれば、『文章』における「朝鮮」とは『恨中録』の内簡体と士大夫文人への憧れの上に成立していたことが分かる。本来ならば併存し得ない内簡体（宮中文化）と漢文（士大夫文化）が、『文章』では「朝鮮」の象徴として認識されたのである。ステファン・タナカ（1999：64-66）が指摘したように、これは通時的関係にある過去と現在が「脱共時化」と「再共時化」を経て、共時的な関係へと再構成された結果であった。『文章』が刊行された1940年前後の朝鮮では、日中戦争の本格化とともに思想統制が強まり、言語としての朝鮮語の存続が危ぶまれていた。朝鮮語の諸媒体が相次いで廃刊に追い込まれるなか、『文章』は当代の文学だけではなく朝鮮文学の「過去」と「未来」を俯瞰する編集方針を採った。その最たる例は、古典の掲載と推薦制度の運営だが、上述のように近代文学の第一世代に対しても「再出発」を促した。これは朝鮮文学史を単に「過去」として葬るのではなく、作品の発掘と再評価

¹⁹ 『文章』の周辺の人物、朝鮮時代の士大夫文人に文化的アイデンティティを求めたことについては、柳川（2021）を参照。

により「未来」に残すことを意味した。李光洙と金東仁の新作に往時の先駆性が希薄であっても、「先輩」作家として寄稿を求めること自体に意義があった。『文章』における古典には、研究対象ともいえる近代以前の作品だけでなく、言文一致を完成させた第一世代の作家も含まれていたのである。

<参考文献>

- 伊藤英人(2010)「朝鮮半島の書記史—不可避の自己としての漢語」『続「訓読」論—東アジア漢文世界の形成』中村春作・市來津由彦・田尻祐一郎・前田勉(編) 勉誠出版, pp. 143-161.
- ステファン・タナカ(1999)「見いだされたもの—日本と西洋の過去としての日本美術」『今、日本の美術史学をふりかえる』東京国立文化財研究所, pp. 59-70.
- 趙寛子(2007)『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環—ナショナリズムと反復する植民地主義』有志舎
- ハルネ・シラオ(1999)「創造された古典—カノン形成のパラダイムと批評的展望」『創造された古典—カノン形成・国民文学・日本文学』ハルオ・シラネ・鈴木登美(編) 新曜社, pp. 13-45.
- 三ツ井崇(2010)『朝鮮植民地支配と言語』明石書店
- 柳川陽介(2021)「朝鮮人蒐集家たちの書画骨董認識—一九三〇—四〇年代を中心として」『韓国朝鮮の文化と社会』20, 韓国・朝鮮文化研究会, 近刊
- 和田とも美(2007)「近代朝鮮の流行小説—読者によって形成される文学史」『韓国語教育論講座』4, 野間秀樹(編) くろしお出版, pp. 123-142.
- 강현조(2007)「〈血의 涙〉 판본 연구—형성과정 및 계보에 대한 비판적 고찰을 중심으로」『현대문학의 연구』31, 한국문학연구학회, pp. 91-118.
- 류준필(1998)「이병기 국문학연구의 체계와 특성」『한국문학논총』22, 한국문학학회, pp. 279-303.
- 문혜운(2020)「해방기 박태원의 문장론」『현대소설연구』77, 한국현대소설학회, pp. 177-208.
- 배개화(2009)『한국문학의 탈식민적 주체성』창비
- 신해진(2006)「〈鼠大州傳〉 해제 및 역주」『고전과 해석』1, 고전문학한문학회 연구회, pp. 235-282.
- 야나가와 요스케(2019)「『문장』과 미술—1930년대 전위예술가를 중심으로」『구보학보』21, 구보학회, pp. 9-40.
- 이병기(1976)『가람일기』2, 정병욱・최승범 편, 을유문화사
- 이봉범(2007)「잡지 『문장』의 성격과 위상」『반교어문연구』22, 반교어문학

회, pp. 105-137.

이태준 (1940) 『문장강화』 문장사

정병설 (2008) 「『한중록』의 신고찰」 『고전문학연구』 4, 한국고전문학회,
pp. 171-198.

정주아 (2007) 「『문장』 지에 나타난 ‘고전’의 의미 고찰」 『규장각』 31, 서울
대학교 규장각한국학연구원, pp. 307-327.

차승기 (2009) 『반근대적 상상력의 임계들—식민지 조선 담론장에서의 전통·세
계·주체』 푸른역사

현순영 (2017) 『구인회의 안과 밖』 소명출판

• 受付 : 2021 年 7 月 31 日

• 修正 : 2021 年 9 月 20 日

• 掲載 : 2021 年 9 月 30 日

朝鮮時代に 쓰여진 『老乞大』 諺解類에 관한 考察

— 『老乞大』 諺解類의 慣用表現을 中心으로—

金 美順 (關西大学大学院博士後期課程)

<要旨>

本研究は朝鮮時代に書かれた『老乞大』諺解類の文献に現れた慣用表現の文章的特徴を研究することが目的である。朝鮮時代の初級中国語の会話書として最も権威的に使われた『老乞大』には107の文段におよそ18の慣用表現の用例が書かれていた。その慣用表現に現れた特徴は、慣用表現の始まりの部分に、原文では「常言道」で一貫して書かれた例が諺解文では、表記法が文章の中でそれぞれ異なっており、また通時的にも異なった表記法で書かれていたことが分かった。そして原文で書かれた慣用表現が諺解文では書かれなかった例もあり、原文自体が時代によって少しずつ変わって書かれていたことが窺えた。

また、朝鮮語の慣用表現ではあまり現れないような文章の形式的特徴として対句の技法が本研究対象に多く使われていたことも明らかにした。

키워드 노걸대, 번역노걸대, 노걸대언해, 관용 표현, 속담

1. 들어가며

조선시대에 중국어를 가르치는데 있어서 회화서였던 문헌이 있었다. 『노걸대』와 『박통사』이다. 그 양서를 살펴보면 초급 교재의 『노걸대』에는 107의 스토리에 관용 표현이 18가지의 관용 표현이 쓰였었고, 중급 교재의 『박통사』에는 106의 스토리에 무려 70가지 이상의 관용 표현이 쓰여 졌었다는 것을 알 수 있었다. 그 회화서가 조선시대에 유명한 언어 학자가 한글로 번역하였다. 쉽게 말하자면 옛 한글이라고도 할 수 있으며, 전문 용어로 언해문이라고 한다.

그 양서 중에 본 논문에서는 『노걸대』 언해류의 문헌에 나타난 관용 표현의 통사적 특성을 살펴보는 데 그 목적이 있다.

국어사를 시대적으로 구분할 때 고대국어, 중세국어, 근대국어, 현대국어로

구분하는데, 본 연구에서는 중세와 근대국어를 중심으로 한 언해문에 나타난 관용 표현에 관하여 살펴보고자 한다.

2. 선행연구

본 연구에서 연구 대상을 관용 표현을 중심으로 한다고 1 장에서 밝혔다. 그러나 중세나 근대 국어에서는 관용 표현이라는 표현보다는 속담으로 많이 불리어진다. 중세와 근대 국어, 그리고 현대 국어에서 관용 표현과 속담의 차이는 어떤지 알아보자. 중세나 근대 국어에서 속담에 관한 선행연구는 현대 국어의 연구에 비해 적은 편이다. 그 중에서 문금현(1996)은 관용표현의 생성 배경과 유래, 생성과정 및 변천과정, 그리고 신생과 소멸에 관해 밝힌 바가 있다. 현대 국어에서 속담에 관한 연구로 김경렬(2017)은 한국어 교육을 위해 활용되는 속담의 문장·의미적 특성에 관하여 연구하였는데, 한국어 문법 교육에 속담을 활용하는 목적으로 연구되었다.

국립국어원의 『표준국어대사전』에 속담은 옛적부터 민간에 전해져 온 쉬운 격언과 잠언 또는 속어라고 했다. 그리고 관용 표현은 두 가지 이상의 단어가 고정적으로 결합하여 새로운 의미를 만들어 낼 경우 그 단어 구성에 이르는 말이라고 한다. 사전의 정의를 근거로 속담의 정의에 대해 고찰해 보면, 『표준국어대사전』에서는 속담과 관용 표현을 같은 카테고리라 하지 않고, 다른 카테고리라 분류하고 있다. 즉 속담은 관용 표현의 하위어로 볼 수 있다.

연구자의 견해로서, 최창렬(1999)은 속담은 일정한 형태 속에서 세상에서 사용할 수 있는 깨져있는 모든 형태의 말을 포괄하는 개념이며, 언중의 경험과 지혜와 교훈에서 우러나온 진리를 지닌 간결하고 평범하고 은유적인 표현의 관용어라고 밝히고 있다. 즉 관용어와 속담은 같은 범주에 있다고 하였다.

민현식(2003), 주경미(2008)도 관용 표현과 속담을 분명하게 분류해서 말하고 있다. 민현식(2003)에서 관용 표현은 일정 시간 반복적이고 지속적으로 언어 공동체에서 통용되는 표현이라고 할 수 있으며, 그 관용 표현을 고사성어 수수께끼어 인사말 속담으로 분류하고 속담의 특성은 민중성·향토성·구비성·시대성·간결성·가변성·교훈성이라고 했다. 주경미(2008)도 대부분의 논저에서 관용구와 관용 표현은 속어, 속담, 고사성어 등을 포함한 상위 개념으로 사용하고 있다고 밝힌 바 있다. 그 중에 속담은 앞뒤에 적힌 도입 부분과 인용부까지 형식적으로 완전한 하나의 문장일 것, 의미적으로는 여러 구성성분의 의미가 모여서 비유적인 의미를 갖을 것, 화용적으로는 교훈성과 풍자성을 띄고 있고 대중으로부터 구비성을 갖고 관습적으로 쓰이는 구성체라고 했다. 이상의 선행연구는 한국어의 관용 표현을 중심으로 조사한 내용이다.

그러나 본 연구에서 연구 대상으로 삼은 『노걸대』의 원문은 중국어이다. 그런

이유로 한국어에서 쓰이는 관용 표현과 중국어에서 쓰이는 관용 표현의 쓰임이 같지는 않을 것이다. 중국어의 원문인 『노걸대』를 중심으로 연구의 성과를 밝힌 양오진(2010)은 원문이 중국어이기 때문에, 그 원문에 쓰여진 관용적 표현을 ‘속어’로 정의하고 연구 분석하였다. ‘속어’란 언어 중에 고정된 단어 결합이나 문장 형태로서 사용할 때 임의로 그 구성을 변경할 수 없으며 성어·諺語·격언·관용어·혈후어¹ 등이 이에 포함된다고 해석한 중국 학계의 주장에 따른 것이다.² 그러나 중국의 『漢語』를 중심으로 원문과 언해문을 연구 대상으로 삼은 박재연·최정혜(2011)는 그 『漢語』의 문헌에 나타난 관용적 표현을 속어로 보지 않고, ‘속담’으로 정의하였는데, 속담으로 보기에는 비유적인 표현이 덜한 직접적인 표현도 있고, 연어처럼 동사구인 표현도 있다고 했다. 다만, 박재연·최정혜(2011)는 속담으로 정의한 각각을 모두 전형적인 한국의 속담 형식에 비견하여 진정한 속담인지 아닌지를 엄격하게 따지기보다는 한국의 속담 개념과 중국어의 속담 개념이 다르다는 것을 먼저 인지할 필요가 있다고 주장하였다. 그러면서 중국어의 속담은 諺語·혈후어·관용구 등이 모두 포함되는 다소 광의의 개념이라고 했다.

이상으로 한국어 관련 연구자와 중국어 관련 연구자의 견해를 살펴봤다. 속담과 관용 표현에 관하여 본 연구의 연구 대상이 순수 한국 문헌이 아닌 중국어의 원문을 토대로 한 언해문이기 때문에 그 언해문에 쓰여진 관용적 표현을 한마디로 속담이나 속어 등으로 정의를 내리기가 간단하지만은 않다는 것을 먼저 밝힌다. 그러나 본 연구에서 연구 대상으로 삼은 것이 『노걸대』의 원문을 조선시대의 훈민정음인 언해문으로 언해한 것이기 때문에 그 언해문 안에 관용적 표현으로 쓰여진 표현을 통사적 관점에서 살피고자 넓은 의미로 보아 ‘관용 표현’으로 통칭하고, 『노걸대』에 나타난 관용 표현의 통사적 내용 중에서 특징적으로 분석되어진 용례를 예를 들어 살펴보고자 한다.

3. 『노걸대』 언해류의 해제

송기중(1995)은 『노걸대』를 다음과 같이 소개하고 있다. 『노걸대』는 조선전기에 한자로만 기술하여 간행한 중국어 학습서로서 1 권 1 책으로

¹ 歇后語·歇后語혈후어: 박재연·최정혜(2011)에는 혈후어를 다음과 같이 설명하고 있다. “속어의 일종으로 대부분이 해학적이고 형상적인 어구로 되어 있음. 원칙상 앞 뒤 두 부분으로 나뉘어져 있는데, 앞부분은 수수께끼 문제처럼 비유하고 뒷부분은 수수께끼 답안처럼 그 비유를 설명함. 보통 뒷부분은 드러내지 않고 앞부분만으로 뜻을 나타내는데 앞뒤 부분 모두를 병렬할 수도 있음. 수사법의 하나로서 문예작품이나 일상생활에서 성어(成語)와 마찬가지로 많이 쓰임” 박재연·최정혜(2011:142-143)에서 『중한사전』(2002)의 재인용.

² 양오진(2010)에서 『辭海』(1997:246)의 재인용.

『노걸대』라는 서명이 『세종실록』에 처음으로 등장하였다고 한다. 그는 『노걸대』의 첫 글자 ‘노(老)’의 의미에 대하여 몇 가지 해석 중에 가장 신빙성이 있어 보이는 것은 노형(老兄)·노사(老師)·노관인(老官人) 등과 같은 중국어 표현에서 볼 수 있는 경칭접두어(敬稱接頭語)로 이해하는 해석이라고 했다. 즉 노걸대의 의미는 국어로 ‘중국(인)님’ 정도로 파악할 수 있다고 했다. 『노걸대』와 쌍벽을 이루었던 한학서 『박통사(朴通事)』가 중국인이 박씨(朴氏) 성을 가졌던 조선 통사를 부르는 호칭이었다면, ‘노걸대’는 조선 통사가 성명을 모르는 중국인을 부르는 호칭이었다고 추측하였다.

『번역노걸대』와 『노걸대언해』에 관하여 박태권(1995)은 다음과 같이 소개하고 있다. 『번역노걸대』는 조선전기의 학자 최세진이 『노걸대』를 언해하여 종종 연간에 간행한 중국어 학습서이며, 서명이 책에는 『노걸대』라고만 되어 있으나, 원본인 『노걸대』와 1670년의 『노걸대언해』와 구별하여 『번역노걸대』라고 부르고 있다고 한다.

『노걸대』는 상인의 여행과 교역에 관한 회화집이므로 이 책은 독특한 대화체의 풍부한 자료를 제공해주며, 후대의 『노걸대언해』와의 비교에 의하여 국어의 변천을 연구하는 데 이용될 수 있다고 했다. 그 『노걸대언해』는 조선 현종 때 정상국이 이 책의 앞서 간행된 『번역노걸대』를 참고하여 언해한 것이라고 했다. 『번역노걸대』는 16세기 초에 나왔고, 『노걸대언해』는 17세기 후반에 나왔으므로, 어휘와 문법 등이 크게 다르지는 않으나, 그 표기에 반영된 변화는 국어사의 자료로서 가치가 크다고 했다.

양오진(1998:69-70)은 『노걸대』의 내용을 다음과 같이 소개했다.

「노걸대는 모두 107개의 문단으로 이루어졌는데 그 내용은 고려 상인 일행 네 명이 고려의 말과 배, 인삼 등을 가지고 중국 북경으로 행상하러 가는 도중, 중국 상인 왕 씨를 만나는 것으로부터 시작이 된다. 그리고 그들 일행이 동행하면서 나누는 대화가 기본 줄거리를 이루면서 목적지에 도착하여 갖고 간 물건들을 다 처리하고 고려에 가져다 팔 물건들을 구입한 후 중국 상인과 작별 인사를 나누는 것으로 끝이 난다. 따라서 목적지로 가는 도중의 여관 투숙, 물건을 팔고 살 때 벌이는 흥정 등 여행과 무역에 관한 내용들이 주축을 이루고 있다」고 소개했다.

표 1 『노걸대』 언해류의 서지사항

	번역노걸대	노걸대언해
언해자	최세진	정상국
언해연대	1510년	1670년
표지서명	上권 「老乞大」潮, 下권 「老乞大」	「老乞大諺解」
판본	上下 2권 2책 목판본	上下 2권 목판본
	<ul style="list-style-type: none"> • 한자의 좌우에 이중으로 주음함. • 한어문의 한 구절이 끝나는 곳에 	<ul style="list-style-type: none"> • 언해의 체제는 번역노걸대와 동일하나

체제	언해함. • [△][○]과 같은 문자가 사용됨. • 방점으로 중세국어의 성조 표시함.	언해상의 표현이 다름. • 성조를 표기하는 방점을 사용하지 않았음.
크기	세로 33 cm, 가로 22 cm	세로 35.6 cm, 가로 22.8 cm
장수	上 71 장, 下 73 장	上 64 장, 下 66 장
사용용도	중국어 학습서(회화문)	

※이 표는 양오진(1998)을 중심으로 필자가 정리했음.

4. 『노걸대』 언해류에 나타난 관용 표현의 통사적 고찰

본 연구의 관용 표현이라고 판단한 선별 기준은 선행 연구에서도 논한 바와 같이 중국어인 『노걸대』의 원문을 조선시대에 훈민정음인 언해문으로 번역한 것을 중심으로 쓰여진 107 개의 문단에서 관용 표현이라고 판단한 문장을 선별하였다. 특히, 관용 표현이 시작되는 부분에 ‘常言에 닐오되’로 쓰였으며, 종결 부분이 ‘하니’, ‘하니라’, ‘하니라’ 등으로 끝나는 문장을 주목하여 선별하였다. 그 결과 『노걸대』에서 선별된 관용 표현의 용례는 18 가지의 용례가 선별되었다. 그 용례를 모두 부록에 첨부한다.

그 선별된 용례 18 가지의 관용 표현 중에 4 가지의 용례가 ‘상넷 말소매 닐오되’, ‘常言에 닐오되’, ‘常言에 닐오되’, ‘상언에 니르되’로 각기 다르게 쓰였다는 것을 알 수 있었으며, 같은 통사 안에서도 『번역노걸대』와 『노걸대언해』에서 시대적으로 다르게 나타났다는 것을 알 수 있었다.

『노걸대』에 나타난 관용 표현이 시작되는 부분의 용례를 다음에 제시한다.

1) <원문> 常言道：馬不得夜草不肥，人不得橫財不富。9b

a- 상넷 말소매 닐오되 마리 밤 풀 못 먹으면 술지디 아니하고 사름이
뽀 천 곳 橫財 못 어드면 가슴머디 못하니라 常言道

‘馬不得夜草不肥，人不得橫財不富。’ (翻譯老乞大上 32a~32b)

b- 常言에 닐오되 말이 밤 여물을 었디 못하면 술지디 못하고 사름이 뽀
財物을 었디 못하면 가움여디 못한다 하니라 常言道 馬不得夜草不肥

人不得橫財不富。(老乞大諺解上 29a)

<현대어> 속담에 이르기를 말은 밤 여물을 먹지 못하면 살이 찌지
아니하고 사람은 뽀 재물(횡재)을 얻지 못하면 부유해지지 못한다

하였다³

2) 〈원문〉 常言道：常做賊心，莫偷他物。 10a

a- 상넛 말소매 날오되 당상 도적 막스물 막고 느미 것 도적 말라

흐느니라 常言道 ‘常防賊心，莫偷他物.’ (翻譯老乞大上 34a)

b- 常言에 날오되 상상의 도적 막음을 막고느미 것 도적 말라 흐느니라

常言道常防賊心莫偷他物。(老乞大諺解上 30b)

〈현대어〉 속담에 이르기를 항상 도둑질하려는 마음을 경계하고 남의 물건을 훔치지 말라 하였다

3) 〈원문〉 常言道：老實常在，脫空常敗。 31a

a- 상넛 말스매 날오되 고디시그니는 당상 잇고 섭섭흐니는 당상

패한다 흐느니라 常言道 ‘老實常在，脫空常敗.’ (翻譯老乞大下 43a)

b- 상언에 니로되 고디식흐니는 상상에 잇고 섭섭흐니는 상상에 패한다

흐느니라 常言道 老實常在 脫空常敗 (老乞大諺解下 39a)

〈현대어〉 속담에 이르기를 성실한 것은 항상 오래가고 허황한 것은 항상 패한다 하였다

4) 〈원문〉 常言道：掩惡揚善。 31b

a- 상넛 말스매 날오되 사오나온 일란 그시고 도흔 일란 퍼낼 거시라

흐느니라 常言道 ‘隱惡揚善。(翻譯老乞大下 44a)

b- 상언에 니르되 사오나온 일란 그이고 도흔 일란 들어나게 하라 흐느니라

常言道 隱惡揚善。(老乞大諺解下 40a)

〈현대어〉 속담에 이르기를 나쁜 일은 덮어두고 좋은 일은 드러내라 하였다.

위 1)~4)의 용례를 살펴보면 알겠지만, ‘상넛 말소매 날오되’, ‘常言에 날오되’, ‘常言에 날오되’, ‘상언에 니르되’라는 표현은 원문에서 ‘常言道’라고 표기되어

³ 이하 현대어로 번역한 부분은 양오진(2010)을 인용하였다.

있다.

이 한자어 ‘常言道(상언도)’를 분석해 보면 ‘常(상)’은 ‘상넛’, ‘言(언)’은 ‘말소매, 말스매’, ‘道(도)’는 ‘닐오되’이며, 기본형은 ‘닐다’이다. 이 ‘닐다’의 이형태를 고명균(2019)은 대역어로 ‘말하다, 길, 도리, 터ㅎ’가 있고, 그 활용형으로 ‘닐오되, 니르거날, 니르되’ 등이 있다고 했다.

이와 같이 기본형 ‘닐다’는 현대 국어에서 주로 ‘말하기를, 이르기를’이라고 표현하고 있다. ‘닐다’의 동의어로 ‘孔子曰’의 한자어 ‘曰(왈)’이 있는데, 일본어로 ‘イワク’는 기본형이 ‘닐다, 말하다’인데, 「‘曰(왈)’의 대역어로 ‘ㄱ로되, 니르되, 닐오다, 니로다, 굴오다」⁴라고 했다. 그리고 그 뜻 풀이를 ‘가로다, 이르다, 일컫다, 말내다’⁵라고 설명했다.

이 ‘曰(왈)’은 현대 국어에서 ‘가로되, 가라사되’ 라고도 쓰이고 있는데, 본고의 관용 표현에서는 이 ‘曰(왈)’의 쓰임이 한번도 나타나지 않았다.

그 이유는 ‘常言道(상언도)’의 ‘常言’에 관한 의미가 박성훈(2012:500)에서 「습관적으로 자주하는 말 곧, 속담이나 격언」이라고 해석되어 있는 것으로 보아 초급 중급어 『노걸대』에서는 주로 습관적이고 일반적인 내용을 중심으로 다루었기 때문에, 어떤 인물을 구체적으로 일컬으며 속담을 말하는 ‘曰(왈)’이 한번도 나타나지 않았나 추측해 본다.

이와 같은 관용적 표현에 관하여 박재연 · 최정혜(2011)는 철학적이거나 이치와 관련된 심오한 의미는 갖지 않으면서 굳은 형식으로 쓰이는 관용구, 앞뒤 부분으로 나뉘어 수수께끼처럼 앞부분으로 뒷부분을 추측하게 하는 혈후어, 특별히 비유적인 의미를 갖지는 않으면서 일상적으로 잘 어울려서 쓰는 상용구(연어 구성)도 포함하고 있다고 했다. 예문 1)~4)까지 다룬 ‘常言道’에 관하여 정리한 내용을 다음 <표 2>에 제시한다.

표 2 ‘常言道’가 쓰여진 빈도(4/18)와 각 언해문의 표기 대조

빈도	노걸대	번역노걸대	노걸대언해
2	常言道	상넛 말소매 닐오되	常言에 닐오되
1	常言道	상넛 말스매 닐오되	상언에 니로되
1	常言道	상넛 말스매 닐오되	상언에 니르되

다음은 『번역노걸대』에는 쓰여 졌던 관용 표현이 『노걸대언해』에서는 찾아볼 수 없었던 용례가 있었다. 그 예를 다음에 제시한다.

⁴ 고명균(2019:79)에서 박영섭(2012)의 재인용.

⁵ 고명균(2019:79)에서 장삼식(1972)의 재인용.

5) 〈원문〉 休道黃金貴, 安樂最直錢。 21a

- a- 황금이 귀하다 니르디 말라 편안호미샤 빈소미 하니라 休道黃金貴,
安樂直錢多。(翻譯老乞大下 4a)

〈현대어〉 황금이 귀하다 하지 말라, 편안함이 가장 값지다 하였다

위 예문 5)a 의 예문은 『번역노걸대』의 예문이다. 그러나 그 용례 자체가 『노걸대언해』에서는 전혀 나타나지 않았다. 또한 『노걸대』의 원문에서 표기되었던 ‘最直錢’이 ‘直錢多’로 한자어 표기가 『번역노걸대』에서는 다르게 쓰였다는 것도 살펴볼 수 있었다.

또한, 예문 5)의 통사적인 특징으로 선행절과 후행절이 대구의 기법으로 쓰여졌다는 것을 알 수 있다. 박재연·최정혜(2011)의 연구에서는 이러한 대구적 표현에 관한 구체인 분석을 하였는데, 속담 표현에서 흔히 관찰할 수 있는 형식적인 특징이라고 했다. 대구는 전달하고자 하는 비유적인 의미를 좀 더 강조하여 전달할 수 있는 방법이라고 한다. 위 예문 5)는 ‘니르디 말라’의 선행절의 서술어가 후행절 ‘빈소미 하니라’의 금지를 나타내는 부정적 형식으로 상반되게 표현되어 대구를 이루고 있어 대조적 대구 표현이라고 할 수 있다.

이와 같이 『노걸대』의 언해문을 살펴보면 대구 표현들이 많이 쓰였다는 것을 알 수 있는데, 『노걸대』 언해문에서는 조건적 대구 표현이 18 가지 용례 4 가지 용례에서 나타났다. 다음 예문에 조건적 대구 표현이 쓰인 용례를 제시한다.

6) 〈원문〉 三人同行, 小的苦。 10a

- a- 세히 혼 디 길 네매 저므니 슈고흐느니라 ‘三人同行 小的苦’
(翻譯老乞大上 34b)

- b- 세 사롬이 흥희 네매 저므니 슈고흐느니라 三人同行小的苦
(老乞大諺解上 31a)

〈현대어〉 세 사람이 동행을 하면 나이 어린 사람(젊은 사람)이 고생을 한다

7) 〈원문〉 好看千里客, 萬里要傳名。 12b

- a- 쏘 아니 니르느녀 천 리엿 나그네를 도히 보와 보내어 만 리에 일후를

옴골 디니라 却不說 ‘好看千里客, 萬里要傳名’? (翻譯老乞大上 44a)

b- 쏘 아니 니르느냐千里엇 나그내를 豆히 보와 보내미 萬里에 일흠을
던코저 흠이라 却不說 好看千里客 萬里要傳名。(老乞大諺解上 39b-
40a)

<현대어> 천리 가는 나그네를 잘 살펴 보내면 만리에 이름을 전하게
되리라

위 예문 7)을 살펴보면 선행절과 후행절을 연결하는 어미가 ‘보내여’, ‘보내미’로 쓰였다. 그 뜻을 현대어로 번역해 보면 ‘보내면’으로 번역이 되는데, 연결어미 ‘-(으)면’에 후행절의 마지막 서술어인 종결어미가 ‘-니라’의 조건적 대구 표현이 쓰였다는 것을 알 수 있다. 또한, 예문 6)의 a, b 에서도 ‘-녀매~-ㅎ느니라’가 ‘-하면~-한다’의 선행절과 후행절이 조건적 대구로 표현되어 조건적 대구 표현으로 쓰였다고 본다.

다음은 대등적 대구 표현이 쓰여진 예를 살펴보기로 하겠다. 그 예문을 다음에 제시한다.

8) <원문> 官憑印信, 私憑要約。25a

a- 구의엔 인을 믿고 아르매는 괴약을 미들 거시니

官憑印信, 私憑要約。(翻譯老乞大下 19b)

b- 구의논 인신을 믿고 스스논 언약을 미들 써시니

官憑印信, 私憑要約 (老乞大諺解下 17b)

<현대어> 公的인 일은 官印(印信) 의거하고 私的인 일은 약속(계약)
의거한다 하였다

9) <원문> 慣曾出外偏憐客, 自己貪盃惜醉人。12a

a- 일즉 외방의 나든니기 니그면 일편도이 나그내를 에엿비 너기고 나뭇
수를 탐하면 취한 사름을 앗기느니라

慣曾出外偏憐客, 自己貪杯惜醉人。(翻譯老乞大上 42a)

b- 일즉 외방의 나든니기 니그면 일편되이 나그내를 에엿비 너기고 나뭇
술을 탐하면 취한 사름을 앗기느니라

慣曾出外偏憐客，自己貪盃惜醉人。（老乞大諺解上 37b）

〈현대어〉 나들이에 익숙한 사람이 나그네를 편애하고 술을 좋아하는 사람이 취한 사람을 아낀다

위 8)의 예문은 선행절에서 연결어미 ‘-고’와 후행절의 마지막 서술어인 종결어미 ‘-(이)니’가 서로 대등적으로 대구를 나타내는 대등적 대구 표현의 예이다.

또한, 예문 9) a, b 에서는 선행절 ‘나든니기 니그면 일편도이 나그네를 에엿비 너기고’와 후행절 ‘술을 탐하면 취한 사롬을 앓기느니라’가 연결어미 ‘-고’로 쓰여 대등적 대구 표현으로 이어지면서 각 절 안에서는 ‘-(으)면~-니라’의 조건적 대구 표현으로 쓰였다는 것을 알 수 있었다. 이 예문 9)와 같은 수법이 예문 1) a, b 에서도 나타 났는데, 선행절 ‘물 머그면 술지디 아니고’와 후행절 ‘물 어드면 가스며디 물느니라’가 연결어미 ‘-고’로 쓰여 대등적 대구 표현으로 이어지면서 각 절 안에서는 ‘-(으)면~-니라’의 선행절과 후행절이 조건적 대구 표현으로 쓰여 졌다. 다만 예문 1)의 b 는 선행절과 후행절이 모두 ‘디 못하다’의 장형 부정형식으로만 쓰여진데 반하여 예문 1) a 에서는 선행절 안에서 단형과 장형 부정형태인 ‘못’과 ‘지 못하다’가 번갈아 가며 쓰인 대등적 대구 표현이 쓰여 졌다.

이상으로 살펴본 대구적인 관용 표현 중에 중복된 대구 표현을 뺀 내용을 <표 3>에 제시한다.

표 3 대구적인 관용 표현 a 『번역노걸대』 b 『노걸대언해』

		선행절	후행절
대조적 대구표현	a	니황금이 귀 <u>하</u> 다 니르디 말라	빈소미 하니라
	b	-	-
조건적 대구표현	a	천 리엿 나그네를 도히 보와 보내 <u>어</u> (-면)	萬里에 일흠을 던코져 흠이라
	b	千里엿 나그네를 도히 보와 보내 <u>미</u> (-면)	萬里에 일흠을 던코져 흠이라
대등적 대구표현	a	구의엔 인을 믿 <u>고</u>	아르매는 괴약을 미들 거시니
	b	구의는 인신을 믿 <u>고</u>	스스는 연약을 미들 써시니

5. 나가며

이상으로 조선시대에 쓰여진 『노걸대』 언해류의 문헌에 나타난 관용 표현의 통사적 특성을 살펴보았다. 조선시대에 초급 중국어 회화 교재로서 가장 권위적으로 사용되었다고 하는 『노걸대』에는 107의 문단에 무려 18가지의 관용 표현이 나타났다는 것을 알 수 있었다. 그 용례 중에서 특징적인 예문에서 관용 표현이 시작되는 부분에 원문은 ‘常言道’로 일관하여 나타났으나, 언해문에서는 각 용례의 표기법이 ‘상넛 말소매 날오되’, ‘常言에 날오되’, ‘常言에 날오되’, ‘상언에 니르되’로 각기 다르게 쓰여, 표기의 변화가 활발하게 이루어졌었다는 것을 알 수 있었다. 또한 시대적으로도 『번역노걸대』와 『노걸대언해』에서 그 표기가 현저하게 변화의 과정을 거쳤다는 것도 알 수 있었다. 그러나 원문에서 쓰여진 관용 표현이 언해문에서는 삭제되어진 예도 살펴보았으며, 한어문 자체가 시대에 따라 조금씩 변하여 쓰여 졌다는 것도 살펴볼 수 있었다.

또한, 조선어의 관용 표현에서는 잘 나타나지 않는 통사의 형식적 특징으로 대구의 기법이 언해문에서는 많이 쓰여 졌었다는 것을 알 수 있었다. 그 대구 표현으로 대조적 대구 표현, 조건적 대구 표현, 대등적 대구 표현 등이 쓰였으며, 선행절과 후행절을 대등적 대구 표현으로 연결하면서 선행절과 후행절에서 각각 조건적 대구 표현이 쓰여진 예 등도 살펴보았다.

마지막으로 본 연구의 과제로 근대 국어의 통사적 분석을 위해 근대 국어에 관한 문법적 지식이 필요하다는 점이다. 그런 점에 시야를 넓혀 관용 표현에 쓰여진 통사적 내용을 중심으로 문법적으로 세분화하여 연구하고 고찰하고자 한다. 또한 조선시대에 민중이 언어 생활에서 실제로 사용한 조선 고유의 관용 표현에 관심을 가지고 한어문의 언해문과 비교 분석할 것을 앞으로의 과제로 삼아 연구하고자 한다.

<참고문헌>

- 고명균 (2019) 「諺解類에 나타난 漢字語 曰의 翻譯에 關한 考察」 『한국문화연구』 9, 한국문화학회, pp.79-96.
- 김경열 (2017) 「속담을 활용한 한국어 교육 방안 연구-문법과 의미 교육을 중심으로-」 『새국어교육』 110, 한국국어교육학회, pp.183-212.
- 문금현 (1996) 「관용표현의 생성과 소멸」 『국어학』 28, 국어학회, pp.301-333.
- 민현식 (2003) 「관용표현의 범위와 유형에 대한 재고」 『한국어 의미학』 12,

한국어어휘학회, pp.17-50.

박재연 (2002) 『中朝大辭典』 선문대학교 중한번역문헌연구소

박성훈 (2012) 『朴通事諺解辭典』 대학사

박재연·최정혜 (2011) 「조선후기 중국어 회화서〈漢語〉의 속담에 대하여」 『어문
논집』 66, 민족어문학회, pp.141-170.

양오진 (1998) 『老乞大·朴通事研究』 대학사

—— (2010) 「老乞大·朴通事に 보이는 熟語의 표현에 대하여」 『中國學論叢』 30,
고려대학교 중국학연구소, pp.53-78.

주경미 (2008) 「20 세기 초기 국어의 관용 표현 연구」 박사학위논문, 단국대학교,
pp.1-158.

최창렬 (1999) 『우리속담연구』 일지사

<인용 원문과 언해 문헌>

『노걸대』 (미상 고려 말경) 국립중앙도서관 소장본

『번역노걸대』 (1510 년) 국립중앙도서관 소장본

『노걸대언해』 (1670 년) 국립중앙도서관 소장본

<인터넷 검색처>

국립국어원 『표준국어대사전』 korean.go.kr

박태권 (1995) 『한국민족문화대백과사전』 .

<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Item/E0012634>

송기중 (1995) 『한국민족문화대백과사전』 .

<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Item/E0012634>

부 록

<『노걸대』에 나타난 관용 표현의 용례>

※ 『原本老乞大』 a 『翻譯老乞大 上下』 b 『老乞大諺解上下』⁶

1) <원문> 前不著村, 後不著店。3b

a と b-없음.

<현대어> 앞으로는 村(마을) 다다르지 못하고 뒤로는 店(여관) 다다르지
못하다/ 앞뒤로 인적이 드물다/ 앞뒤로 목을 만한 곳이 없다(“환경이나
旅路가 삭막 함”을 나타냄)

⁶ 본문의 제시한 예문과는 달리 부록의 나열 순서는 언해문에 기재된 순서로 함.

- 2) 〈원문〉 常言道：馬不得夜草不肥，人不得橫財不富。 9b
- a- 상넛 말소매 날오디 머리 밤 풀 몬 머그면 솔지디 아니하고 사꺠미 뵈 천곳/*橫財*/ 몬 어드면 가수며디 몬흐느니라
 常言道 ‘馬不得夜草不肥，人不得橫財不富。’ (翻譯老乞大上 2a~32b)
- b- 常言에 날오디 말이 밤 여을을 엇디 못흐면 솔지디 못하고 사꺠미 뵈 財物을 엇디 못흐면 가음여디 못한다 흐느니
 常言道 馬不得夜草不肥 人不得橫財不富。(老乞大諺解上 29a)
 〈현대어〉 속담에 이르기를 말은 밤 여물을 먹지 못하면 살이 찌지 아니하고 사람은 땀 재물(횡재)을 얻지 못하면 부유해지지 못한다 하였다
- 3) 〈원문〉 常言道：常做賊心，莫偷他物。 10a
- a- 상넛 말소매 날오디 당상 도족 막스물 막고 느미 것 도족 말라 흐느니
 常言道 ‘常防賊心，莫偷他物。’ (翻譯老乞大上 34a)
- b- 常言에 날오디상상의 도적 막음을 막고놈의 것 도적 말라 흐느니
 常言道常防賊心莫偷他物。(老乞大諺解上 30b)
 〈현대어〉 속담에 이르기를 항상 도둑질하려는 마음을 경계하고 남의 물건을 훔치지 말라 하였다
- 4) 〈원문〉 三人同行，小的苦。 10a
- a- 세히 혼 디 길 녀매 저르니 슈고흐느니라 ‘
 三人同行 小的苦’ (翻譯老乞大上 34b)
- b- 세 사꺠미 흥씨 네매 저르니 슈고흐느니라
 三人同行 小的苦 (老乞大諺解上 31a)
 〈현대어〉 세 사람이 동행을 하면 나이 어린 사람(젊은 사람)이 고생을 한다
- 5) 〈원문〉 慣曾出外偏憐客，自己貪盃惜醉人。 12a
- a- 일즉 외방의 나든니기 니그면 일편도이 나그내를 에엇비 너기고 나옏 수을 탐흐면 취흔 사꺠물 앓기느니라
 慣曾出外偏憐客，自己貪杯惜醉人。(翻譯老乞大上 42a)
- b- 일즉 외방의 나든니기 니그면 일편되이 나그내를 에엇비 너기고 나옏 술을 탐흐면 취흔 사꺠를 앓기느니라
 慣曾出外偏憐客 自己貪盃惜醉人。(老乞大諺解上 37b)
 〈현대어〉 나들이에 익숙한 사람이 나그네를 편애하고 술을 좋아하는

사람이 취한 사람을 아긴다

- 6) 〈원문〉 飢時得一口, 強如飽時得一斗。12b
 a- 골픈 제 헛 입 어더 머구미 브른 제 헛 말 어둡두곤 더으니
 飢時得一口, 強如飽時得一斗。(翻譯老乞大上 43b)
 b- 골픈 제 헛 입 어더 먹으미 브른 제 헛 말 어둡도곤 나오니라
 飢時得一口 強如飽時得一斗 (老乞大諺解上 39b)
 〈현대어〉 배고플 때 한 입 얻는 것이 배부를 때 한 말(斗) 얻는 것보다 낫다
- 7) 〈원문〉 好看千里客, 萬里要傳名。12b
 a- 쏘 아니 니르느녀 천 리엿 나그네를 도히 보와 보내여 만 리에 일후를 옴골 디니라
 却不說 ‘好看千里客, 萬里要傳名’? (翻譯老乞大上 44a)
 b- 쏘 아니 니르느냐千里엿 나그네를 도히 보와 보내미 萬리에 일후를 던코져 흠이라
 却不說 好看千里客 萬里要傳名。(老乞大諺解上 39b-40a)
 〈현대어〉 천리 가는 나그네를 잘 살펴 보내면 만리에 이름을 전하게 되리라
- 8) 〈원문〉 一客不犯二主。15a
 a- 헛 나그네 두 주인 저치디 몰홀 거시니
 一客不犯二主, (翻譯老乞大上 52b)
 b- 헛 나그네 두 주인을 적시디 못홀 써시니
 一客不犯二主, (老乞大諺解上 47b)
 〈현대어〉 한 손님은 두 주인의 신세를 지지 않는다/ 한 고객은 두 주인과 거래를 하지 않는다
- 9) 〈원문〉 休道黃金貴, 安樂最直錢。21a
 a- 황금이 귀하다 니르디 말라 편안호미샤 밍소미 하니라
 休道黃金貴, 安樂直錢多。(翻譯老乞大下 4a)
 b- 없음.
 〈현대어〉 황금이 귀하다 하지 말라, 편안함이 가장 값지다 하였다
- 10) 〈원문〉 家書直萬金。21a
 a- 쏘 아니 니르느녀 집 유위 일만 량 금이 쓰다 헛느니라
 却不道 ‘家書直萬金’。(翻譯老乞大下 4b)

b- 쏘 아니 니르느냐 家書 | 萬金 쓰다 흥느니라

却不知道 家書直萬金 (老乞大諺解下 4a)

〈현대어〉 家書(집에서 온 안부편지)가 만금 값이라 하였다

11) 〈원문〉 千零不如一頓。22a

a- 즈은 뽕 거시 흥 무들기만 곱디 못흐니

千零不如一頓 (翻譯老乞大下 8a)

b- 일천 뽕 거시 흥 무들기만 곱디 못흐니

千零不如一頓 (老乞大諺解下 7a)

〈현대어〉 천 가지 날 것이 한 무더기 것만 못하다

12) 〈원문〉 官憑印信, 私憑要約。25a

a- 구의엔 인을 믿고 아락매는 괴약을 미들 거시니

官憑印信, 私憑要約。(翻譯老乞大下 19b)

b- 구의는 인신을 믿고 스스는 언약을 미들 써시니

官憑印信 私憑要約 (老乞大諺解下 17b)

〈현대어〉 公의인 일은 官印(印信) 의거하고 私의인 일은 약속(계약) 의거한다 하였다

13) 〈원문〉 常言道: 老實常在, 脫空常敗。31a

a- 상넛 말스매 날오되 고디시그니는 당상 잇고 섭섭흐니는 당상 패한다 흥느니라 常言道 ‘老實常在, 脫空常敗.’ (翻譯老乞大下 43a)

b- 상언에 니로되 고디식흐니는 상상에 잇고 섭섭흐니는 상상에 패한다 흥느니라 常言道 老實常在 脫空常敗 (老乞大諺解下 39a)

〈현대어〉 속담에 이르기를 성실한 것은 항상 오래가고 허황한 것은 항상 패한다 하였다

14) 〈원문〉 缸投水裏出來, 旱地裏行不得, 車子載著有; 車子水裏去呵, 水裏行不得, 缸裏載著有。31b

a と b-없음.

〈현대어〉 배는 물에서 나오면 육지에서 다니지 못하므로 반드시 수레에 실어야 하고, 수레는 물에 들어가면 물속에서 다니지 못하므로 반드시 배에 실어야 한다/ 배는 육지로 나오면 다니지 못하므로 수레에 실어야 하고, 수레는 물속에 들어가면 다니지 못하므로 배에 실어야 한다

15) 〈원문〉 一箇手打呵, 響不得有; 一箇脚行呵, 去不得有。31b

a と b-없음.

〈현대어〉 한 손으로 치면 소리가 나지 않고 한 발로 걸으면 가지를 못한다 하였다.

16) 〈원문〉 常言道：掩惡揚善。 31b

a- 상넛 말스매 날오티 사오나온 일란 그시고 도흔 일란 퍼낼 거시라
 흥느니라 常言道 ‘隱惡揚善。(翻譯老乞大下 44a)

b- 상언에 니르되 사오나온 일란 그이고 도흔 일란 들어나게 흥라 흥니라
 常言道 隱惡揚善。(老乞大諺解下 40a)

〈현대어〉 속담에 이르기를 나쁜 일은 덮어두고 좋은 일은 드러내라 하였다.

17) 〈원문〉 宜假不宜眞。 38a

a- 정히 거짓 거슨 맛당하고 진짓 거슨 맛당티 아니흥니라
 正是宜假不宜眞。(翻譯老乞大下 67a)

b- 정히 거짓 거슨 맛당하고 진짓 거슨 맛당티 아니흥니라
 正是宜假不宜眞。(老乞大諺解下 60b)

〈현대어〉 가짜 것이 마땅하고 진짜 것이 마땅치 아니하다/ 진품보다
 짝퉁이 낫다

18) 〈원문〉 四海皆兄弟。 39b

a- 슝히 다 형데어니썩나 四海皆兄弟。(翻譯老乞大下 72b)

b- 四海 다 형데어니썩녀 四海皆兄弟。(老乞大諺解下 65b)

〈현대어〉 천하(四海)는 모두 한 형제이다

• 受付：2021年7月31日

• 修正：2021年9月20日

• 掲載：2021年9月30日

リキャストの使用言語と 学習者の自己訂正に関する考察

崔 銀景（長崎外国語大学）

<要旨>

本研究は日本語を母語とする韓国語学習者を対象とし、教師と学習者の会話を分析する方法で、教師のリキャストに使用される言語により、学習者の反応に違いが表れるかについて考察したものである。教師と学習者の会話において、リキャストと学習者の反応がどのように表れるかを分析した結果、リキャストは使用言語を問わず、学習者の自己訂正を促すということが見出された。しかし、学習者の自己訂正が表れる形には、リキャストの使用言語により違いがあることが確認された。目標言語を使用したリキャストに対する学習者の自己訂正は、教師のリキャストをそのまま繰り返す形で表れることが分かった。一方、母語を使用したリキャストに対する学習者の自己訂正は、学習者が教師のリキャストをヒントに自分の力で自己訂正をする形で表れていた。この結果より、学習者の訂正完了に下位分類を設ける必要があることを示し、今後の研究の方向性について考察した。

キーワード 訂正フィードバック、学習者の反応、リキャストの使用言語、
学習者の自己訂正

1. はじめに

フィードバックという用語は教育現場において多く使用されており、教師、学習者同士(peer)、または学習者自分自身が主体となっていくものである。Chaudron (1988) はフィードバックについて学習者の行動や反応に対する結果であると述べた。フィードバックは学習者の行動を強化する「肯定的フィードバック(positive feedback)」と、学習者の行動を強化しない「否定的フィードバック(negative feedback)」に分けられる。学習者の望ましい反応を繰り返させるために学習者をほめるフィードバックは肯定的フィードバックにみなされ

る一方、学習者が望ましくない反応を見せる、あるいは模範解答(model)から離れた回答をした場合に、それをやめさせるためのフィードバックは否定的フィードバックとみなされる。以上のことから、学習者が正しくない反応、即ちエラーを含む発話をするのは望ましくない、かつ排除すべきものとして捉えられていることが見受けられる。

本稿で使用する「訂正フィードバック(corrective feedback)」という用語は、学習者のエラーを訂正するという観点からすると、前述した「否定的フィードバック(negative feedback)」に近いものである。但し、学習者のエラーを「否定的」に捉えるわけではなく、あくまでも「訂正」という意味で「訂正フィードバック」という用語を使用する。

訂正フィードバックは前述した通り学習者のエラーに対するものであり、エラーの発生情報や目標言語の正しい形を提供するなどの方法で、目標言語習得を促す役割を果たすと考えられる。また、学習者の母語使用も学習者の理解を助ける役割を担うことができる。それならば、このように目標言語習得に肯定的影響を及ぼす学習者の母語使用と訂正フィードバックを組み合わせると、学習者の目標言語習得をより円滑にできるのではないだろうか。

本稿は訂正フィードバックの種類の中で、本研究のデータから最も多く観察されたリキャストに絞り、「教師のリキャストの使用言語により、学習者の反応が変わるのか」というリサーチクエスションについて考察することを目的とする。

2. 先行研究

Ellis, Loewen & Erlam (2006:340) によると、訂正フィードバックは学習者の発話に対する反応の形で現れる。その反応は 1) エラーの発生を知らせる、2) 正しい目標言語(target language)の形態を提供する、3) エラーの性質に対するメタ言語的情報を与えるという 3 つの部分で構成されている。リキャストは、訂正フィードバックの種類の一つであるが、エラーの発生を知らせることやエラーに関するメタ言語的情報を与えることはせず、正しい目標言語の形態のみを提供するという特徴を持っている。このようにエラーの発生やエラーに関する情報を与えない点から、リキャストは暗示的訂正フィードバックに分類されることが多い(진제희, 2005; 고은정・김성훈, 2017 など)。また、正しい目標言語の形もあくまで会話の流れを遮らないように提供されるため、学習者が教師のリキャストを訂正フィードバックとして認知できず、エラーの訂正まで至らないケースも報告されている。

リキャストと他の訂正フィードバックを比較して研究した 이선진 (2016) は、

中国所在の大学で行われる韓国語授業を対象に、教室環境における訂正フィードバックとそれに対する学習者の反応を分析した。この研究では訂正フィードバックのうち、明確化要求・メタ言語的修正・誘導・繰り返しの4つを交渉フィードバックに分類し、リキャストと比較して学習者の反応を調べた。その結果、初級学習者の場合はリキャストより交渉フィードバックの方が学習者の自己訂正を促す反面、中級学習者の場合は交渉フィードバックとリキャストの間で有意差が見られなかった。

訂正フィードバックの明示性と暗示性を基準に区別した차상아(2010)は、中国語圏韓国語学習者を対象に、教師の訂正フィードバックを明示的フィードバックと暗示的フィードバックに分け、学習者の反応について調べた。その結果、エラーの減少率は教師の訂正フィードバックのタイプだけでなく、学習者がエラーを訂正し、言い直す回数と関係があったと述べている。

이석란(2009)は、韓国で行われる韓国語の初級と中級の授業を対象に、教師の訂正フィードバックに対する学習者の反応を調べた。いずれのクラスも、学習者のエラーに対してリキャストが最も多く使われていた。学習者の反応は学習者のレベルによって違いがあり、初級は訂正完了の割合が高かった反面、中級は訂正完了まで至る過程において、一度の訂正フィードバックで学習者の訂正が完了せず、複数の訂正フィードバックが必要になり、学習者が教師の訂正フィードバックに対して「質問」をする新たな学習者の反応が確認されている。

최은정・김영주(2011)は英語を母語とする韓国語学習者の授業において、学習者の反応を教師の訂正フィードバック後の学習者の発話有無により「反応有り」、「反応無し」、「機会無し」の3つに分類した。この研究でもリキャストが最も多く使用されていたが、リキャストの場合、学習者は教師のリキャストをそのまま繰り返す「반복적수정」(反復的訂正)が表れており、これは学習者自ら訂正をする「창의적수정」(創意的訂正)と区別する必要があると述べている。

これまでの訂正フィードバックの研究では、訂正フィードバックの種類を変数に分析することが多く、訂正フィードバックに使用される言語を変数としたものは少ない。前述した이선진(2016)が研究対象とした大学は英語イマージョン教育を実施しており、第3言語として英語が高頻度で使用されていた。教師は学習者の目標言語習得の補助的手段として、目標言語である韓国語以外に英語を併用したとの記述があるが、この研究では英語の使用箇所を分析から除外している。

教室において、学習者の母語や学習者の母語に準ずる言語が使用されるケースは多々報告されているが、研究者によって排除されることが多い。学習者の母語や母語に準ずる言語が教室の中で使用されていることには、何らかの理由

があると思われる。その理由として、目標言語だけでは学習者の理解が不十分であるため、学習者の母語を用いて授業内容理解を促そうとしていたということが考えられる。

최권진 (2008) は韓国語教育において学習者の母語使用に排他的である現状を指摘し、学習者の母語を効率的に用いられる教室内の活動を提案した。また、学習者の母語は学習者自らも授業内容の理解を補う手段として使われていることを述べた。ただしこれは、過去の文法訳読式に戻すべきであるという意味ではなく、学習者が目標言語習得を通して母語を排除し、目標言語のみ運用できるモノリンガルではなく、母語と目標言語の両方の運用ができるバイリンガルになる点を踏まえた 2 言語使用であると力説している。

学習者の母語使用に関して Macaro (2005) は目標言語との接触が増えると習得が促されるということが明らかにされていない限り、学習者の母語は使用されるべきであると主張した。学習者の母語使用が批判される最も大きい理由は、母語を使用することでその分の目標言語との接触が減ることである。しかし、学習者の理解が十分でない状態で目標言語に触れ続けるよりは、学習者がきちんと理解することを優先し、理解可能なインプットを与えるべきであると述べ、学習者が母語を使用することは習得の問題ではなく、理解の問題であると示した。学習者の母語を使用すると、短時間でより多くの内容が伝えられるため、文法を明示的に指導することができ、その分目標言語に充てる時間が増えるという利点だけでなく、学習者の情動的面においても利点があることを表している。

Zhao & Macaro (2014) は、授業における母語使用が学習者の理解を助けるか検証するため、英語を外国語とする環境で英語を専攻としない大学 2 年生を対象に実験を行った。その結果、目標言語のみで授業を受けたグループに比べ、母語も使用されたグループがより高い点数を取り、その向上幅も高いことが分かった。この研究で母語を使用する利点として直接的リンク (direct link) と誤認の防止が見出された。語彙を母語に翻訳することで、母語と目標言語の間に直接的リンクが形成され、語彙の習得過程が単純になり、容易に想起できることが述べられている。また、目標言語のみの授業では、類似語との境界が曖昧になるが、母語を使用することで、語彙の意味を誤認するリスクを軽減できると示している。

韓国語教育においても、고은선・김성훈 (2017) において上述した研究と同様の結果が報告されている。中国語を母語とする韓国語授業において、教師が母語を使用して説明をしたグループが、目標言語のみで説明したグループに比べ、学習者の文法項目の理解度が高かったと述べている。

しかしながら、これらの先行研究で母語が使用されているのは教師の説明や授業進行時であり、訂正フィードバックの提供時ではない。本研究では学習者

の母語使用を教師の訂正フィードバック提供時に限定し、考察していくこととする。

3. 研究方法

研究対象は学習者の発話量を一定以上確保するため、ある程度自由に目標言語を産出できる中上級の学習者に限定した。ハングル能力検定 3 級以上、韓国語能力試験 (Test of Proficiency in Korean, 以下 TOPIK) 3 級以上を研究対象の基準とした。性別、年齢、留学経験などは変数として採用せず、日本語を母語とする韓国語学習者 16 名のデータを 2018 年 2 月から 2019 年 9 月までの期間中に収集した。

研究対象である録音協力者には研究目的について録音開始前は「学習者のエラーに対する訂正フィードバックの観察」ではなく、「学習者の発話に関するデータを収集する」と事前に研究者から説明をした。なぜなら、研究目的を説明した事前調査時に行ったインタビューにおいて、録音協力者が「普段より多くミスをした方が研究のためになるのでは」と述べていたからである。そのため、本調査では録音開始前に研究目的を説明する際には「エラー」という言葉を使用せず、録音終了後に研究者が責任をもって本来の研究目的を詳細に説明し、録音のデータ使用に関する同意書を全員作成した。

録音開始後はアイスブレイキングとして最初の 10 分ほど学習者の韓国語学習歴を中心に、録音現場までの交通手段や移動時間、好きな歌手など様々な会話を韓国語で行った後、タスクを実施した。タスクは絵の説明に加え、ストーリーテリングの方法を採用し、学習者の発話量をより多く確保できるようにした。また、絵を媒介として会話をするだけでなく、ロールプレーを用いて教師と学習者が特定の状況下で相互作用する場面を設定した。

録音にはオリンパス社製の IC レコーダー「Voice-Trek V-822」を使用した。収録時間は合計 1198 分 (19 時間 58 分) であり、一人当たりの収録時間は平均 75 分と算定される。協力者の都合を最優先に考慮したため、最短 40 分から最長 120 分までとその長さは幅広く、学習者により発話量の偏差がある。

録音したすべての会話は対象に文字起こしを行い、データの客観性確保を目的に一部のデータは日本語の運用能力を持たない韓国語母語話者 1 名と韓国語教授歴 20 年以上の日本語母語話者韓国語教師 1 名と共に作業を実施した。録音した会話において、教師の訂正フィードバックと学習者の反応は以下のように現れた。

S エラーを含む発話・発話時の問題発生時点
 T 教師の訂正フィードバック
 S ← 学習者の反応

学習者の反応に対して、さらに教師の訂正フィードバックが続くこともあった。

S エラーを含む発話・発話時の問題発生時点
 T 教師の訂正フィードバック A
 S ← 教師の訂正フィードバック A に対する学習者の反応 A
 T 学習者の反応 A に対する教師の訂正フィードバック B
 S ← 教師の訂正フィードバック B に対する学習者の反応 B

上記のように、学習者の最初のエラーに対して、教師が訂正フィードバックをしたにも関わらず、学習者のエラーが訂正できなかった場合も観察された。その場合は、学習者の反応と教師の訂正フィードバックを各セットとして考察した。

本稿では学習者の反応を分ける際、上位分類として「訂正完了」と「訂正未完了」の2つを設けた。「訂正完了」は「リピート」と「自力訂正」の2つに分け、「訂正未完了」は「エラー継続」、「同意」、「反応無し」、「機会無し」、「母語返答」の5つに分けたものを以下の表1にまとめて述べる。

表1 学習者反応の分類

上位分類	下位分類
訂正完了	<ul style="list-style-type: none"> — リピート¹ — 自力訂正²
訂正未完了	<ul style="list-style-type: none"> — エラー継続 — 同意 — 反応無し — 機会無し — 母語返答

(진제희, 2005; 최은정·김영주, 2011; 崔銀景, 2020b を参考に再構成)

¹ 訂正フィードバックタイプの「繰り返し」と区別するため、「リピート」と表記する。

² 従来の訂正フィードバック研究で用いられる「自己訂正」と区別するため、「自力訂正」と表記する。

表 1 にまとめた「訂正完了」の下位分類である「リピート」は、学習者が教師のリキャストをそのまま繰り返す方法でエラーを訂正する反応で、「自力訂正」は教師のリキャストを基に学習者が自らの力で自己訂正することを意味する。

「訂正未完了」の下位分類である「エラー継続」は、教師がリキャストを与えたにも関わらず、学習者のエラーが十分に訂正されておらず、場合によっては新しいエラーが続くことを指す³。「同意」は 教師のリキャスト後、学習者がエラーを訂正せず、「はい」などと返事のみをすることを示す⁴。「反応無し」は教師のリキャスト実施後、学習者が何も発話しないことである。「機会無し」は学習者が教師のリキャスト後に自己訂正する機会自体を失うことを指すが (최은정・김영주, 2011)、本稿のデータでは観察されなかった。

最後に「母語返答」は教師のリキャストに対し、学習者がエラーを訂正せず母語で答えることを示す。「母語返答」はこれまでの先行研究には報告されておらず、本研究のデータから新たに観察された学習者の反応と思われる。

学習者の反応が教師と学習者の会話において実際にどのように表れたかについては、次章で本研究のデータを基に記述していく。

4. 研究結果

本研究で収集したデータからは学習者の発音エラー、語彙エラー、文法エラー、そして複数のエラーが同時に発生する多重エラーが観察されている。本稿では紙面上の制約により、データの中から観察された数が最も多かった語彙エラーを中心に述べる。

本稿における語彙エラーは、語彙の使用が適切でない場合をはじめ、学習者が希望の語彙を産出できない場合も含めている。次ページの図 1 は語彙エラーに対するリキャストの回数をまとめたものである。

³ Lyster & Ranta (1997:51) は、エラーが一部のみ訂正されているものを「部分的訂正」(partial repair) と分類している。学習者が教師のリキャストを受け、エラーを訂正するつもりで異なる種類のエラーを含む発話をする 것도「エラー継続」であるが、Lyster & Ranta (1997:50) は、このような学習者の反応を「異なるエラー」(different error) と分類している。

⁴ 진제희 (2005:382) はこのような学習者反応を「인지표시」(認知表示) と分類している。

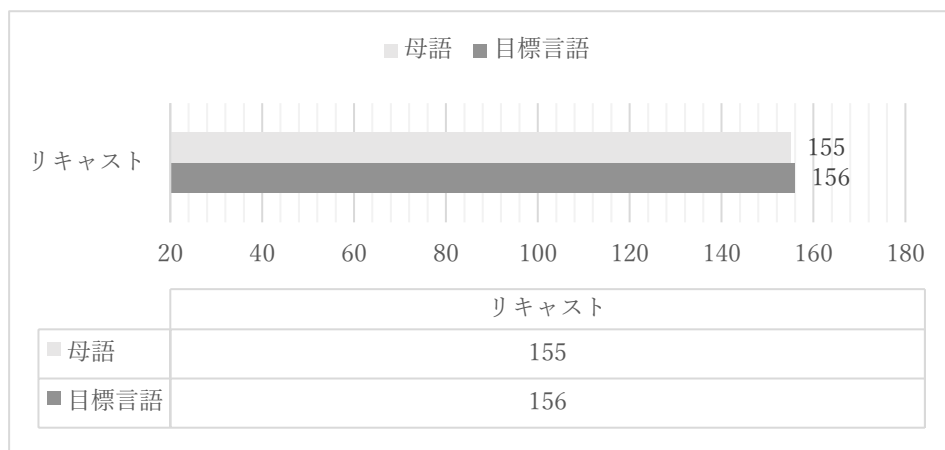


図1 語彙エラーに対する使用言語別リキャストの使用回数比較

図1を見ると、語彙エラーに対するリキャストの使用言語は母語と目標言語の回数の差が非常に少なく、ほぼ同数で使用されていることが分かる。リキャストの使用言語により、学習者の反応に差があるかについては、次節にて研究結果を学習者の反応の上位分類である「訂正完了」と「訂正未完了」に分け、詳細を述べていく。

4.1 訂正完了

教師のリキャストに使用された言語によって「訂正完了」の下位分類である「自力訂正」と「リピート」の学習者反応には違いが見出された。まず、訂正完了の数を比べると母語を使用したリキャストに対する訂正完了の反応は113回、目標言語を使用したリキャストに対する訂正完了の反応は130回であり、目標言語を使用したリキャストの方が母語を使用したリキャストより訂正完了の数が多い。

下位分類を確認すると母語を使用したリキャストに対しては合計113回のうち107回が「自力訂正」である反面、目標言語を使用したリキャストに対しては合計130回のうち128回が「リピート」である。訂正完了全体の数を比べると、リキャストの使用言語による違いがあまりないように見えるが、「自力訂正」と「リピート」の数の差はかなり大きいことが確認できる。この内容は次ページの図2にてまとめて示す。

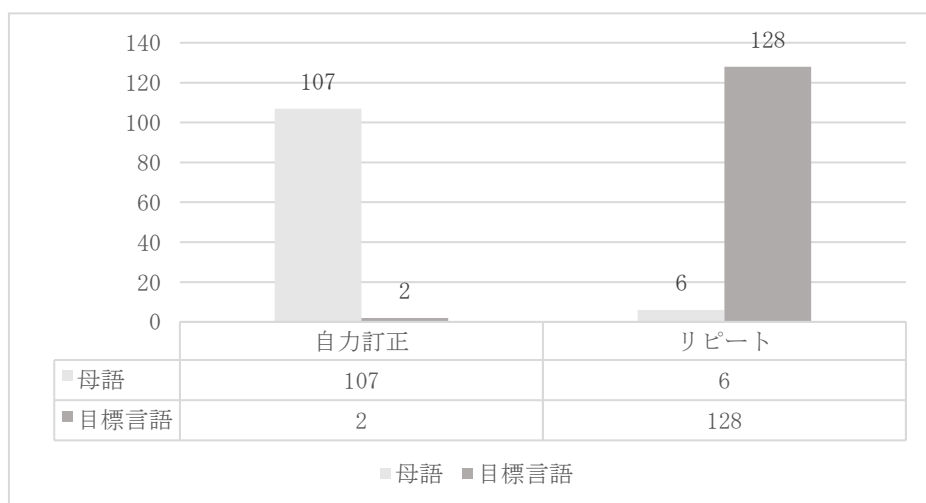


図2 使用言語別リキャストに対する学習者の訂正完了反応回数比較

続いて「自力訂正」と「リピート」は具体的にどう異なるかについて以下の例文を中心に述べていく⁵。

例1

- 1 S 4 번은 4 번은 여자하고 남자가 廊下..?
 <4番は 4番は女性と男性が>
- 2 T 廊下.. 廊下.. 복도? ➡ TL リキャスト
 <廊下?>
- 3 S 복도? 복도에 있습니다. ➡ 訂正完了・リピート
 <廊下? 廊下にいます>

上記の例1では学習者が「복도<廊下>」の産出ができず躊躇しているところ、教師が2行目で「廊下」を母語で繰り返して、最終的には目標言語でリキャストをしている。学習者の分からない語彙は母語を使用してリキャストをしたとしても目標言語の産出が難しいため、直接目標言語を用いてリキャストをしたと考えられる。ただし、教師が目標言語でリキャストを与えた場合、学習者にとってはある意味「答えを教えている状況」のため、教師のリキャストをそのまま繰り返す「リピート」の形で自己訂正をするケースが非常に多く観察されている。

⁵ 以下、例文においてSは学習者、Tは教師を意味する。また、TLは目標言語、L1は母語を意味する。

例 2

1 S 생각해서 지금까지 遠慮?

<と違って今まで>

2 T あ…えっと、してなかった

➡ L1 リキャスト

3 S 줘.. 하지.. 앉았을 뿐이에요 저는 하고 싶어요

<ちょっと..して..いなかっただけです 私はしたいです>

➡ 訂正完了・自力訂正

1行目で学習者が目標言語を産出できず日本語の「遠慮」と発話したことに対し、教師は2行目で「してなかった」という母語を使用してリキャストをしている。例2では母語を用いたリキャストが、学習者が目標言語に産出しやすい語彙に置き換える過程において母語の範疇の中で、意味の変化を最小限に抑えながら目標言語に産出しやすい表現を提示する形式で行われていると推測される。

上記の例1と2を比べると、例1は目標言語を使用したリキャストで正しい語彙が提示されているため、学習者がリピートをすることが観察されている。一方、例2では母語を使用したリキャストを学習者が目標言語に変換する必要があるため、自力訂正の学習者反応が見られていることが分かる。

4.2 訂正未完了

引き続き本節では図3をもって、リキャストの使用言語に対する「訂正未完了」の回数について記述する。

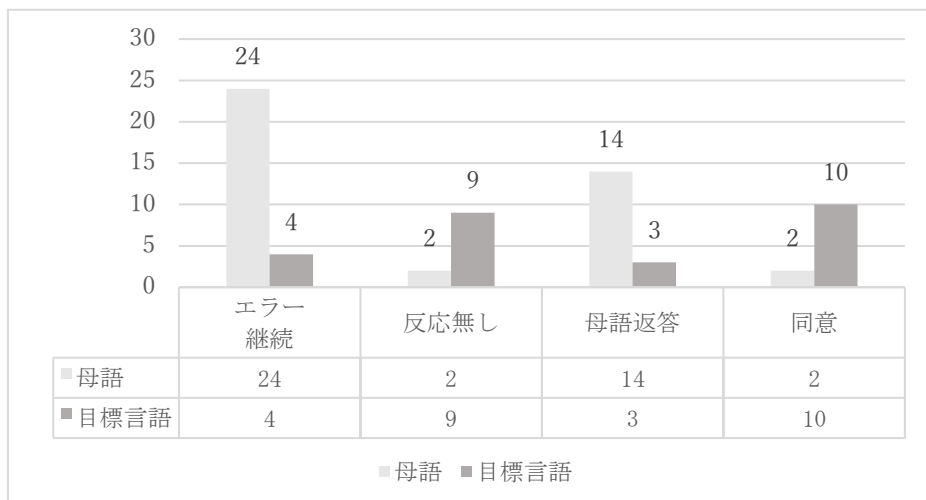


図3 使用言語別リキャストに対する学習者の訂正未完了反応回数比較

図 3 を見ると、訂正未完了の反応は母語を使用したリキャストに対して合計 42 回、目標言語を使用したリキャストに対して合計 26 回観察されており、母語を使用したリキャストの方が目標言語を使用したリキャストより訂正未完了の数が多いことが分かる。

母語を使用したリキャストの学習者の反応の内訳をみると、「エラー継続」が 24 回、「母語返答」が 14 回の順に多く、「反応無し」と「同意」はいずれも 2 回で同数であることが分かる。他方、目標言語を使用したリキャストに対する学習者の反応は「同意」が 10 回で最も多く、「反応無し」が 9 回、「エラー継続」が 4 回、「母語返答」が 3 回の順に観察されている。

以下の例 3 から、目標言語を用いたリキャストに対して訂正未完了の下位分類である「エラー継続」がどのように表れているかについて述べる。

例 3

- 1 S 책은 많이 있는데 머리에 들어 와요..
 <本はたくさんあるのに頭に入って来ます>
- 2 T 머리에 안 들어 와요? 책이?
 <頭に入って来ないですか?>
- ➡ TL リキャスト
- 3 S 음.. 책이..? 책이. 어떻게 공부하면.. 음..
 <うん.. 本が..? 本が. どのように勉強すれば..うん..>
- ➡ 訂正未完了・エラー継続
- 맨, 맨 처음에는 단어책으로 공부하는 것을 좋아했어요
 <一番、一番初めは単語集で勉強することが好きでした>

1 行目の学習者の発話を見ると、後半の「머리에 들어 와요<頭に入って来ます>」が、前半の「책은 많이 있는데<本はたくさんあるのに>」と繋がらないことが分かる。これは、後半の部分に否定の意味を表す語彙が抜けているからであると推定される。そのため、教師は 2 行目で否定表現を入れて「머리에 안 들어 와요?<頭に入って来ないですか?>」と目標言語でリキャストしている。しかし、学習者は 2 行目のリキャストに続く「책이?<本が?>」にフォーカスを置いたため、3 行目で「책이<本が>」と訂正をせず、そのまま会話を続けている。上記の例は、学習者が教師のリキャストをエラーの訂正であるとは気づいたものの、エラー個所の誤認により別の個所のエラーを訂正し、新たなエラーが発生した「エラー継続」反応と考えられる。

上記の例 3 では会話の流れを止めず、正しい目標言語の形式を与えるというリキャストの特徴がよく表れている。しかしながら、エラーがどこで発生しているかを知らせていないため、学習者がエラー発生個所を誤認してしまう恐れ

もある。

続く例 4 では、母語を用いたリキャストを補う形で母語を用いた誘導が使用されていることが確認できる。

例 4

- | | | |
|-----|--|---------------|
| 1 S | 책상이나 えっと 이거..
<机や これ..> | |
| 2 T | 椅子..? | ➡ L1 リキャスト |
| 3 S | 자..
<す..> | ➡ 訂正未完了・エラー継続 |
| 4 T | 二文字目です なんとか자
<す> | ➡ L1 誘導 |
| 5 S | 의자 있습니다
<椅子 あります> | ➡ 訂正完了・自力訂正 |

本研究で収集したデータは映像がなく音声のみであるが、教師が 2 行目において母語で「椅子」とリキャストしているところを踏まえると、1 行目で学習者が「이거<これ>」と言いながら指していたものは、タスクに使用された絵の椅子であると推定される。

学習者が 3 行目で希望した目標言語を一部しか産出できない「エラー継続」の反応を示したため、教師は 4 行目で母語を用いて「二文字目」や「なんとか자<す>」と学習者にエラー発生個所を特定させる誘導を与えている。学習者はこれらの訂正フィードバックに基づき、5 行目で自力訂正をしている。

例 3 と例 4 のように、教師のリキャストはその使用言語に関係なく、学習者にとってエラーの発生個所を特定させる役割は果たせない。その点、誘導にはエラーの発生個所を特定させる役割があるので、リキャストのみならず必要に応じて他の訂正フィードバックを用いることで学習者の自己訂正が促せると考えられる。以下の例はリキャストに対し、学習者が「母語返答」の反応を示したものである。

例 5

- | | | |
|-----|--------------------------------------|--------------|
| 1 S | 남자가, 남성이 본대? 하는?
<男の人が、男性が本来？する？> | |
| 2 T | 아 원래? 하는?
<あ 元々？する？> | ➡ TL リキャスト |
| 3 S | 見本 | ➡ 訂正未完了・母語返答 |
| 4 T | 見本?えっと、模範? | ➡ L1 リキャスト |

5 S 모범?

➡ 訂正完了・自力訂正

<模範?>

例5を見ると、1行目で学習者が「본대? 하는? <本来? する?>」と適切な語彙が使用されていない語彙エラーが発生している。しかし、2行目で教師が「본대<本来>」を「원래<元々>」に変えて母語でリキャストをすると学習者は訂正をせず、母語で「見本」と発話する反応を見せた。この反応は学習者が自分自身の発話意図を明確にするための役割をしていると考えられる。これはあくまで事後推測であるが、学習者は「モデル」の意味を持つ「본보기<鑑>」を目標言語で産出しようとしていたのではないかと考えられる。学習者が3行目で話した「見本」は日本語では同じ形で「サンプル」と「モデル」の二つの意味を持っているが、韓国語では二つの意味を表す語彙の形が全く異なるため、学習者が目標言語に産出した時に語彙の使い方が不自然になる恐れがある。そのため、教師は4行目において「見本」の二つの意味の中で、「モデル」の意味を持つ「模範」を提示したと考えられる。学習者は教師のリキャストを受け、5行目で「모범<模範>」と言い始め、自己訂正を開始した。

上記の事例では、学習者の自己訂正が完了しているが、このように1つの語彙が複数の意味を持っている場合、教師が学習者の希望産出語彙を勘違いする、または学習者の希望産出語彙を恣意的に判断し、間違えた語彙産出を誘導する恐れがある。そのため、教師が学習者の母語でリキャストを提供する際には、教師が学習者の母語においてある程度高い運用能力を持つ必要があると思われる(이정희, 2019:184)⁶。

続いて例6では、目標言語を用いたリキャストに対し、学習者が「同意」の反応を示す事例を説明する。

例6

1 S 예, 그리고 여자.. 회원이..

<はい、そして女性.. 会員が.. >

2 T えっと、かい.. 会社員?

➡ L1 リキャスト

3 S 예

➡ 訂正未完了・同意

<はい>

4 T 회사.. 샤.. 샤..

➡ L1 リキャスト

5 S 아! 회사.. 원이 회사원이 와서

➡ 訂正完了・自力訂正

<あ!会社.. 員が 会社員が来て>

⁶ 이정희(2019:184)においても教師が学習者の母語と目標言語の類似点と相違点を深く理解し、授業設計やフィードバックに利用すべきであると述べている。

例6では1行目で学習者が「회원(会員)」と発話したことに対し、2行目で教師は「会社員?」と母語を使ってリキャストしている。これは、「회원(会員)」という語彙が、「会員」という意味で使われたのであればエラーではないが、「会社員」を意味している場合はエラーになるため、使用語彙の意味確認の役割を含めたリキャストであると推定される。3行目で学習者が「同意」の反応を見せていることから、学習者は教師の2行目のリキャストをエラーの訂正ではなく、会話継続のための意味交渉と認知した可能性が高いと思われる。3行目の時点でエラーの訂正が完了していないため、教師は4行目で母語を使用してリキャストをしている。このリキャストで繰り返される「しゃ」は適切な目標言語の形である「회사원(会社員)」を産出するために1行目で抜けていた「사<社>」を入れる必要があるからであると考えられる。このリキャストは学習者に目標言語の語彙産出を促しつつ、エラーの箇所をピンポイントで示していると考えられる。その結果、学習者は5行目で自力訂正をしていることが分かる。

5. 考察

本研究は「教師のリキャストの使用言語により、学習者の反応が変わるのか」というリサーチクエスチョンを立て、教師と学習者による一対一会話を分析する方法で考察を行った。その結果、リキャストの使用言語に関わらず、学習者の自己訂正は完了していることが分かった。しかし、学習者の自己訂正方法をさらに分類してみると、母語を用いたリキャストに対しては教師のリキャストをヒントに学習者自らエラーの訂正を行う「自力訂正」が最も多く、目標言語を用いたリキャストに対しては教師のリキャストをそのまま繰り返す「リピート」が最も多く観察されたことが分かった。

母語を用いたリキャストに対する学習者の反応の「訂正完了」の下位分類として最も多かった「自力訂正」は、目標言語産出に繋がりやすい母語が提示されており、学習者にとってスキヤフォールディング(Scaffolding)の役割を果たしていると考えられる。しかしながら、教師が学習者の希望産出語彙を誤解した場合、間違った語彙産出に誘導してしまう恐れもある。また、学習者の母語を全て目標言語にそのまま変えられないにも関わらず、ある意味母語を目標言語に「直訳」させて目標言語を産出させるやり方には議論すべき問題があると思われる。

「訂正未完了」の反応として最も多かったのは「エラー継続」であり、学習者の母語で提示された語彙を、学習者が目標言語に十分「変換」できなかった

場合に表れたと推測される。また、教師のリキャストが示すエラーの発生個所を学習者が誤認し、別の個所を訂正してしまう「エラー継続」の反応も確認できた。この場合は、エラーの個所を特定させる「誘導」など、他の訂正フィードバックを組み合わせることで、学習者の自己訂正を促すことができる可能性が示唆されている。

その次に多く観察されたのは「母語返答」の反応である。学習者の発話意図にそぐわない母語が提示された際に、学習者がエラーの訂正をせず、母語で教師と意味交渉を行うために示した反応であると思われる。

他方、目標言語を用いたリキャストに対する学習者の反応の「訂正完了」の下位分類として最も多かった「リピート」は、教師がすでに目標言語の正しい形を示しているため、学習者はそれをそのまま繰り返す方法を選択して訂正を完了していると考えられる。これは、学習者があくまで教師のリキャストをヒントとして自力で訂正する「自力訂正」とは区別されるべきであると思われる(최은정・김영주, 2011)。ただし、「リピート」が決して望ましくないものである、または回避すべきものであると主張しているわけではないことを明記しておきたい。目標言語を用いたリキャストとそれを繰り返す「リピート」は、学習者が適切な目標言語の形式に触れさせられるという点で、インプットとしての役割を果たしており、言語習得において肯定的側面を持っているからである(Lyster & Ranta, 1997; 김서형, 2018)。

他方、リキャストはエラーの発生を知らせないまま会話の流れを遮らず、正しい目標言語の形のみを提供するという暗示的特性を持っているため、学習者が教師のリキャストをエラーの訂正のための訂正フィードバックであると気づきにくい事例も観察されている(Lyster & Ranta, 1997)、本研究でも目標言語を用いたリキャストに対する学習者の反応の中で、「訂正未完了」の下位分類として「同意」や「反応無し」が多くみられている。

高橋(2012)はリキャストの暗示性を明示的に変えるために、語尾を強調する、またはイントネーションに変化をもたらす方法で知覚的顕著性を高めることができると述べている。そうすることで、学習者は教師のリキャストを会話の一部ではなく、エラーの訂正のための手段として認知することができ、学習者の自己訂正が促せるということである。

仮に、リキャストの目標言語ではなく母語で提示すれば、会話の途中で言語が変わるため、リキャストの知覚的顕著性を高められるのではないだろうか。しかし本研究の結果では、学習者がリキャストを認知していないとされる「訂正未完了」の「反応無し」や「同意」に使用言語による差はあまり大きくなかったため、この点を検証できたとは言い難く、次回の研究課題とせざるを得ない。

本研究はリキャストの使用言語による知覚的顕著性確保については検証できていないが、学習者の母語使用に関しては新たな側面を示唆していると考えられる。第2章の先行研究では、学習者の母語は学習者の認知的負荷を軽減させることで、学習者の目標言語習得の助けになる (Macaro, 2005; Zhao & Macaro, 2014) と述べられていた。しかし、母語を用いたリキャストは上記と相反しており、学習者が母語で提示されたリキャストを目標言語に産出する時、むしろ認知的負荷がかかっていると言える。まとめると、母語を用いたリキャストは、目標言語を用いたリキャストより、学習者に母語を目標言語に変換させる認知的負荷をかけることで、学習者の自己訂正を促しているということである。

6. おわりに

本研究は大学の規定や参加者の希望等により、映像の撮影をせず録音のみを分析している。そのため、学習者が授業中にどのようなジェスチャーや表情で、教師がどの部分を指しながら発話していたかについては詳細に調べられなかったという限界があると言える。

また、教師の訂正フィードバックに対する学習者の訂正完了が、必ずしも学習者が今後エラーを発生させないという保証ではなく、なおかつエラーの該当項目を習得したとも断言できない。なぜなら、教師のリキャストを学習者が訂正フィードバックとして認知しているかによって学習者の自己訂正は変わるものであり (Schmidt, 1990)、発話時は訂正を完了したとしてもすぐに忘れてしまうことも想定されるからである。

すぐは答えられず訂正未完了の反応が表れた場合でもそれが学習者の長期記憶に残り、今後同じエラーを繰り返さないことも考えられる。さらに、学習者が訂正の必要性を理解しつつも会話の継続を優先し、あえて訂正を完了しないことも想定されるため (김서형, 2018)、訂正フィードバックに対する学習者の反応だけをもって学習者の習得の判断材料とするには、変数が多すぎるのが現状である。

しかしながらも学習者の反応は、少なくとも教師にとってはその場で学習者の理解を判断するインジケータールになり得ると想定される。教師は限られた時間内で授業内容をこなし、学習者のエラーを訂正するなど、様々なことを行う。その中で、学習者のエラー訂正ができず、適切な目標言語が産出できない場合、教師は学習者が訂正を完了した場合に比べ、他の訂正フィードバックを用いるなどでより長い時間を割くと考えられる。本稿には紙面上の理由で掲載していないが、本研究で観察されたデータからも、学習者の「エラー継続」反応につ

いて、引き続き訂正フィードバックを行うケースが多数確認されている。

この点を踏まえると、訂正フィードバックに対する学習者の反応は、それを提示する教師にとっては、学習者が今後も同様のエラーにおいて、適切な目標言語が産出できるか、又は教師の言葉が的確に理解されているかの目安としての役割は果たしていると言えるのではないだろうか。

なお、本研究で観察された多くのリキャストは、語尾の上がる疑問文のような形で表れていた。これは、前述した通り学習者の希望産出語彙の確認を行いつつ、正しい目標言語の形を提供するための方法であると考えられる。訂正フィードバックの中では「繰り返し」に関してイントネーションの違いによりその役割が異なることが報告されており、上昇イントネーションはエラーの発生を学習者に気づかせる役割が、下降イントネーションは学習者の発話にエラーがないことを認める役割がある(한상미, 2001; Hall, 2010)ことが明らかになっている。

本研究ではリキャストの使用言語を主な変数としていたため、今回はイントネーションを変数として扱っていないが、次回はリキャストのイントネーションを変数とした研究をも進めていきたい。

<参考文献>

- 고은선, 김성훈 (2017) 「교수자의 학습자 모어 사용이 제 2 언어 텍스트에 미치는 영향 -중국어를 모어로 하는 한국어 학습자를 대상으로-」 『한국언어문화학』 14(1), 국제한국언어문화학회, pp. 1-25.
- 김서형 (2018) 「한국어 수업에서의 구두 수정 피드백과 반응에 대한 교수자와 학습자의 인식 조사」 『외국어로서의 한국어교육』 51, 연세대학교 언어연구교육원 한국어학당, pp. 1-36.
- 김숙영, 고정민 (2015) 「형태초점교수 수업에서 오류수정 피드백과 학습자반응」 『외국어교육연구』 29(3), 한국외국어대학교 외국어교육연구소, pp. 109-129.
- 이석란 (2009) 「교사의 오류 수정 유형에 따른 한국어 학습자 반응에 관한 연구」 『외국어교육』 16(3), 한국외국어교육학회, pp. 457-485.
- 이선진 (2016) 「중국어인 한국어 학습자의 구어 오류에 대한 교사 피드백과 학습자의 피드백 수용 양상 연구」 경희대학교 대학원 박사 학위 논문.
- 이정희 (2019) 『한국어교육을 위한 외국어 습득의 이해』 도서출판 하우.
- 진제희 (2005) 「한국어 수업에 나타난 교사의 수정적 피드백과 학습자 반응 연구」 『이중언어학』 28, 이중언어학회, pp. 371-390.

- 차상아 (2010) 「한국어 학습자 발화 오류에 대한 교사의 수정적 피드백 효과」 연세대학교 교육대학원 석사 학위 논문.
- 최권진 (2008) 「학습자 모국어를 활용한 한국어 교수-학습 방법의 모색」 『한국어교육』 19(1), 국제한국어교육학회, pp. 299-319.
- 최은정, 김영주 (2011) 「한국어 초급 교실에서의 교사의 수정적 피드백과 학습자 반응」 『응용언어학』 27(1), 한국응용언어학회, pp. 107-129.
- 한상미 (2001) 「한국어 교실에서 나타난 교사의 피드백 유형 연구」 『외국어로서의 한국어교육』 25, 연세대학교 언어연구교육원 한국어학당, pp. 453-505.
- 高橋宜明 (2012) 「訂正言い直しにおける知覚的顕著性—暗示的言い直しから明示的言い直しへ—」 畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文編著(2012) 『第二言語習得研究と言語教育』 くろしお出版, pp. 84-108.
- 崔銀景 (2016) 「教師の訂正フィードバックは目標言語のみで行われるべきか」 『韓国文化研究』 6, pp. 41-54.
- (2020a) 「学習者の発音エラーに対する教師の訂正フィードバックと学習者の反応—日本語母語話者を対象とした韓国語の授業例を中心に—」 『言語コミュニケーション文化』 17, pp. 107-118.
- (2020b) 『教師の訂正フィードバック使用言語による学習者の反応について—日本語母語話者の韓国語学習を中心に—』 関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科博士論文
- 名部井敏代・森博英・田中真理・原田三千代・大関浩美編著 (2015) 『フィードバック研究への招待 - 第二言語習得とフィードバック』 くろしお出版
- Chaudron, C. (1988). *Second language classrooms: Research on teaching and learning*. Cambridge University Press: New York.
- Ellis, R., Loewen, S., & Erlam, R. (2006). Implicit and explicit corrective feedback and the acquisition of L2 grammar. *Studies in Second Language Acquisition*, 28(2), 339-368.
- Hall, J. K. (2010). Interaction as method and result of language teaching. *Language Teaching*, 43(2), 202-215.
- Lyster, R., & Ranta, L. (1997). Corrective feedback and learner uptake: Negotiation of form in communicative classrooms. *Studies in Second Language Acquisition*, 19(1), 37-66.
- Macaro, E. (2005). Codeswitching in the L2 Classroom: A Communication and Learning Strategy. In: Llurda, E., Ed., *Non-Native Language Teachers: Perceptions, Challenges, and Contributions to the Professions*, Springer, USA, 63-84.
- Schmidt, R. (1990). The Role of Consciousness in Second Language Learning. *Applied Linguistics*, 11, 129-158.

Zhao, T., & Macaro, E. (2014). What works better for the learning of concrete and abstract words: Teachers' L1 use or L2-only explanations?. *International Journal of Applied Linguistics*. 26, 75-99.

- 受付 : 2021 年 7 月 31 日
- 修正 : 2021 年 9 月 20 日
- 掲載 : 2021 年 9 月 30 日

韓日の対人コミュニケーションにおける 身体接触行動の一考察

—ドラマ『グッド・ドクター』（韓日版）を資料として—

任 炫樹 (帝塚山学院大学)

< Abstract >

In this paper, we examined the similarities and differences between Korea and Japan, focusing on the physical contact scene accompanying the interpersonal communication scene in the original work and its remake version. One of the common points in this consideration was that people with a superior status or a higher age were made to those who did not. This is accompanied by verbal actions or alone in scenes of caring or consolation. This trend was much stronger in the Korean version than in the Japanese version. On the other hand, the difference is that there are not a few scenes in the Korean version in which a person of relatively low status or a lower age accompanies physical contact with a person who is not, and the difference in gender is remarkable in the use of physical contact. In the case of the Japanese version, there were many scenes where a man accompanies physical contact with a man and in the Korean version of the opposite sex. These results suggest that the perception of physical contact behavior accompanying communication is significantly different in the two cultures.

This result will be applicable to intercultural education, Japanese education in Korea, and Korean language education in Japan. It would be important to present more subdivided categories rather than educate learners of general trends in stereotypes. Audiovisual education using the original work and the remake version, which are the research data of this study, will be a good source of cross-cultural understanding that stimulates learners' hearing and point of view at the same time.

Field Japanese language education

Keywords Interpersonal communication, Physical contact behavior, Character relationship, Japanese (intercultural) education

1. はじめに

既存の韓日の言語研究を見てみると、音韻論、意味論、形態論、統語論、語用論など、多岐にわたる分野で多くの研究がなされてきた。これらの研究は主に言語そのものが研究対象になっており、非言語コミュニケーション（Nonverbal Communication、以下NVC）について言及しているものは、あまりないのが現状であるが、この分野についても活発な研究が望ましい。

外国語教育現場においては、「聞く・話す・読む・書く」の外国語4技能を始め、文化学習や文化体験を重んずる教育環境の中で、NVCを異文化教育及び外国語教育の研究対象にすることはまれである。NVCによる誤解や摩擦は言語によるそれよりも場合によっては、人間関係を危うくしたり、相手に不快感を与えたりする恐れがある。このような理由からNVCの文化による差異について、外国語教育現場で取り上げる必要があると主張する研究者も少なくない（任炫樹, 2005・2017; 久保田, 2009）。特に、身体接触行動は、伝えたいメッセージを明確にかつストレートに伝えられるコミュニケーション・チャンネルの一つであることから、異文化比較の観点よりその相違を取り上げる必要があるだろう。

本稿では、テレビドラマの対人コミュニケーション場面に見られる身体接触を取り上げ、それらに日韓の差は見られるか、もし見られるとすればどのような差があり、それらがどのような役割を果たしているのかについて考える。一般的に、日本は典型的な非接触文化であり、それに比べ韓国は高接触文化であると分類されている。

しかし、同じストーリーの範疇にある身体接触の異同を浮き彫りにしてみると必ずしもこの一般論と一致するとは限らない。

本稿は、両文化の非言語行動のスタイルとしてステレオタイプになっている上記の一般論を教育現場でそのまま提示していいのか検証を試みる。また、「ウチ・ソト・ヨソ」というカテゴリーの導入を始め、どのような発話の場面で身体接触が起こるのか、話し手と聞き手の相関関係により使用の頻度が異なってくるのか等についても分析する。この結果は、人間関係トラブルのような異文化におけるミス・コミュニケーションを事前に防げる教育に繋がるであろう。

2. 先行研究

NVCを日韓対照研究の観点から扱っている研究の中でまず、生越（1995）と^{ホン}민표（1998）を取り上げ、日韓のNVCの異同について考える機会を設ける。次

に、曹・釘原（2015、2017）のアンケート調査から得られた身体接触行動の日韓差について紹介する。

2.1 生越（1995）

生越（1995）は韓国のテレビ番組・映画を用いて、日本人と韓国人のお辞儀の違いを調べている。それによれば、お辞儀が日韓両国でよく行われるのは共通しているが、日本人の場合は身体接触を好まないのに対して、韓国人の場合は握手や頬ずり、ハグなどバラエティに富んでいるという相違点も見られたという。さらに、日本では握手の習慣は視線と接触を嫌うという問題とからんで一般化していないが、韓国ではお辞儀と結びついて盛んであることを明らかにしている。このような接触は、場合によっては、言葉の問題より誤解を招きかねないと生越は指摘している。

2.2 ^{ホンミンビョ}홍민표（1998）

^{ホンミンビョ}홍민표（1998）は「動作学」「接触学」「空間学」に焦点をあてて、韓国人大学生と日本人大学生を対象とし、アンケート調査を行なっている。^{ホンミンビョ}홍민표によれば、韓国人の場合は、年齢と親疎関係の2つが視線に大きな影響を与えるのに対して、日本人の場合は、親疎関係が視線に影響を与えるという。また、日韓ともに、目上の人の前では正座をしなければならないという意識をもっているが、その坐り方には相違が見られたと指摘している。例えば、韓国人の男性はあぐら、女性は横座り方をすると答えているが、日本人は男女ともに膝を屈して坐ると答えている。さらに、同性の友人と歩くとき、韓国の女性の場合は、腕を組むなど身体接触を頻繁に行うのに対して、日本人はほとんど接触をしないと報告している。空間使用意識において、日本人は他人と自分の空間をはっきり区別するのにに対して、韓国人は日本人ほど区別しない傾向があるという。

この調査報告は、一般に知られている常識を客観的かつ数量的に確認・検証したものであるが、非言語行動に関する調査を質問紙法によるアンケート調査のみに頼った点に疑問が残る。アンケート調査は非言語行動に対する意識調査にすぎないため、それを補うための視聴覚資料が望まれるであろう。

2.3 曹・釘原（2015、2017）

曹・釘原（2015）は、日韓の大学生を対象に両親や親友と行ったタッチの授受についてアンケート形式の調査を行った。Jourard（1966）から始まった身体

接触研究を始め、曹・釘原（同）の研究までを総合的に考えた場合、時代と文化を超えても変化しない身体接触の普遍性が存在しているという。それは、1) 両親より親友との接触度合いが高く、2) 父親より母親からより多く接触され、3) 両親は息子より娘により多く接触する、4) 異性親友を除けば、性的な部位への接触度合いは低い、以上の4項目である。また、日韓の身体接触に見る文化の特異性として、1) 両親との接触度合いにおいて日本は韓国の半分に満たない点、2) 日韓間で全体的な身体接触度に相当な差が確認できた点、以上の2点を取り上げられている。

この研究に続き、曹・釘原（2017）は、日本と韓国の大学生を対象に、親しい相手との身体接触に関するアンケート調査を行った。この研究では、身体接触を「日常生活の中で行われる悪意をもたない身体接触、つまり、なでたり、さすったり、軽く触れたり、手を握ったり、腕や肩を組んだり、相手とハグをするなどの肯定的な接触に限定したうえで調査が行われた。否定的な接触あるいは偶発的な接触を含まない親密表現としての身体接触のみを調査対象としている。その結果、異性の親友における文化の単純主効果は認められなかったものの、父親・母親・同性の親友においては日本より韓国のほうが身体接触の度合いが高いという結果をもたらした。

NVCを判定にするにあたって、理想的な条件を揃えることは大変難しい。言語行動を行う際に見られる NVC の研究が少ないこともそのためであろう。曹・釘原の研究は、日韓の接触行動について一般的な事柄を数値化して客観的に証明できた点からは評価できる。とは言え、無意識的に行うこともある NVC の領域をアンケート調査のみに頼ったことについては指摘せざるを得ない。そのため、筆者はこのような難点を最小限にするために動画資料を用い、曹・釘原が注目していない項目を取り入れる。それについては次の節で述べる。

3. 作品概要と研究課題

本稿の身体接触の考察では、動画の資料としてテレビドラマ（原作とそのリメイク版）を使うことにする。作品を選定するにあたっては、できるかぎり、現実離れをしていないストーリー・テーマのものを選ぶように心掛けた。本稿は、ウチ・ソト・ヨソという 3 軸を立てているが、ソトにおける身体接触の特徴を探るために、仕事現場が舞台となっている作品を選んだ。このような理由から、原作とリメイクドラマは、身体接触行動の特徴を比較対照するにいい材

料になると考えられる。

3.1 作品概要

考察の対象とした作品は、原作が韓国語版である『굿닥터 (グッド・ドクター)』(2013) 1話～20話(約1000分)と、その日本語版である『グッド・ドクター』(2018) 1話～10話(約500分)である。

原作『굿닥터 (グッド・ドクター)』(韓)は、2013年8月15日から10月8日までKBSにて放送された(全20話)。この作品は、日本のケーブルテレビKBS-WorldやBSフジでも放送された。一方、リメイク版の『グッド・ドクター』(日)は、2018年7月12日～9月13日までフジテレビにて放送された。両作品の概要は次のようになる。

自閉症スペクトラム障害とサヴァン症候群を抱えているパク・シオン(=新堂湊)は、幼少期の頃から小児外科医になることを夢見、ついにソンウォン大学病院(=東郷記念病院)のレジデントになる。これは、幼少期に出会った、町の保健所(診療所)の医師チェ・ウソク(=司賀明)の支えによるものだった。パク・シオン(=新堂湊)の周辺人物である指導世話役のチャ・ユンソ(=瀬戸夏美)を始め、教授のキム・ドハン(=高山誠司)、科長のコ・チュンマン(=間宮啓介)等は、協調と葛藤の中で患者の子供たちを治療する。障害をもっているパク・シオン(=新堂湊)は、周りから厳しい評価を受けながらも奮闘し、最後には周りの人々を感動させる。温かいストーリーと俳優らの名演技により、両作品はそれぞれの国で高視聴率を記録しながら話題となった。

原作とリメイク版のストーリー等は酷似していながらも、それぞれの登場人物のリアリティや性格は文化によって相違を見せる。この相違は、制作陣の徹底的な現場検証などによって生まれたものである。

3.2 研究課題

身体接触は大きく、「肯定的なもの」と「否定的なもの」で分けることができる。ここでいう「肯定的なもの」とは、相手を励ましたり、褒めたりする場面に見られる相手への包容力かつ親密さを基盤にするスキンシップを意味する。一方、「否定的なもの」とは、相手を貶したり、言い争う場面に見られ、前者の場合と反対の役割をするスキンシップを指す。

前者の場合は、対人関係における親密さを促す役割をしているとされる。反面、後者はその反対の役割をしている。

本稿は、韓国と日本という異文化において、どのような場面で身体接触が表れる傾向にあるのかについて明らかにすることを目標の一つとしている。そのため、「肯定的なもの」を始め、「否定的なもの」までをも考察の対象に含め

る。また、資料のドラマの背景が病院である点、現実には起こり得る可能性が高い身体接触場面を中心に考察を行うことが大前提である点などを踏まえ、次の場面における身体接触行動は考察対象外とする。

- 1) 医者による患者への診察シーン
- 2) 愛情表現の発露として表れる本能的身体接触
- 3) 暴力シーン（偶発的な行動）

その他、回想場面に繰り返し見られる身体接触は、最初に登場したもののみをカウントしている。

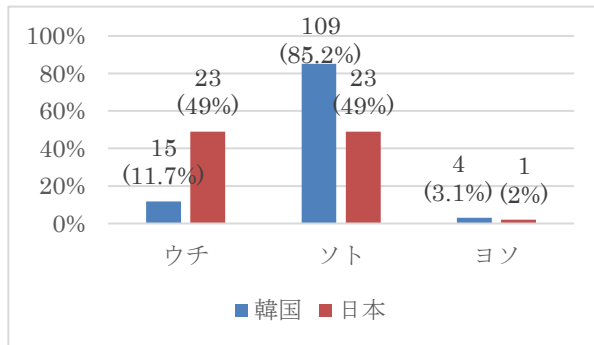
また、一つの場面で反復される同じ接触行動については1回と数えた。しかし、一つの場面で頭を撫でた後、手を握った場合のように異なる種類の身体接触が見られた場合は、それぞれを1回ずつ数えている。客観的に調査するには、Knapp (1978: 283-284) に指摘されているように、訓練された被験者によって検定されるべきであろうが、本稿のNVCの検定は筆者1人で行った。その理由は、身体接触行動は画面を繰り返して分析することによって正確に観察することができたためである。

4. 身体接触到ウチ・ソト・ヨソの差は表れるのか

非言語コミュニケーションの機能の一つとして挙げられるのは、コミュニケーションの当事者同士の間関係を提示するという点である。この特徴を最もよく表すのが身体接触である（末田・福田 2011）。すでに文化と身体接触とを関連付けて多くの研究が行われてきている。中東や南米、南ヨーロッパは高接触文化として分類される一方で、アジアや北米、北ヨーロッパは非接触文化として分類される（Hall&Friedman 1999）。とは言え、韓国と日本のそれを言及する場合、同じく非接触文化として扱うには少し無理がある部分も存在するのではないかと推察し、人間関係の範疇により、接触行動は異なる特徴があると推察し、本章では、「ウチ・ソト・ヨソ」という3軸を立てる。ウチ・ソト・ヨソの分類については、中山（1988）にならう。中山は、夫婦、親子、兄弟といったような非常に親密な関係をウチ、自分とはまったく無関係な赤の他人をヨソ、学校や職場、近隣の人々といったウチとヨソとの中間的、両義的な性格をもつ人々をソトとしている¹。

1 ウチ・ソト・ヨソの分類について三宅（1994）と中山（1988）の間では、隔たりが存在する。それは、次のような理由からである。三宅と中山との分類の違いは、親しい友達の領域にある。三宅は親しい友達のカテゴリーをウチの領域としているが、中山はそれをソトの領域としている。普段の言語行動調査においてはインフォーマントに直接に親しい友達を設

家族同士のような「ウチ」関係、円満な人間関係を維持する必要がある「ソト」関係、道でばったり会うだけの「ヨソ」関係、以上の3軸を立て、両言語の人々が対面コミュニケーションを取る際に、それぞれどのような頻度で身体接触をとるのかについて調査した。その結果を下の図1に示す。



韓国語版における身体接触の頻度はほぼソトに集中している（合計128例のうち、109例）。一方、日本語版の場合は、合計47例のうち、ウチとソトで23例ずつ同じ頻度で表れている。

図1 ウチ・ソト・ヨソによる差異

日本語版は韓国語版に比べ、ソト関係にいる人へ身体接触を控える結果となった。韓国語版はソトに集中している関係もあり、ウチ関係ではあまり見られなかった。ウチ関係同士の韓日の差が大きかったこともあり、まずウチ関係に見られた日本語の例を取り上げる。（非言語情報は { } と波線として表す。）

<例1> 日本語版1話

母(30代)→子供(男、入院中、6歳):ウチ関係

子供:ママの誕生日、今日でしょう。僕退院してお家で皆でお祝いしたかったんだ。〔誕生日の歌を歌う〕おめでとう。ママ。ごめんね。皆でお祝いできなくて。

母:〔絵の中の誕生日のケーキのロウソクを消し、子供の頭を撫でながら〕上手に描けてるね。

{子供を抱きしめて} ありがとう。上手に描けてるね。

<例2> 日本語版1話

湊の兄(小学高学年)→新堂湊(弟、6歳):ウチ関係

湊の兄:〔いじめられている湊を救い出し〕湊、お前バカなんかじゃない。すごいんだぞ。お前なら医者になつてなれる。〔湊の頭を撫でながら〕頭がよくないと成れないし、すごいって尊敬されるんだぞ。はい〔手作りの手術用のナイフを渡す〕

定してもらっているが、テレビドラマや映画においては親しい友達の判定がいくぶん曖昧になる。このような曖昧さを避けるために本稿の考察においては親しい友達と考えられる人物をソトの領域として扱う。

上記の例1は、母が入院中の6歳の息子に対して、彼の行動を褒めながら頭を撫でたり、抱き締めたりしている。例2は、兄がいじめられている弟を救い出して、励まそうと頭を撫でる場面である。このような類の例は、予想とは異なり、日本語版に頻繁に見られ、日本人は家族や親友のようないわゆるウチ関係にいる人同士でさえも身体接触をあまりしない傾向があるという川名（2008）の研究結果に反する結果となった。『グッド・ドクター』は、小児外科を中心に物語が展開していくため、その分保護者と子供とのシーンが頻繁に登場することも理由の一つであろう。日本では成長するにつれて、内面の気持ちを表す方法としての身体接触行動は減っていくという Barnlund (1973) が指摘したように、親が自分の子供に行う身体接触は時代と文化を超えても変化しない普遍的なものの一つとして表れるものである。分析資料の背景が病院の病室コミュニケーションチャンネルではなかったならば、異なる結果が導けたのであろう。

一方、ヨソ関係に見られた身体接触行動は、韓日共にごくまれでありながら、次のような緊迫した「お願い」の場合に限定されて見られた。該当する韓国語版と日本語版の例を下に示す。

<例3> 韓国語版1話

怪我した子供の母 (30代) → パク・シオン (男, 20代) : ヨソ関係

박시온: 빨리 병원으로 옮겨 주십시오.

다친 아이의 어머니: {시온의 팔을 붙잡고 애원함} 선생님, 선생님도 같이 가 주세요.

박시온: 네? 전 갈 데가 있는데요.

다친 아이의 어머니: 제발요 선생님, 그래야 제가 안심이 될 것 같아요.

박시온: 급いで病院へお運びください。

怪我した子供の母: {シオンの腕を掴み、哀願する} 先生、先生も一緒に付き添ってください。

박시온: はい? 僕は用がありますが。

怪我した子供の母: どうかお願いします。先生、そうしてくださると私も安心です。

例3は、シオンが道端で事故に遭った初対面の男の子を治療し、救命する場面である。シオンの施術のおかげで命拾いした子供の母が救急車への同乗をシオンにお願いするシーンである。下記の例4は、例3の日本語版である。

<例4> 日本語版1話

怪我を負った子供の母 (30代) → 湊 (男, 20代) : ヨソ関係

救急隊員: 横を開けてください。

怪我を負った子供の母: {その場を離れようとする湊の腕を掴み} 先生、お願いします。

一緒に付き添っていただけませんか。

例3、例4いずれも、ヨソ関係に見られる身体接触は、相手との円満な人間関係を維持するための手段ではなく、緊迫した状況下において相手の気持ちや行動を止めたい場合に使われ、緊張感を最大化する役割を果たす。そのため、普段の生活におけるヨソ関係と身体接触を試みる場合は、両文化共にまれであろう。まれとは言え、例3と例4のようなヨソ関係であっても、これをきっかけとしてソト関係に進むこともあり得ることから、NVCがもつ肯定的なものとしての役割は果たしていると考えられる。

一方、韓国語版と日本語版に大きな比率を示すソト関係では、身体接触が円満な対人関係を調節する一つのストラテジーとして登場する。特に、韓国語版の場合はその傾向が強い。その一例を取り上げてみる。

<例5> 韓国語版9話

先輩医師(女、40代、医師)→キム・ドハン(男、30代、教授)：ソト関係

김도한: 미안해요. 선배. 저희 막내가 좀 철이 좀 없어서.

선배 의사: 아니 전혀. 난 되게 신기한데 어떻게 레지던트 1년차가 모든 변수를 다 꿰고 있지? 뭔가 좀 특별한 녀석이기는 하네.

김도한: 그렇게 이해해 주면 고맙고요.

선배 의사: {팔을 톡 치며} 잘 키워 봐. 잘하면 김두한 주니어 하나 나오겠다.

{김 교수의 팔을 경쾌하게 두 번 두두린 후 밖으로 나간다}

キム教授：すみません。先輩。うちの末子が空気を読めずに質問攻めにして。

先輩医師：いいのよ。不思議な人だったわ。レジデント1年目なのにすべての変数をすべて把握しているわ。何か特別なものを持ってる。

キム教授：そう理解していただけるなら幸いです。

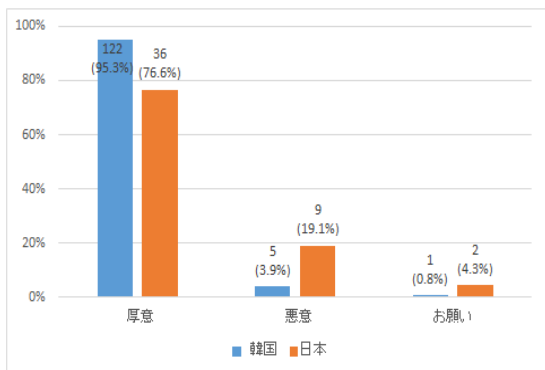
先輩医師：{軽く肩を叩いて} うまく育てたらあなたの後継者になるかも。

{先輩がキムの肩を2回爽快地に叩いてから、その場を離れる}

例5のキム教授は、自分の教え子の質問攻めにより、先輩医師に迷惑をかけたと思ひ謝罪する。これに対して先輩医師は、キム教授と当該の教え子の励みになる言葉をかけながら、2回に渡り、後輩に当たるキム教授の肩や腕を軽くタッチする行動を行う。以上のようなパターンがソト者同士に集中しているこの結果は、対人コミュニケーションにおける身体接触が、何らかの形で相手に親しみや愛情、配慮等、ポジティブなメッセージを与える可能性を示唆する。このような身体接触のポジティブな特徴は、ソト関係と会話を交わす場面で最も頻繁に見られ、その傾向は韓国語版においてより強く表れる。

5. 会話の内容に見る身体接触

3章の結果を鑑みて、身体接触がどのような類いの会話例で表れやすいのかについて分析を行った。その結果を図2に示す。



考察を行った結果、概ね「厚意」「悪意」「お願い」という3つのパターンによって表れることが分かった。特に、褒め、励まし、慰めのように相手に厚意を表す場面に伴われる傾向が強い。

図2 会話の内容による差異

次の例6がこのような類の例に該当する。

<例6> 韓国語版7話

病院院長 (男、60代、院長) → パク・シオン (男、20代、レジデント)

원장: 옷 갈아 입어라

박시온: 예? {깜짝 놀라며} 오오 옷은 왜 갈아입습니까?

원장: 일단 집에 가 있어. 연락을 할게.

박시온: {고개를 저으며} 아닙니다. 은옥이 봐야 합니다. 중환자실 가 봐야 합니다.

원장: 여기까지다. 시온아. 내일부터는 병원에 나오면 안 돼.

박시온: 정말 믿어주시는 분 한 분도 안 계십니다.

원장: {주원의 손을 따뜻하게 잡아준다}

院長: 着替えろ。

パク・シオン: はい? {びっくりしながら} なぜ着替えるんですか?

院長: 一応家で待機して。連絡する。

パク・シオン: {首を振りながら} いいえ。ウノクの様子を見なければ。集中治療室に行かなければ。

院長: もう終わりだ。シオン、明日から来なくていい。

パク・シオン: 誰も僕を信じないんですね。

院長: {不安がるジオンの手を無言で優しく握る}

例6のシオンは、病院を辞めなければならない羽目に陥る。それを院長がシオンに伝える場面である。濡れ衣を着せられたシオンは、誰も自分を信じてくれないことに落胆する。その気持ちを察するかのよう、院長は無言でシオンの手を優しく握る。このNVCは、シオンに対する理解を示す肯定的な行動である。

一方、厚意における身体接触の出現は、韓国語版のほうが日本語版よりやや高い比率を占めている。悪意におけるそれは日本語版のほうがやや高い。NVCはその言語表現のフィードバックの働きをするため、肯定的な場面においても否定的な例場面においても、伝えたいメッセージを和らげたり、強めたりすることができる。

次の例7は、悪意を強調する例である。

<例7> 日本語版3話

小児外科医の先輩医師1 (男、20代) →新堂湊 (男、20代、レジデント)

先輩医師1: 資料持ってきました。

先輩医師2: お疲れ。あ、ダメだ。もう動けねー。

先輩医師1: 高山先生がいなくてこんなに忙しいとはなあ。

先輩医師1: 誰かさんのせいで朝から何も食ってねーよ。おい、何食ってるんだよ。

新堂湊: おにぎりです。

先輩医師1: そんなことは分かっているんだよ。

{指3本で湊の頭をつついて押す} 一昨日からのこの忙しさ全部お前のせいだよ。

医師2: 相手にするだけ無駄ですよ。それよりこんな時に患者が急変したらどうするんですかね。

まず、例7のストーリーの前後を説明する。高山医師は、湊のせいで懲戒委員会にかけられ停職を余儀なくされる。そのため、他の医師らは激務に苦しむ。湊に怒りを感じた先輩医師1は、その怒りを湊にぶつけるが、そのとき使ったのが、自分の指3本で湊の頭を押す行動だった。このような例は主に例7や次の例8のように目上の男性から目下の同性に行われていた。

<例8> 日本語版3話

間宮啓介課長 (男、50代、外科医兼小児外科課長) →新堂湊 (男、20代、レジデント)

間宮啓介課長: {湊の頭を叩きながら} これが全部あなたのせいだよ。

例8は、例7と同様の場面である。例8の間宮啓介課長においても、例7の医師のように港の頭を叩く行為をし、湊への不満を最大化している。これらの例から身体接触行動を探る際には、上下関係のカテゴリーを取り上げて観察する必要があることを意味する。

6. 上下関係と身体接触との相関関係

基本的に身体接触は立場が上の者から下の者に向けて行われるか、対等な立場の間柄で行われるものであり、目下の者から目上の者に対して行われるものではないというリッチモンド・マクロスキー（2003）の主張のように、韓日ともに同じ傾向がうかがえた。次の図3は、上下関係の観点から身体接触の表れ方を分析したものである。

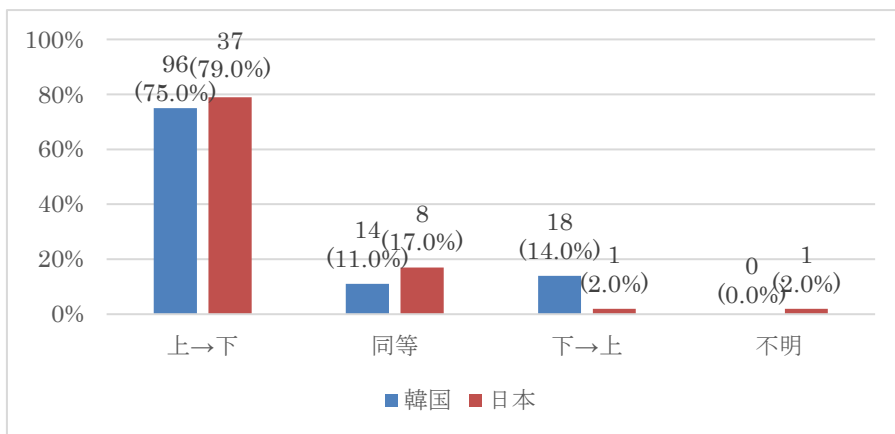


図3 上下関係による差異

図3の結果から、対面コミュニケーションにおける身体接触行動は、韓日の間で共通点と相違点がそれぞれ存在していることが分かる。

図3が示す結果をまとめてみると、次のようになる。

- (1) 身体接触は、両言語共に目上から目下に対して主に行われる。
- (2) 同等の関係においてもほぼ同じ比率を示している。これは、医療現場を背景としているため、友人関係場面があまり見られなかったことと関係していると考えられる。
- (3) 両言語における「下→上」の使用差は、他のカテゴリーよりやや顕著である。韓国語版においては128例のうち18例(14%)が見られたが、日本語版においては47例のうち1例(2%)に止まっている。

まず、上記の(1)に注目し、韓国語版の例を取り上げる。例9と例10は、患者の男の子を医者らが励ます場面である。ドラマ上では、例9と例10のストーリーが続いているが、途中で登場人物が変わるためにそれぞれを分けておいた。

〈例 9〉 韓国語版 19 話

チャ・ユンソ (女, 30 代, 医師) →ジュニョン (男, 小学生, 患者)

차윤서: {손을 잡아주며} 저기 준영아, 수술은 잘 됐어. 근데 선생님이 얘기 안 한 게 있네.

준영: 뭔데요?

차윤서: {머리를 만지며} 우리 준영이 앞으로는 야구 선수하기 힘들 것 같애. 심하게 움직이면 안 되거든.

준영: 알고 있었어요.

차윤서: 어떻게?

チャ・ユンソ: {手を握りながら}ジュニョン, 手術は成功したわ. あなたに話していないことがある.

ジュニョン: 何ですか?

チャ・ユンソ: {頭を撫でてあげながら} 野球選手になるのは難しいかもしれない. 激しい運動はできないの.

ジュニョン: 知ってます.

チャ・ユンソ: どうして?

〈例 10〉 韓国語版 19 話

キム・ドハン (男, 30 代, 医者) →ジュニョン (男, 小学生, 患者)

父 (男, 40 代, 病院の役員) →ジュニョン (同上)

김도한: {손을 잡아준다} 준영아, 네 꿈을 이루지 못해 슬프다는 거 선생님도 잘 알아. 그런데 꿈이 좋은 게 뭔지 알아? 또 다른 꿈을 꿀 수 있다는 거. (중략)

준영: 그래서 다른 꿈을 꾸기로 했어요. 저 공부 열심히 해서 야구 기자가 될 거예요. 미안해. 아빠. 내가 아는 거 아빠가 알면 걱정할까 봐 얘기 안 했어.

아버지: 괜찮아. {손을 잡아 준다}

차윤서: 우리 준영이 너무 멋있다. {머리와 얼굴을 쓰다듬는다}

キム・ドハン: {手を握り} 夢をかなえられないのはつらいよな. だけど夢というのは変えてもいいんだ. 寝てる时候に見る夢のように別の夢も見られる. 夢は塗り替えられていく. (中略)

ジュニョン: それで新しい夢を見つけたんです. これからはしっかり勉強してプロ野球の記者になりたいです. ごめんね. パパ. 僕が野球できないって知ったら心配すると思って言えなかった.

ジュニョンの父: いいんだ. {手を握る}

チャ・ユンソ: ジュニョン, かつこいいわ. {頭と頬を撫でる}

例 9 と例 10 を見ると、担当医が患者に対して手術後に励みの言葉をかけている。セリフと同時に子供の手を優しく握ったり、顔を撫でたりする。これらの

NVCをみると目上がまずイニシアチブを取ってスキンシップを行うことが特徴である。これにより、上下関係の中にも親しみや信頼を表現しうるのである。上の立場の人が気を回して下の人にスキンシップを取ってこそ、たとえ絶対的に敬語を使わなくてはいけない相手でも親しさが確認されるのである（任榮哲・井出，2004）。上記の例からも分かるように、適切な身体接触行動は、緊張感が漂う場の雰囲気や和らげることができる。

例9や例10の場面が日本語版にも登場する。韓国語版と同様に、例11の湊は手術前の伊代を安心させるために、彼女の手を取り、励ましている。

<例11> 日本語版10話

新堂湊（男、レジデント、20代）→森下伊代（女、患者、中学生）

新堂湊：「伊代の手を取り」私達があなたを助けます。大丈夫です。

両作品ともに、上の立場（年齢）の人から下へと身体接触を試みる場合が多いなか、韓国語版では、下の立場（年齢）から上へと行われる身体接触行動も少なからず見られる。次の例12は、6歳程度の子供がシオンに行く身体接触の一例である。

<例12> 韓国語版1話

電車の中、初対面の二人、子供（男、6歳）→パク・シオン（男、20代）

박시온: {KTX 안에서 엄마와 아이가 삶은 계란을 까먹는 것을 부러운 듯이 바라본다}

어린이: {말없이 시온에게 다가와 시온의 어깨를 툭툭 치며 계란을 건넨다}

박·시온: {KTXの中で母と子供がゆで卵を剥いて食べる様子を羨ましそうに見ている}

子供: {無言でシオンに近づいては、彼の肩を軽く叩き、ゆで卵を手渡す}

例12では、二人の間で言葉が交わされることはなかった。すべてNVCにより表現されている。子供はシオンにゆで卵を渡すために近寄ってくるが、声をかけるのではなく、静かにシオンの肩を叩き、自分のほうに注意を払わせていた。のち、KTXに降りてからこの子供が道端で事故に遭い、シオンが彼を助けることになる有名なシーンに繋がる。ちなみに、日本語版においては、ゆで卵を渡すKTXのシーンは省略され、道端で偶然出会った子供の命を助ける場面に代替される。

これに加え、日本語版では削除された韓国語版の場面を紹介する。

<例13> 韓国語版8話

イネ（女、中学生、入院患者）→シオン（男、20代、レジデント）

인혜: 쌤, {시온을 발견하고는 달려가 안긴다} 다시 왔으면 먼저 왔다고 얘기를 해야죠.

시온: 목, 목, 여기 목 좀 놓고.

인혜 : 빨리 보고 싶었다, 반갑다 말해요.
 시온 : 보고 싶었어. 반가워.
 인혜 : 얼마나?
 시온 : 많이 많이 엄청 많이.
 인혜 : 그렇지. 우리 사이는 그 정도는 말해 줘야지.

イネ : 先生、{シオンを見つけては駆け付けて抱き着く} 戻ってきたら言ってよ。
 シオン : 首、首、首、離して。
 イネ : 早く会いたかったって言って。
 シオン : 会いたかった。会えて嬉しい。
 イネ : どれだけ?
 シオン : すごくたくさん。
 イネ : 私にはそれくらい言ってくれなきゃ。

上の例 13 でイネ (=森下伊代) は、主治医のシオンを久しぶりに見つけ、遠くから駆け付けてシオンに抱き着く。二人はとても仲良しで信頼する仲である。日本語版においても二人の関係は同じく設定されている。ただ、日本語版の伊代は、韓国語版のイネより大人しい性格の持ち主として登場する。当然例 12 のような NVC を行うことには無理があるキャラクターとして描かれる。

既存の先行研究からは言及されることが少なかった、下から上へと行われる身体接触行動場面 (例 12 と例 13) を取り上げることができたのは、ドラマという動画資料を用いたためであろう。かつて、批評家のベラ (1959) は、比較言語学が存在するように、映画を通して身振りや表情を研究しなければならないと主張した。該当例が日本語版に表れないことは、NVC の許容範囲が文化により異なることを示唆している。

7. 身体接触とジェンダー

韓国と日本は他文化言語圏に比べ共通点が多いとされる。とは言え、身体接触の側面からは異質なコミュニケーション環境が保たれている可能性についてしばしば指摘されてきた。身体接触の授受についてジェンダー別に分けて考えてみたところ、興味深い結果が得られた。

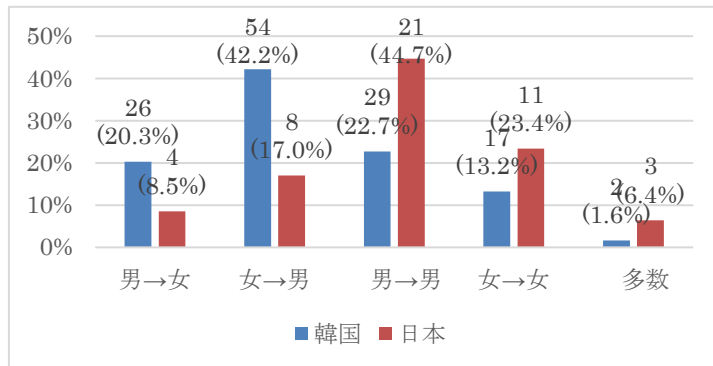


図 4 身体接触とジェンダーとの関係

韓国語版の場合は異性の間で、日本語版の場合は同性の間で、身体接触が頻繁に行われている傾向がうかがえた。特にシオンの仕事上の指導兼世話役をしているチャ・ユンソの接触行動が目立つ。例14がその一例である。

<例14> 韓国語版11話

チャ・ユンソ (女、30代、シオンの指導世話人) → バク・シオン (男、20代、レジデント)

차윤서: 박시온, {냄새를 맡고} 너 또 술 마셨어? {옆에 앉아서 위로} 너무 아파하지마. 원장 선생님께선 옳은 선택을 하신 거야.

박시온: {머리를 끄덕이며} 압니다. 어쩔 수 없이 그러셨다는 거 저도 잘 압니다. 그런데 형아가 더 불쌍해졌습니다. 나 때문에 갱도에 들어갔다가 나 때문에 호홉기도 못 달았습니다.

차윤서: {시온의 어깨에 손을 두르며} 그렇게 생각하지 말라니까. 있잖아. 세상엔 어쩔 수 없는 일들이 정말 많아. 우린 의사잖아. (중략)

박시온: {울면서} 그래도 우리 형아가 불쌍한 건 똑같습니다. (중략)

차윤서: {윤서가 시온의 눈물을 닦아준다} 도대체 누가 너가 어린 아이 같대. 네가 하는 자책 그거 아무도 할 수 없는 거야. (중략)

박시온: 제가 제일 나쁩니다.

차윤서: {시온의 머리를 자신의 어깨에 걸치게 하며} 아니야. 절대 아니야. 네가 얼마나 좋은 사람인데. 아냐.

チャ・ユンソ: また飲んだの? {隣に座り} そんなに落ち込まないで。院長は正しい選択をした。

バク・シオン: 分かります。仕方ないことだとよく分かっています。でも兄ちゃんが気の毒です。僕のために坑道に入ったのに助けてもらえなかった。

チャ・ユンソ: {シオンの肩に自分の手を置き} そんなふうに考えないで。世の中には力が及ばないことも多い。私たちは医師よ。 (中略)

バク・シオン: {泣きながら} それでも兄ちゃんが気の毒です。 (中略)

チャ・ユンソ：{シオンの涙を拭いてあげながら} あなたは大人よ。子供なら自分を責めない。愛する人のために自分を責めることは大人にも難しい。(中略)

パク・シオン：僕が一番悪いんです。

チャ・ユンソ：{シオンの頭を自分の肩に寄せる} 絶対に違うわ。悪くない。

例 14 のパク・シオンは、自分のせいで兄が死んだと思い込み、自責の念に苛まれている。それを彼の指導医かつ世話役をするユンソが理解を示しながら慰める。約 4 分に渡る長いシーンであるが、ユンソはシオンに身体接触を行ったままである。まずシオンの肩に自分の手を置き、次に涙を拭いてあげ、最後にシオンの頭を自分の肩に寄せるのである。

一方、日本語版の場合は、瀬戸夏美(=チャ・ユンソ)による新堂湊(=パク・シオン)への接触行動は次の 1 例のみが見られただけである。

<例 15> 日本語版 5 話

瀬戸夏美(女、30代、湊の指導世話人) → 新堂湊(男、20代、レジデント)

瀬戸夏美：{研修医として認めてもらった湊の口の中にポテトを 1 本入れてあげた後、腕を軽く叩いて去っていく}

新堂湊：{嬉しそうに微笑む}

例 15 の前には、湊に厳しい姿勢を取っていた教授兼医者である高山誠司(=キム・ドハン)から研修医として認められ喜ぶシーンが展開されている。それを誰より喜んでくれたのが、湊の直接的な指導医である瀬戸夏美であった。その喜びと祝いの気持ちを瀬戸は NVC のみで表現しているが、その意図は十分に伝わってくる。

ドラマにおけるチャ・ユンソと瀬戸夏美のキャラクターについて、両作品が目指すものは同じである。それは、正義感が強く勝ち気で明るい性格であり、レジデントとして入ってきたシオン(=湊)のことを、時に子供を見守る親のような時には弟を叱る姉のような立場で面倒を見る存在である。設定は韓日版ともに酷似しているが、その出し方には大きな差がある。この理由は、韓国語版のチャ・ユンソの温かい情から生まれた世話を、そのまま日本語版に反映させるのは、日本の文化的な情緒に合わなかったためであろう。

また、日本語版に同性間の身体接触が多く見られた理由は、次のような観点からも考えられる。

すでに先行研究で述べた曹・釘原(2017)の調査から、父親・母親・同性親友から受けた身体接触度、部位別接触率(頭部、胴体等)は日本より韓国のほうが有意に高かった。反面、異性親友からの身体接触については、女子の場合、性的部位を中心に日本の接触率が有意に高いなど、他の対象者からの身体接触

とは異なる様相を呈している。以上の結果は、日本における身体接触の意味合いが韓国とやや異なるということを示唆する。このような理由により、〈例14〉のようなパターンは、韓国語版に集中していると考えられる。ちなみに、女性から男性に行われた身体接触率の半数をチャ・ユンソが占めている。

8. おわりに

本稿では、テレビドラマを取り上げ、韓日の対人コミュニケーションにおける身体接触の比較分析を試みた。身体接触の度合いやそれらが行われる条件において、韓日の間には類似点及び相違点が存在する。類似点を整理すると次のとおりである。

「身体接触は、立場が上の者から下の者に向けて、ソト関係の対象に主に厚意を伝えるために行われる。」

一方、両言語文化の間には次のような隔たりが存在していることが分かった。

- (1) 身体接触の頻度は、日本語版より韓国語版のほうが多い。特に、韓国語版におけるソトに対する身体接触の頻度が高い。
- (2) 身体接触出現の会話内容に関しては、日本語版より韓国語版において、相手を思いやる内容と共に表れる傾向が強い。日本語版は、ネガティブな表現とともに表れる頻度が韓国語版よりやや高い。
- (3) 目下の者から目上の者に対する身体接触場面が韓国語版にはしばしば見られる。一方、日本語版にはほとんど見られない。
- (4) 身体接触の使用に関しては、ジェンダーの差が顕著である。日本語版の場合は同性に対して、韓国語版の場合は異性に対して積極的に用いる傾向がある。

一般的にマクロな視点から、日本は典型的な非接触文化であり、韓国は相対的に高接触文化であると結論づけられているが、ミクロな視点から考えると必ずしもそうではないことが分かる。更なる異文化理解の促進とそのための異文化コミュニケーション教育には、文化によるNVCの相違についてミクロな視点を取り入れる必要がある。

以上の結果は、テレビドラマによる資料を基に分析して得られたものであり、実際に行われている NVC を分析したものではない。この結果を韓日の身体接触行動の全体的な傾向として捉えるには本研究はまだ十分なものとは言えない。しかし、動画像の資料をもとにした調査として、両言語文化における NVC の異同について一定の事実を掘り起こすことができたと考えている。

NVCを成立させる要因はウチ・ソト・ヨソという軸や上下関係、ジェンダーだけではなく、相手との親疎関係、相手への好感度などにも影響されると考えら

れる。上下関係についても年齢や力関係によって NVC の使い方は異なる可能性がある。今後、今回の調査結果を、異なる条件で行われた調査結果と比較してみることも必要であろう。

〈参考文献〉

- 生越まり子 (1995) 「しぐさの日朝対照研究 —お辞儀について—」『日本語学』14 (9), 明示書院, pp. 59-69.
- 任炫樹 (2005) 「断り表現と表情の関係—日韓対照の観点から」『日本学報』64, 韓国日本学会, pp. 161-178.
- (2017) 「非言語コミュニケーションはどのように示されるか—意見不一致場面を中心に—」『帝塚山学院大学研究論集』52, 帝塚山学院大学, pp. 1-14.
- 任栄哲・井出里咲子 (2004) 『箸とチョッカラーことばと文化の日韓比較—』大修館書店
- 川名好裕 (2008) 「対人関係における身体接触の位置づけ」『明治大学心理社会学研究』3, 明治大学文学部心理社会学科, pp. 59-66.
- 久保田 真弓 (2009) 「会話における非言語コミュニケーションの役割」の教育：掲示板を利用したテレビドラマの分析をとおして」『スピーチ・コミュニケーション教育』22, 日本コミュニケーション学会, pp. 141-161.
- 末田清子・福田造子 (2011) 『コミュニケーション学：その展望と視点』増補版 松柏社
- 曹美庚・釘原直樹 (2015) 「身体接触行動の異文化比較—日米韓の大学生の比較—」日本心理学会第79回大会
- (2017) 「親しい相手との身体接触に関する日韓比較研究」『Japanese Journal of Applied Psychology』43, N01, pp. 45-53.
- 滝浦真人・大橋理枝 (2015) 『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興会
- 中山治 (1988) 『「ぼかし」の心理—人見知り親和型文化と日本人—』創元社
- 三宅和子 (1994) 「日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9, 筑波大学留学生センター, pp. 29-39.
- ブァーガス, マジョリー. F. (石丸正訳) (1987) 『非言語コミュニケーション』新湖選書
- ブロズナハン, リージャー (岡田妙・斎藤紀代子訳) (1988) 『しぐさの比較文化ジェスチャーの日英比較』大修館書店
- ベラ, バラージ (佐々木基一訳) (1959) 『映画の理論』講談社
- リッチモンド, V. P. ・マクロスキー, J・C<善本淳訳> (2003) 「ジェスチャー

と動作」『非言語行動の心理学』北大路書房

홍민표 (Hong, M. P.) (1998) 「한국인과 일본인의 비언어행동의 대조 연구

(韓国人と日本人における非言語行動の対照研究)—動作・接触・空間学を中心—to—」『日本学報』41 (11), 韓国日本学会, pp. 263-278.

Barnlund, D. C. (1973). *Public and Private Self in Japan and United States*, Simul Press, (西山千 (訳) (1973) . 『日本人の表現構造』サイマル出版会)

Birdwhistell, R. L. (1970). *Kinesics and context*. Phila:University of Pennsylvania Press.

Hall, J. A., & Friedman, G. B. (1999). Status, gender and nonverbal behavior: A study of structured interactions between employees of a company. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 1082-1091.

Knapp, M. L. (1978). *Nonverbal Communication in Human Interaction*(2ed.). New York: Holt, Rinehart and Winston.

・受付：2021年7月30日

・修正：2021年9月26日

・掲載：2021年9月30日

攻撃的発話に対する反応

—高校生調査を中心に—

河 正一（大阪府立大学）
金 美順（関西大学大学院博士後期課程）
大上 博右（兵庫県立鳴尾高等学校）

<要旨>

本稿は、高校生を対象に攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度と反応を調査し分析した。

分析結果、攻撃的発話に対する不愉快度と反応には、社会的力関係より聴者の責任の有無という要因が大きく作用され、聴者の責任のない場合がより不愉快度が高い傾向が見られた。対象別による不愉快度は、「所属」>「外見」>「能力」>「性格」であり、すべての項目において女性の不愉快度が高く現れた。不愉快度が高くなるにつれ、A（沈黙）の反応が一定の割合で現れる共に、その反応が多様化された。また、「性格」「能力」「所属」の場合は、聴者の責任の有無によって、一定の反応のパターンが見られた。しかし、「外見」では、聴者の責任の有無に関わらず、多様な反応が見られ、とりわけ、女性のほうで重い反応（C 説明・言い訳、D 反駁）が示された。また、「所属」では、聴者の責任のある場合は、社会的力関係によって、先輩「B（謝罪）」→友達「D（反駁）」→後輩「E（批判）」という段階的な反応が示され、不愉快度と反応において一定の相関関係が見られた。

キーワード インポライトネス、社会的価値、攻撃的発話、不愉快度、反応

1. はじめに

対人関係におけるポライトな言語行動に比べ、インポライトネスはポライトネスの周辺的な言語行動として、ポライトな言語行動に反する望ましくない、避けなければならない否定的な対象という認識が強かったと言えよう。しかし、インポライトネスは、お互いの社会的価値を脅かす言語行動として、社会的秩

序や価値体系を明確に示すことにつながり、円滑なコミュニケーションの手助けとなる。

本稿では、高校生を対象に攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度と、それに対する反応を調査し分析することを目的とする。

2. 先行研究

インポライトネスに関する研究は¹、Brown & Levinson (1987) のフェイス概念²から、ポライトネスに反する周辺の言語行動として、インポライトネスの捉え方や話者の言語ストラテジーなどに焦点が置かれた研究が大半であった (Culpeper 1996, Culpeper 2008 など)。

一方、話者の言語ストラテジーではなく、聴者の反応に焦点を当てた Culpeper., Bousfield and Wichmann (2003) は、話者のインポライトネスに対する聴者の反応のストラテジーを「攻撃 - 防御」と「攻撃 - 攻撃」に分類し、「攻撃 - 攻撃」のパターンとして段階的拡大 (escalation) を、「攻撃 - 防御」のパターンとして直接反駁 (contradiction)、否認 (abrogation)、未参加 (opt out)、見せかけの同意 (insincere agreement) などを提示している。

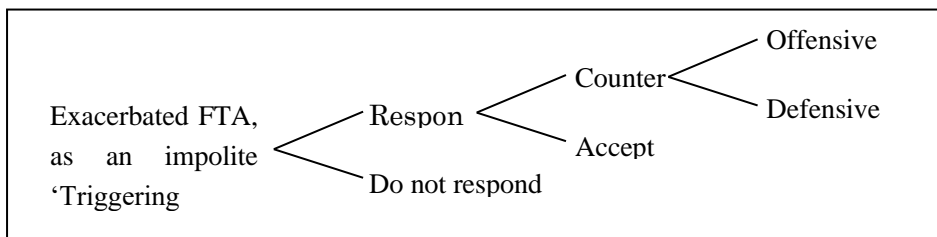


図1 フェイス侵害行為に対する聴者の反応 (Bousfield 2008 : 203)

談話レベルがもたらすインポライトネスの重要性を唱える Bousfield (2008 :

¹ インポライトネス研究の動向や問題点については、紙幅上、割愛する。詳細は、河 (2014, 2017) または藪内 (2015) を参照されたい。

² Brown & Levinson (1987) は、社会の成員は皆ある種の基本的な欲求、すなわちネガティブ・フェイス (negative face) とポジティブ・フェイス (positive face) を持っているとする。ネガティブ・フェイスとは自分の行動が他人によって干渉されてほしくないという欲求であり、ポジティブ・フェイスとは自分が大切にしている物や価値や行動などを他人によって理解されたり高く評価されたいという欲求である。この二つのフェイスを脅かすような行動がフェイス侵害行為 (Face-threatening Acts) である。

第 6 章) は、発話の初期段階 (utterance ‘beginnings’)、中間段階 (utterance ‘middles’)、終結段階 (utterance ‘ends’) に分け³、中間段階におけるインポライトネスの反応のストラテジーを提示している。Bousfield は、フェイス侵害行為を受けた聴者の反応のストラテジーを「反応すること (to respond)」と「反応しないこと (not to respond)」に分け、これらのストラテジーは「防御 (defensive)」あるいは「攻撃 (offensive)」の二つの性質を併せ持つとする。例えば、「反応しないこと」というストラテジーとしての沈黙は、時には自分のフェイスの防御として現れるものの、時には無視するという相手のフェイスを攻撃するストラテジーとしても現れる。また、「反応すること」というストラテジーは、相手のフェイス侵害行為を受け入れるか、または対応するかの選択が残されるが、受け入れることは謝罪や同意などでさらに受け入れ側のフェイスの侵害が拡大する。一方、「反応すること」はフェイス侵害行為に対する攻撃的または防御的ストラテジーが考えられるが、二つの選択は相反するのではない。すなわち、相手のフェイス侵害行為に対する防御的ストラテジーは、防御していく過程の中で意図的または付随的または防御的に相手のフェイスを脅かし得るためである。したがって、Bousfield は反応のストラテジーを攻撃的ストラテジーか防御的ストラテジーかに分類せず、図 1 のように「反応すること」と「反応しないこと」に分け、「反応すること」のストラテジーは、攻撃的・防御的・受容的ストラテジーとして現れるとする。

이성범 (2015) は、社会的力関係 (話者 > 聴者、話者 = 聴者、話者 < 聴者) における話者の攻撃的発話が明示的か非明示的かや聴者の責任の有無によって、聴者の印象と反応を調査している。調査結果、話者の攻撃的発話に対する聴者の印象と反応に聴者の責任の有無が最も重要な要因として働く。その上、明示的か非明示的かに関わらず、女性の方が男性より攻撃の認知度が高く現れる。つまり、女性は男性より相手の攻撃的発話に敏感に反応する。なお、聴者の責任の有無によって、責任のない場合に比べ、あるほうが攻撃の度合いを低く認識するという。いわゆる、聴者の責任が一種のフィルターとなり、話者の攻撃的発話をろ過するマスク効果 (mask effect) をもたらす。さらに、男女を問わず、聴者の責任のない話者の明示的な攻撃的発話に最も攻撃の度合いを感じる。一方、聴者の責任のある話者の攻撃的発話では、女性は「非明示的 (Indirect Utterance) > ヘッジ (Hedged Utterance) > 明示的 (Direct Utterance)」の順で、男性は「非明示的 (Indirect Utterance) > 明示的 (Direct Utterance) > ヘッジ (Hedged Utterance)」で攻撃の度合いを感じるという。

³ 発話の初期段階では、談話参加者間の対人関係の認識、背景知識などが重要な役割を果たす。中間段階は、話者のフェイス侵害行為に対して聴者はどのような反応を示すか、そして、終結段階では、相手との妥協、降伏、補償の提案などが展開される。

上記の이성범 (2015) では、攻撃的発話の明示性の有無、対人関係における社会的要因、聴者の責任の有無を考慮した点が非常に優れている。しかし、攻撃的発話の場面の分類基準が明確ではないという点と聴者の反応がポライトネス観点に偏っているという点が不十分であろう。

3. アンケートの概要

言語行動の評価は、談話参加者における社会的価値とは何かと共に、社会的力関係における利益の衝突がいかんにか反映されて言語行動として現れるか、これら要因を考慮しなければならない。そこで、社会的価値として、攻撃的発話の対象を「性格」「能力」「外見」「所属」に分類し、社会的力関係（「話者>聴者」「話者=聴者」「話者<聴者」）と利益の衝突（責任の有無）を考慮したアンケートを作成した（図2）。

場面：一週間頑張って作成した文化祭の企画書を先輩に見せたら、先輩に「これ、それぞれの行事の時間が全然考慮されていないじゃん。まったく、使えないな」と言われた。

1. 発話を聞いてどの程度、不愉快に感じますか？

← 感じない | | | | 感じる | | | | とても感じる →

2. 発話を聞いてどのような反応を示しますか？

- ① 何も言わず、沈黙する。
- ② ごめんなさい。すぐやり直します。
- ③ まだ経験不足で、時間を考慮していませんでした。
- ④ 行事の時間が考慮されていない点がありますが、自分なりには結構できたと思います。
- ⑤ 行事の時間が考慮されていないとはいえ、使えないというのは失礼じゃありませんか。

図2 調査内容

調査は、図2のように攻撃的発話に対する不愉快度と、それに対する反応、これら2点を尋ねる。社会的力関係における利益の衝突は⁴、談話参加者間の利

⁴ ここで注意しなければならないのは、行為者の社会的価値の衝突が必ずしもわれわれを否定的な方向のみに働きかけられることはないということである。例えば、学校のクラスにし

益または不利益として現れ、言語行動の選択に根本的な影響を与える。そこで、利益の衝突として現れる攻撃的発話を相手の責任の有無に置き換え、聴者の責任による攻撃的発話と聴者の責任ではない攻撃的発話に分ける。その上、攻撃的発話の対象として、「性格」「能力」「外見」「所属」に分ける。つまり、社会的力関係や利益の衝突（責任の有無）、攻撃の対象を総合的に考慮し（社会的力関係 3×責任の有無 2×攻撃の対象 4、計 24 場面）、攻撃的発話に対する印象と反応を調査する。

従来多くの調査方法では、特定の場面に対する言語ストラテジーを直接、記入する談話完成タスク(Discourse completion task: DCT)が多かった。しかし、この方法は、意識的であれ、無意識的であれ、円滑な言語コミュニケーションとしてのポライトな言語ストラテジーへの偏りが生じやすいため、インポライトネスの要素が表れにくい。このことは、断り・不満表明の先行研究においてインポライトネスに関わる言語行動がほとんど現れなかったことから示唆される⁵。

そこで、調査では、攻撃的発話に対する反応として、それぞれの場面において A~E というストラテジーを提示し選択する方法を採用した。

- ・ A 沈黙（何も言わず、沈黙する）
何も言わず、沈黙する。
- ・ B 謝罪（謝罪する）
ごめんなさい。すぐやり直します。
- ・ C 解明・言い訳（解明または言い訳をする）
まだ経験不足で、時間を考慮していませんでした。
- ・ D 反駁（自分の考え方を明確に示す）
行事の時間が考慮されていない点がありますが、自分なりには結構できたと思います。
- ・ E 批判（相手の失礼さを指摘・批判する）
行事の時間が考慮されていないとはいえ、使えないというのは失礼じゃありませんか。

以上、上記の社会的力関係（「話者>聴者」「話者=聴者」「話者<聴者」）

ろ、その後の社会活動のクラスにしろ、互いの社会的価値の衝突として現れる競争がなければ、そのクラス及び社会活動というものは非常に低い水準の効率性を示すに違いない。つまり、人間の行動における攻撃性が必ず否定的な方向のみにわれわれを導き出すということはない。

⁵ 日本と韓国における断り表現や不満表明などといった社会言語学的調査の動向については、河（2019）を参照されたい。

や責任の有無、攻撃の対象（「性格」「能力」「外見」「所属」）を取り入れ24の質問項目が、表1である。

表1 質問項目

1. 今日は、来週の文化祭のための打ち合わせがあった。しかし、電車で居眠りをして、乗り過ぎてしまって、40分ぐらい遅れて到着した。その際、先輩に「**大事な打ち合わせに遅刻するなんてあり得ない。まったくだらしがないんだから。**」と言われた。
2. 一週間頑張って作成した文化祭の企画書を後輩に見せたら、後輩に「**これ、それぞれの行事の時間が全然考慮されていないので、使いものにならないんじゃないですか。**」と言われた。
3. 友達に昨日、好きな人に告白したが断られたという話をしたら、友達に「**もうちょっとおしゃれしてよ、顔があまりいけてないから**」と言われた。
4. 自分の出身中学校の野球部はそれほど強くないが、昨日の試合でも大きく負けてしまった。それを聞いた先輩に「**また負けたって。そんなに弱いなら、野球部をなくしたほうがいいんじゃない**」と言われた。
5. 学校で共同作業をしていたが、自分のミスでもないことで、友達に「**また間違ってる、もうちょっときちんとしてよ、まったく**」と言われた。
6. 朝から友だちと小高い丘をハイキングしていたが、1時間くらい、歩き回ったらもう歩けないくらい疲れてしまい、友達に帰ることを提案した。そしたら、友達に「**だめだよ、まだ1時間くらいしか経ってない。太りすぎ、ダイエットしてよ。**」と言われた。
7. 一週間頑張って作成した文化祭の企画書を先輩に見せたら、先輩に「**これ、それぞれの行事の時間が全然考慮されていないじゃん。まったく、使えないな**」と言われた。
8. グループ発表の結果、私のグループが最下位であった。それを聞いた別のグループの友達に「**最下位だって、レベル低い。**」と言われた。
9. 学校の部活で農業ボランティアに参加した。午前中に畑仕事をしたら、疲れてしまい、後輩に休憩することを提案した。その際、後輩に「**30分前も休みましたけど。先輩は太りすぎですよ。ダイエットしてください。**」と言われた。
10. 電車で居眠りをして乗り過ぎてしまい、友達との待ち合わせの場所に40分ぐらい遅れてしまった。待ち合わせの場所についていたら友達に「**待ち合わせの時間1時だったよね。なんで毎回、遅刻するのよ。本当にだらしがない。**」と言われた。
11. 今朝、部活の先輩に呼ばれて、「**最近1年生の遅刻が多いみたいけど、お前がしっかりしていないからじゃないか。もっときちんとしてよ。**」と言われた。
12. 部活の帰りに自分の第一印象について、後輩に聞いたら「**ぶっきらぼうで冷たい印象でした。先輩は強面なので、笑わないと人から怖がられると思います。**」と言われた。
13. 友達と一緒にそれぞれの出身校のマラソンを応援したが、残念ながら自分の出身校は予選落ちで終わってしまった。すると、友達に「**お前の学校、毎回参加する意味ある？**」と言われた。
14. 電車の人身事故のため、友達との待ち合わせの場所に40分ぐらい遅れてしまった。待ち合わせの場所についていたら友達に「**待ち合わせの時間1時だったよね。なんで毎回、遅刻するのよ。本当にだらしがない。**」と言われた。
15. 学校の部活で農業ボランティアに参加した。午前中に畑仕事をしたら、疲れてしまい、先輩に休憩することを提案した。その際、先輩に「**何言ってるんだ。30分前も休んだでしょう。太ってるからじゃん。ダイエットしろよ。**」と言われた。
16. 学校の部活同士のバスケット試合で、うちの部活は1回戦で負けてしまった。その時、後輩に「**めっちゃ弱いですね。多分、小学生にも勝てないかも。**」と言われた。
17. 今日は、電車の人身事故のせいで、来週の文化祭の打ち合わせに40分ぐらい遅れて到

- 着した。その際、先輩に「大事な打ち合わせに遅刻するなんてあり得ない。まったくだらしがないんだから。」と言われた。
18. 部活に参加してみたら、1年生の遅刻が目立っていた。その際、後輩に「最近、1年生の遅刻が多いです。3年生の先輩がみんなのお手本にならず、毎回遅刻するからじゃないですか。先輩らしくお手本を見せてください。」と言われた。
19. 自分の出身中学校の野球部はそれほど強くないが、昨日の試合でも大きく負けてしまった。それを聞いた後輩に「また負けたんですね。そんなに弱いなら、野球部をなくしたほうがいいんじゃないですか」と言われた。
20. 部活の新入部員歓迎会で、自己紹介をしたら、先輩に「もうちょっとハツラツで体格のいい後輩が欲しかったな。」と言われた。
21. 今日は、来週の文化祭のための打ち合わせがあった。しかし、電車の人身事故のため、40分ぐらい遅れて到着した。その際、後輩に「待ち合わせの時間1時でしたよね。大事な打ち合わせを遅刻するなんて、しっかりしてくださいよ。」と言われた。
22. 授業の共同発表のため、自分なりに色々調べた内容を友達に見せたら、友達に「内容があまり面白くないし、発表のテーマと趣旨がまったく合わない。」と言われた。
23. 学校の部活同士のバスケット試合で、うちの部活は1回戦で負けてしまった。その時、先輩に「めっちゃ弱いじゃん。多分、小学生にも勝てないかも。」と言われた。
24. 今日は、来週の文化祭のための打ち合わせがあった。しかし、電車で居眠りをして、乗り過ぎてしまって、40分ぐらい遅れて到着した。その際、後輩に「待ち合わせの時間1時でしたよね。大事な打ち合わせを遅刻するなんて、しっかりしてくださいよ。」と言われた。

24の質問項目を社会的力関係や責任の有無、攻撃の対象によって分類すると、表2となる。

表2 社会的力関係及び聴者の責任の有無（話者＝話、聴者＝聴）

性格	1	17	10	14	24	21
社会的力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
責任の有無	有	無	有	無	有	無
能力	7	11	22	5	2	18
社会的力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
責任の有無	有	無	有	無	有	無
外見	15	20	6	3	9	12
社会的力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
責任の有無	有	無	有	無	有	無
所属	23	4	8	13	16	19
社会的力関係	話>聴	話>聴	話=聴	話=聴	話<聴	話<聴
責任の有無	有	無	有	無	有	無

例えば、「性格」における質問1と17は、聴者の責任の有無、すなわち居眠りと人身事故の理由で遅刻した際に、先輩（話者）に言われる場面であり、10

と 14 では、友達に言われる場面で、24 と 21 は、後輩に言われる場面である。同様に聴者の責任の有無によって少し状況は違うものの、「能力」「外見」「所属」においても同様の組み合わせで作られた。

4. 分析結果と考察

調査は、2020 年 12 月から 2021 年 3 月にわたって、3 か所の高校（日本）で行われた。有効回答者の内訳は、表 3 の通りである。

表 3 回答者の内訳

		A 高校	B 高校	C 高校	合計
性別	男	22	34	21	77
	女	34	0	61	95
全体		56	34	82	172

質問項目 24 問の「不愉快」×「性別」の 2 要因分散分析を行った結果 (SPSS)、「不愉快」の主効果は $[F(23, 3910) = 40.74, p < .001]$ で有意であった。なお、「不愉快」と「性別」の交互作用が 0.1%水準で有意であり ($[F(23, 3910) = 3.68, p < .001]$)、性別の単純主効果は、0.1%水準で有意であった ($[F(1, 170) = 27.45, p < .001]$)。詳細分析は、「性格」「能力」「外見」「所属」の順に論じていく。

4.1 「性格」の結果

「性格」に対する攻撃的発話の不愉快度をまとめると、表 4 となる。

表 4 「性格」に対する不愉快度

		1 : 話>聴、有			10 : 話=聴、有			24 : 話<聴、有		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
平均	2.2	2.5	2.4	2.0	2.2	2.1	2.0	2.4	2.2	
		17 : 話>聴、無			14 : 話=聴、無			21 : 話<聴、無		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
平均	2.9	3.1	3.0	2.7	3.2	3.0	2.7	3.3	3.0	

すべての質問において聴者の責任のない場合が聴者の責任のある場合より不愉快度が有意に高く現れた。なおかつ、女性のほうが男性より攻撃的発話に対する不愉快度が高く、とりわけ 14、21、24 で、男女の有意差が見られた。つま

り、社会的力関係という要因より聴者の責任の有無がより不愉快度に大きく作用され、女性のほうが攻撃的発話に対する不愉快度が高い。

表 5 「性格」に対する反応

1	男	B(83.1) > A=C(6.5) > D(3.9) > E(0)	17	C(50.6) > B(19.5) > E(15.6) > D(7.8) > A(6.5)
	女	B(77.9) > C(21.1) > A(1.1) > D=E(0)		C(73.7) > B(17.9) > D(4.2) > E(3.2) > A(1.1)
	計	B(80.2) > C(14.5) > A(3.5) > D(1.7) > E(0)		C(63.4) > B(18.6) > E(8.7) > D(5.8) > A(3.5)
10	男	B(81.8) > C(9.1) > A(7.8) > D(1.3) > E(0)	14	C(58.4) > B(14.3) > E(13.0) > D(10.4) > A(3.9)
	女	B(82.1) > C(11.6) > A(4.2) > E(2.1) > D(0)		C(77.9) > B(12.6) > E(6.3) > D(3.2) > A(0)
	計	B(82.0) > C(10.5) > A(5.8) > E(1.2) > D(0.6)		C(69.2) > B(13.4) > E(9.3) > D(6.4) > A(1.7)
24	男	B(70.1) > C(11.7) > A(7.8) > D(6.5) > E(3.9)	21	C(53.2) > B(22.1) > E(10.4) > D(7.8) > A(6.5)
	女	B(75.8) > C(17.9) > A=D(3.2) > E(0)		C(66.3) > B(17.9) > E(9.5) > D(4.2) > A(2.1)
	計	B(73.3) > C(15.1) > A(5.2) > D(4.7) > E(1.7)		C(60.5) > B(19.8) > E(9.9) > D(5.8) > A(4.1)

聴者の責任の有無のペアである 1 と 17、10 と 14、24 と 21 において、明らかにその反応が異なっている。話者の攻撃的発話が聴者の責任による場合は、社会的力関係に問わず、B（謝罪）を選択するが、聴者の責任がない場合は、C（解明・言い訳）選択する解答が最も多かった。つまり、社会的力関係より聴者の責任の有無がその反応に大きな影響を及ぼす。

4.2 「能力」の結果

「能力」に対する不愉快度をまとめると、表 6 となる。

表 6 「能力」に対する不愉快度

	7 : 話 > 聴、有			22 : 話 = 聴、有			2 : 話 < 聴、有		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.1	3.4	3.3	2.7	3.3	3.0	3.1	3.5	3.3
	11 : 話 > 聴、無			5 : 話 = 聴、無			18 : 話 < 聴、無		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.0	3.2	3.1	3.3	4.0	3.7	2.9	3.3	3.2

全体の質問項目において聴者の責任の有無及び社会的力関係の要因による特徴は明白ではないが、聴者の責任の有無の対応である 22 と 5 では、有意差が見られた。また、すべての不愉快度において女性のほうが男性より高く現れ、そのうち、2 と 5、22 における男女の有意差が見られた。

表7 「能力」に対する反応

7	男	B(40.3)×C(22.1)×A(15.6)×D(14.3)×E(7.8)					11	B(45.5)×D(32.5)×C(11.7)×A(6.5)×E(3.9)				
	女	B(47.4)×C(32.6)×D(11.6)×A(5.3)×E(3.2)						B(56.8)×D(26.3)×C(10.5)×A(6.3)×E(0)				
	計	B(44.2)×C(27.9)×D(12.8)×A(9.9)×E(5.2)						B(51.7)×D(29.1)×C(11.0)×A(6.4)×E(1.7)				
22	男	B(35.1)×C(23.4)×D(20.8)×E(11.7)×A(9.1)					5	C(46.8)×B(20.8)×E(7.8)×A(3.9)				
	女	B(36.8)×C(29.5)×E(13.7)×D(12.6)×A(7.4)						C(42.1)×D(24.2)×B(16.8)×E(9.5)×A(7.4)				
	計	B(36.0)×C(26.7)×D(16.3)×E(12.8)×A(8.1)						C(44.2)×D(22.7)×B(18.6)×E(8.7)×A(5.8)				
2	男	B(44.2)×C(23.4)×D(14.3)×E(11.7)×A(6.5)					18	B(33.8)×D(28.6)×C(18.2)×A(13.0)×E(6.5)				
	女	B(33.7)×D(22.1)×C(18.9)×A(6.3)						B(45.3)×D(26.3)×C(14.7)×E(10.5)×A(3.2)				
	計	B(38.4)×C(20.9)×D(18.6)×E(15.7)×A(6.4)						B(40.1)×D(27.3)×C(16.3)×E(8.7)×A(7.6)				

聴者の責任のある場合は、社会的力関係における友達と後輩に対して、E（批判）の反応が増えるものの、一般的に「B（謝罪）>C（説明・言い訳）…」の傾向が見られた。一方、聴者の責任のない場合は、5の友達関係ではC（説明・言い訳）の反応が最も多く見られ、11の先輩と18の後輩関係では、B（謝罪）の反応が最も多かった。なお、聴者の責任のある場合に比べ、D（反駁）の反応が多かったのが特徴である（「B（謝罪）/C（説明・言い訳）>D（反駁）…」）。

4.3 「外見」の結果

「外見」に対する不愉快度をまとめると、表8となる。

表8 「外見」に対する不愉快度

	15：話>聴、有			6：話=聴、有			9：話<聴、有		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	2.7	3.7	3.3	2.6	3.9	3.3	2.9	3.9	3.5
	20：話>聴、無			3：話=聴、無			12：話<聴、無		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.5	3.7	3.6	3.2	4.2	3.8	2.2	2.8	2.5

15と20、6と3では、聴者の責任の有無によって、不愉快度が高くなったが、9と12では、むしろ下がった結果であった。9における「30分前も休みましたけど。先輩は太りすぎですよ。ダイエットしてください」は、相手への批判として、しかし、12における「ぶっきらぼうで冷たい印象でした。先輩は強面なので、笑わないと人から怖がられると思います」は、相手へのアドバイスとして受け止められたかもしれない。上記の「性格」「能力」と同様に「外見」の結果においても女性のほうの不愉快度が高く現れ、20以外では男女の有意差が

見られた。つまり、女性のほうが「外見」に対する攻撃的発言をより重く受け止める。

表 9 「外見」に対する反応

15	男	B(35.1) > C(32.5) > A(16.9) > D(9.1) > E(6.5)					20	A(27.3) > B(23.4) > E(20.8) > D(15.6) > C(13.0)				
	女	C(37.9) > D(18.9) > A(16.8) > E(14.7) > B(11.6)						A=C(26.3) > B(23.2) > D(13.7) > E(10.5)				
	計	C(35.5) > B(22.1) > A(16.9) > D(14.5) > E(11.0)						A(26.7) > B(23.3) > C(20.3) > E(15.1) > D(14.5)				
6	男	B(35.1) > C(26.0) > D(15.6) > A=E(11.7)					3	C(45.5) > A(23.4) > D=E(13.0) > B(5.2)				
	女	D(32.6) > C(23.2) > A(17.9) > B(14.7) > E(11.6)						C(33.7) > A(24.2) > E(22.1) > D(13.7) > B(6.3)				
	計	D(25.0) > C(24.4) > B(23.8) > A(15.1) > E(11.6)						C(39.0) > A(23.8) > E(18.0) > D(13.4) > B(5.8)				
9	男	C(45.5) > A(15.6) > B(14.3) > D(13.0) > E(11.7)					12	B(31.2) > C(28.6) > D(18.2) > A(16.9) > E(5.2)				
	女	D(31.6) > C(30.5) > E(20.0) > A(11.6) > B(6.3)						B(40.0) > C(29.5) > A(14.7) > E(8.4) > D(7.4)				
	計	C(37.2) > D(23.3) > E(16.3) > A(13.4) > B(9.9)						B(36.0) > C(29.1) > A(15.7) > D(12.2) > E(7.0)				

「外見」における反応は、A（沈黙）、B（謝罪）、C（説明・言い訳）、D（反駁）の多様な反応が見られた。聴者の責任のある場合では、男性はB（謝罪）かC（説明・言い訳）の反応が多かったが、女性は、C（説明・言い訳）かD（反駁）の反応が多く現れた。このことは、上記で述べたように、女性のほうが有意に不愉快度が高かったことが重い反応を導いたと考えられる。聴者の責任のない場合では、B（謝罪）かC（説明・言い訳）の反応以外にA（沈黙）の反応も多く見られた。

4.4 「所属」の結果

「所属」に対する不愉快度をまとめると、表 10 となる。

表 10 「所属」に対する不愉快度

	23 : 話 > 聴、有			8 : 話 = 聴、有			16 : 話 < 聴、有		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.2	3.8	3.5	3.0	3.9	3.5	3.5	4.2	3.9
	4 : 話 > 聴、無			13 : 話 = 聴、無			19 : 話 < 聴、無		
性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計
平均	3.6	4.4	4.1	3.3	4.1	3.7	3.2	4.1	3.7

聴者の責任のある場合は、先輩と友達の社会的力関係に比べ、後輩に言われる攻撃的発言の不愉快度が有意に高かった。聴者の責任のない場合では、社会的力関係の要因による特徴は見られなかった。ただし、聴者の責任の有無と関連して 23 と 4 では、有意差が見られた。なお、すべての質問において男女の有

意差が見られ、さらに女性の不愉快度が男性より有意に高く現れた。

表 11 「所属」に対する反応

23	男	B(32.5)>A(24.7)>D(16.9)>C(1.3)	4	D(33.8)>A(26.0)>B(19.5)>C(1.3)
	女	B(41.1)>D(21.1)>A(14.7)>C(2.1)		D(37.9)>B(24.2)>E(18.9)>A(17.9)>C(1.1)
	計	B(37.2)>E(22.7)>A(19.2)>C(1.7)		D(36.0)>B(22.1)>A(21.5)>E(19.2)>C(1.2)
8	男	D(40.3)>A(23.4)>E(22.1)>B(10.4)>C(3.9)	13	D(32.5)>E(22.1)>A(16.9)>C(11.7)
	女	D(45.3)>E(31.6)>A(20.0)>B(3.2)>C(0)		D(44.2)>E(17.9)>B(15.8)>C(11.6)>A(10.5)
	計	D(43.0)>E(27.3)>A(21.5)>B(6.4)>C(1.7)		D(39.0)>E(19.8)>B(16.3)>A(13.4)>C(11.6)
16	男	E(32.5)>A(24.7)>B(20.8)>C(1.3)	19	D(31.2)>B(23.4)>A(19.5)>C(6.5)
	女	E(56.8)>D(20.0)>A(13.7)>B(7.4)>C(2.1)		D(34.7)>B(23.2)>E(21.1)>A(17.9)>C(3.2)
	計	E(45.9)>D(20.3)>A(18.6)>B(13.4)>C(1.7)		D(33.1)>B(23.3)>E(20.3)>A(18.6)>C(4.7)

聴者の責任のある場合は、社会的力関係によってその反応が明らかに異なっている。先輩の攻撃的発話に対しては、B（謝罪）が多く、友達には、D（反駁）が、後輩にはE（批判）の反応が最も多く見られた。一方、聴者の責任のない場合では、社会的力関係に関わらず、D（反駁）の反応が多く現れた。

4.5 考察

攻撃の対象別による不愉快度をまとめると、表 12 となる。

表 12 攻撃の対象別の不愉快度

	性格		能力		外見		所属	
	有	無	有	無	有	無	有	無し
男	2.1	2.8	3.0	3.1	2.7	3.0	3.3	3.4
女	2.4	3.2	3.4	3.5	3.9	3.6	4.0	4.2
計	2.2	3.0	3.2	3.3	3.4	3.3	3.6	3.8

「外見」以外は、聴者の責任の有無によって、聴者の責任のない場合がより不愉快度が高く、なお、「性格」「能力」「外見」に比べ、「所属」に対する攻撃的発話に対する不愉快度が最も高く現れた（「所属」>「外見」>「能力」>「性格」）。友定ほか（2002：99）によれば、集団意識とは、個の自己意識を基盤とし、みんなと活動するために、集団における自己を自覚することであり、この集団は活動の進展と共に形成し、やがて個人を超えて全体としての一つの意識となった新たな集団となっていくという。相手の所属や集団を攻撃することは、その人のアイデンティティーを否定することにつながるため、不愉快度は高く現れると予想した。ところが、個より所属に対する不愉快度が高く

現れた今回の結果は、非常に興味深い。今後、大学生と中学生調査とも比較が必要であろう。

また、이성범 (2015 : 122) は、男性より女性のほうが攻撃的発話に対する認識が高いと報告しているが、今回の結果でも女性のほうの不愉快度が全ての項目において高く現れた。井出 (2006 : 172-173) によれば、一般に女性のほうが友人、近所の人、夫の上司などのような社交上の人間関係を重んじる付き合いが多いため、より丁寧なことばを使っている。さらに、頻繁に丁寧なことばを使っているために、女性はことばの丁寧度評価も低くするという。つまり、通常の丁寧なことば遣いからかけ離れた攻撃的発話であるがゆえに、丁寧度評価が下がり、その結果、不愉快度が高くなったと考えられる。

表 13 対象別の反応

1	B(80.2) > C(14.5) > A(3.5) > D(1.7) > E(0)	17	C(63.4) > B(18.6) > E(8.7) > D(5.8) > A(3.5)
10	B(82.0) > C(10.5) > A(5.8) > E(1.2) > D(0.6)	14	C(69.2) > B(13.4) > E(9.3) > D(6.4) > A(1.7)
24	B(73.3) > C(15.1) > A(5.2) > D(4.7) > E(1.7)	21	C(60.5) > B(19.8) > E(9.9) > D(5.8) > A(4.1)
7	B(44.2) > C(27.9) > D(12.8) > A(9.9) > E(5.2)	11	B(51.7) > D(29.1) > C(11.0) > A(6.4) > E(1.7)
22	B(36.0) > C(26.7) > D(16.3) > E(12.8) > A(8.1)	5	C(44.2) > D(22.7) > B(18.6) > E(8.7) > A(5.8)
2	B(38.4) > C(20.9) > D(18.6) > E(15.7) > A(6.4)	18	B(40.1) > D(27.3) > C(16.3) > E(8.7) > A(7.6)
15	C(35.5) > B(22.1) > A(16.9) > D(14.5) > E(11.0)	20	A(26.7) > B(23.3) > C(20.3) > E(15.1) > D(14.5)
6	D(25.0) > C(24.4) > B(23.8) > A(15.1) > E(11.6)	3	C(39.0) > A(23.8) > E(18.0) > D(13.4) > B(5.8)
9	C(37.2) > D(23.3) > E(16.3) > A(13.4) > B(9.9)	12	B(36.0) > C(29.1) > A(15.7) > D(12.2) > E(7.0)
23	B(37.2) > E(22.7) > A(19.2) > C(1.7)	4	D(36.0) > B(22.1) > A(21.5) > E(19.2) > C(1.2)
8	D(43.0) > E(27.3) > A(21.5) > B(6.4) > C(1.7)	13	D(39.0) > E(19.8) > B(16.3) > A(13.4) > C(11.6)
16	E(45.9) > D(20.3) > A(18.6) > B(13.4) > C(1.7)	19	D(33.1) > B(23.3) > E(20.3) > A(18.6) > C(4.7)

不愉快度が高くなるにつれ（「所属」 > 「外見」 > 「能力」 > 「性格」）、A（沈黙）の反応が一定の割合で現れている。Tannen (1985 : 98) は、異文化間コミュニケーションだけでなく、同文化内コミュニケーションにおいても沈黙の解釈に相違が生じるという。沈黙という行為は、相手の攻撃的発話に対する衝突を避けるための戦略としても、または相手の攻撃的発話に対する不満や無視するための戦略としても用いられる。ゆえに、性格に対する聴者の責任のない場合の攻撃的発話の反応として、沈黙が多用された結果や不愉快度が高くなるにつれて沈黙という戦略が多用される関連性を踏まえ、今後、不愉快度と沈黙との相関関係、すなわちフェイスの防御としての沈黙か、フェイスの攻撃としての沈黙かについて、調査・分析が必要であろう。

また、不愉快度が高くなるにつれて、その反応の多様化が見られる。「性格」

と「能力」の場合は、聴者の責任の有無によって、一定した「B（謝罪）>C（解明・言い訳）>…」もしくは「C>B>…」のパターンが見られた。しかし、「外見」に対する聴者の責任のある場合の攻撃的発話に対する反応では、男女の反応の違いが明らかであり（表9）、女性のほうがより不愉快度が高かったことが重い反応（C 解明・言い訳、D 反駁）を導いたと考えられる。そして、「所属」では、聴者の責任のある場合は、社会的力関係によって、先輩「B（謝罪）」→友達「D（反駁）」→後輩「E（批判）」という段階的な反応が示され、不愉快度と反応において一定の相関関係が見られた。なお、聴者の責任のない場合では、D（反駁）の反応を示す傾向が見られた。

5. 終わりに

本稿は、高校生を対象に攻撃的発話がどの程度、相手の社会的価値を脅かすか、すなわち攻撃的発話に対する不愉快度と反応を調査し分析した。

分析結果、攻撃的発話に対する不愉快度と反応には、社会的力関係より聴者の責任の有無という要因が大きく作用され、聴者の責任のない場合がより不愉快度が高い傾向が見られた。対象別による不愉快度は、「所属」>「外見」>「能力」>「性格」であり、すべての項目において女性の不愉快度が高く現れた。不愉快度が高くなるにつれ、A（沈黙）の反応が一定の割合で現れると共に、その反応が多様化された。また、「性格」「能力」「所属」の場合は、聴者の責任の有無によって、一定の反応のパターンが見られた。しかし、「外見」では、聴者の責任の有無に関わらず、多様な反応が見られ、とりわけ、男性より女性のほうで重い反応（C 解明・言い訳、D 反駁）が示された。また、「所属」では、聴者の責任のある場合は、社会的力関係によって、先輩「B（謝罪）」→友達「D（反駁）」→後輩「E（批判）」という段階的な反応が示され、不愉快度と反応において一定の相関関係が見られた。

以上、攻撃的発話に対する不愉快度とその反応を分析したが、調査結果では、攻撃的発話に対する不愉快度が高くなるにつれて沈黙というストラテジーが多用された。今後、不愉快度と沈黙との相関関係、すなわちフェイスの防御としての沈黙か、フェイスの攻撃としての沈黙かについて、さらに調査・分析が必要であろう。また、調査対象を日本の中学・大学に広げ、さらに韓国の中学・高校・大学を調査し、日本と韓国を比較したい。異文化理解では、言語や文化の多様性と相対性を認識し、多元的かつ相対的な物の見方が求められる。多角的視点から日韓における言語文化の類似点や相違点を明らかにするだけでなく、研究成果を授業へ反映していきたい。

〈参考文献〉

- 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店
- 友定啓子・丸田愛子・高木勲・武宮道子 (2002) 「幼児期における集団活動の成立—
 一個の充実から集団意識へ—」『研究論叢第 3 部芸術・体育・教育・心理』52,
 山口大学教育学部研究論叢, pp. 85-100.
- 河正一 (2014) 「インポライトネスにおけるフェイス侵害行為の考察」『地域政策
 研究』17-1, 高崎経済大学地域政策学会, pp. 93-116.
- (2017) 「韓国語教育におけるインポライトネスの教授法—社会的・文化的
 価値体系及び言語的側面からの提案—」『韓国語教育研究』7, 日本韓国語教
 育学会, pp. 139-157.
- (2019) 「社会言語学的調査の状況—言語行動に関する日韓対照研究を中心
 に—」『計量国語学』31-8, 計量国語学会, pp. 572-588.
- 藪内昭男 (2015) 『ポライトネスとフェイス研究の諸相—大きな物語を求めて—』
 リーベル出版
- 이성범 (2015) 『언어적 무례함에 대한 실험화용적 연구 - 공격성 발화를 중심으로
 -』 서강대학교출판부
- Bousfield, D. (2008). *Impoliteness in Interaction*, Amsterdam, John Benjamins.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language
 Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Culpeper, J. (1996). Towards an anatomy of impoliteness. *Journal of
 Pragmatics* 25: 349-367.
- Culpeper J. (2008). Reflections on impoliteness, relational work and power,
 Bousfield, Derek & Locher, Miriam. A (Eds.), *Impoliteness in Language:
 Studies on its Interplay with Power in Theory and Practice*. 17-44. Berlin
 and New York: Mouton de Gruyete.
- Culpeper, J., Bousfield, D., and Wichmann, A. (2003). Impoliteness revisited:
 with special reference to dynamic and prosodic aspects. *Journal of
 Pragmatics* 35:1545-1579.
- Tannen, D. (1985). Silence: Anything but. In D. Tannen & M. Saville-Troike
 (Eds.), *Perspectives on silence*, 93-111.

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP20K13138 の助成を受けたものです。

- 受付：2021年9月10日
- 修正：2021年9月25日
- 掲載：2021年9月30日

〈書評〉

在日コリアンを眼差す鍵としての「継承」

橋本 みゆき 編著 猿橋 順子・高 正子・柳 蓮淑 著
二世に聴く在日コリアンの生活文化-「継承」の語り

洪 里奈 (同志社大学大学院博士後期課程)

これまで在日コリアンの生活の有り様について、世代を跨ぎ丁寧に記述された研究が果たしてあっただろうか。本書はまず、このような重要な気づきを与えてくれる。

水野、文 (2015) は「在日朝鮮人 (コリアン)」という者を 20 世紀前半に朝鮮半島から日本に渡ってきた人々とその子孫と定義し、現在議論が同時にされつつある「ニューカマー」や定住外国人らとは明確に区分する。しかし、「在日コリアン」という存在は日本社会の中で見えない存在となりつつある。金泰泳 (2017) は「現代社会においては、どこまでを「在日コリアン」の範囲に含め (含められたいと考え)、どこまでを含めないのか (含められたくないか考えるのか) ということが難しくなっている」と指摘する。だんだんと“論じにくく”されつつある「在日コリアン」という人々の研究について、その難しさを丁寧に「生活文化」の中から紡いでいこうとするのが本書である。

金亨洙 (2010) は在日コリアンの研究を進めるものとして、「その存在自体が東アジアの近代史から生まれた人々」であり、「彼らの意図とは関係なく日本と朝鮮半島の関係、また朝鮮半島の情勢に非常に強い影響を受けながら生きざるを得なかった政治的な存在」でもあるということを認めなければならず、直視すべき事実がそこにあると鋭く言及している。前途した通り、様々な力学の中で在日コリアンという存在について”論じにくさ”を持ち始めている中で、まさに現代は彼らという存在の意味を問う時なのだと思う。近代史の中で生きてきた彼らは植民地支配の中で故郷と別れ、移動せざるを得なかった人々の生き様であり、本書の中で「継承」されたとする生活文化そのものなのである。

植民地支配に根差す在日コリアンについての研究蓄積はこれまで多くなされてきたものの、歴史性や、その都度変化してきた法的地位、政治的力学によってその定義さえ曖昧なまま今日を迎え世代交代の期を迎えている。「在日」と自称する人の暮らし、生き方も様々になりつつある。そういった個性や多様な様子でさえも、「生活文化」「ライフストーリー」という研究は応答してく

れる。

これまで在日コリアンの「ライフストーリー」「生活文化」あるいは「家族」に着目した研究の蓄積の数はそれまで多くない。「在日家族」と言えば映画作品を思い浮かべる者も多いだろう。「月はどっちに出ている」(1993)や「GO」(2001)「血と骨」(2004)ヤンヨンヒ監督による「ディア・ピョンヤン」(2005)「かぞくのくに」(2012)また最近では家族模様という意味で「焼肉ドラゴン」(2018)は記憶に新しい。これらの作中で主に描かれるのは家族の機能不全と暴力、そして離散の姿であった。文学や映画作品というフィクションで描くことはできても、意外にも生活文化そのものや家族という社会の最小単位を課題とする日本国内における研究蓄積は乏しいように思う。その生々しさや、ざらざらとした人々の側面を研究の成果とすることは憚られてきた可能性もあるのかもしれない。

蓄積としては乏しいものの、これまで2つの切り口で研究がなされてきた。ひとつは「ライフステージ」や時代別の研究である。山本(2008)「在日韓国・朝鮮人の「世代間生活史」」では①戦前移住世代 ②戦後世代 ③成長期世代 ④定住世代 と分類し“考え方や生き方(生活目標や生活理念)がいかにか継承されているのか”を論じている。そしてもうひとつが、本書の研究課題である移住1世代を起点とした世代別の研究である。小熊英二らによる『在日一世の記憶』『在日二世の記憶』や朴沙羅『チベの記憶』などが代表として挙げられよう。在日コリアンの世代区分に関しては日本にきて何代目かをあらわす「一世」「二世」「三世」を使うことが一般的であるが、たとえば「二世」としても、その年齢幅が大きく、個人が生きてきた時代との関連でその人の生活史を表すことはできないと山本(2008)は指摘する。しかし在日コリアンの歴史を紐解く際にその独自性があるのは、ほぼ一世代目の移住時期が1920年代～30年代に集中しており(水野・文 前書)そうすると“ある程度”2世代目、3世代目に人生で経験する歴史的な経験が一致してくる。とはいえ、その歴史的な経験の捉え方や出会い方がコミュニティや性別などで多様であり、在日コリアンの経験を一般論としていくことには無理があったと言われてきた。

しかし本書の研究のように、1世代から2世代目、3世代目へ“何が継承され、何が継承されなかったのか”(猿橋, 2018)に着目することにするならば話は別である。一見無関係に見える「生活文化」の「継承」の有り様から見えてくるのは彼らの「政治性」である。そして、この有り様を読み解くためには移住二世代目の生活体験を紐解く必要があり、そういった意味で「二世」という研究対象への設定が重要かつ必然なのである。

本書の序章で研究の目的と移住「二世」という研究対象、そして「継承」を分析する意義について論じられているが、ここで本書における重要な点は「継承」の意味である。ある生活文化について「受け継ぐこと」は想像の範疇だと

思われる。しかし本書における「継承」はそれだけではなく「与えられたものに対し抵抗すること」やさらには「後になって想起すること」「実践できないでいること」すらも「継承」の範疇に含むのである。単に文化の残りもの、廃れたもの、という捉え方ではなく、この概念設定によって「二世」の葛藤や恥ずかしさ、後悔のようなものでさえも研究の素材としていきいきと意味を成す。「在日コリアン二世」を研究するための概念の広がりがあるここにあるのである。

例えば本書の中で「生活の知恵」については多くのケースで残ってこなかったという。しかし、その知恵の記憶の中に、一世代目の生き様が詰まっており、(亡くなった一世は)「丁寧な人だった」という愛着の表現として現れたりするのである。そして、本書の研究者らがそういった素材を丁寧に大切な研究の素材として取り扱う。“一世が他界したあとにもなおも途絶えず「継承」を続けている”という視点は、これまでの研究とは全く異なる新しい示唆を与えてくれる。

本文内では大きく言及はなされていないが、多くの語り部たちは女性であり、女性の語りが多くを占めている印象である。(男性ももちろん登場している。)研究者らが女性であることも影響しているのかもしれないが、本書のもう一つの価値として、女性たちの語りを読者は目撃する。家族との距離感や「シガ77」での葛藤が丁寧に扱われているが、それは今回の研究者らだったからこそ可能となった聞き取りではなかったか。他にも本書に掲載される語りの一片一片には語り部と聞き手(研究者)とのラポールが節々に伺える。研究者らが、語り部である「二世(女性)」らへの心からのリスペクトがあったからこそ、細やかな生活文化を聴くことができたのではないか。

そういった意味においても、本書はこれまでの歴史研究で論じられてきた範疇(国籍や民族風習、教育、コミュニティ、政治的葛藤、植民地支配といったキーワード)やミクロとマクロという枠組みを超えた新しい示唆を提供してくれる。誰を在日コリアンとするか、という“論じにくさ”故に、徐々に消えてなくなるという議論も存在しているが、本書はそれに対する反駁を可能とする。なぜなら、もし「在日コリアンである」という記憶や、法的な根拠すらなくしてしまったとしても、「継承」の営み(ここには実践できないでいることや再構成された営みも含む)が途絶えることのない限り、その存在はつながっていくからである。絶えず「継承」していこうとする主体が在日コリアンという人びとなのではないか。

では、この「継承」の努力について、当事者だけが行っていくことには限界があるだろう。「継承」の行為それ自体に意味を持たせることは、研究をするものの役割である。また「継承」の射程の理解は、橋本が締め括りにあげる例

⁷⁷ 시가 夫の家族のことやその家系のこと。韓国語では一般に시댁(シデク)という。

のように、なんらかの文化継承について取り組もうとする場合や、移住経験、移民のライフストーリー研究にも応用が可能であろう。

最後に、同じく日本に暮らす「コリアン」という人々を研究する筆者としての課題を挙げておきたい。最終章にて、橋本が生活文化の石川の分類に「どうも収まりの悪い生活文化がある」とし、それを残された課題とするが、この「収まりの悪さ」の意味を問うことに重要な課題性を持つように思える。その分類し得ないところに、生きる「力」や戦略があり、さらに「政治性」をも感じるのである。

様々な意味において本書は一つの成果物でありつつも、多くの研究者や在日コリアン当事者にとっては「継承」を取り扱うはじめの一步となるだろう。

<参考文献>

- 小熊英二・姜尚中（2008）『在日一世の記憶』集英社新書
 小熊英二・高賛侑・高秀美（2016）『在日二世の記憶』集英社新書
 金泰泳（2017）『在日コリアンと精神障害 ライフヒストリーと社会観虚的要因』晃洋書房
 金亨洙（2010）「歴史的視座から見る「在日」の呼称問題」『国際文化研究』16, 東北大学大学院国際文化研究科, p. 11
 猿橋順子（2018）「生活文化と民族文化の親子間継承—在日コリアン二世のライフストーリー・インタビューから」『青山国際政経論集』100, 青山学院大学国際政治経済学会
 朴沙羅（2018）『チベの記憶』筑摩書房
 水野直樹・文京洙（2015）『在日朝鮮人 歴史と現在』岩波書店
 森田芳夫（1996）『数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史』明石書店
 山本かほり（2008）「在日韓国・朝鮮人の「世代間生活史」」『在日韓国・朝鮮人の『世代間生活史』—ある家族の階層移動』世界思想社, p. 75
 山本かほり（2013）「在日韓国・朝鮮人の生活史にみる「民族」の継承と変容—在日韓国・朝鮮人の家族・親族単位の世代間生活史調査より—」『社会分析』40, 日本社会分析学会
 梁英姫（2005）『ディア・ピョンヤン—家族は離れたらアカンのや』アートン
 （2021年2月26日 社会評論社 308頁 2,800円＋税）

〈書評〉

飯倉 江里衣 著

満洲国軍朝鮮人の植民地解放前後史

—日本植民地下の軍事経験と韓国軍への連続性—

崔 誠姫（日本女子大学）

本書は飯倉江里衣氏（神戸女子大学文学部国際教養学科助教）による、博士論文をもとにした著書である。まず、本書の構成は以下のとおりである。ページ枚数の関係上、節は割愛させていただいた。

序章 日本植民地下で培われた軍事経験の継続の問題を問う

第Ⅰ部 植民地下の朝鮮人と満洲国軍（1932～1945年）

第1章 関東軍による朝鮮人支配の実態—朝鮮人の中央陸軍訓練処への入校（1932～1939年）

第2章 「五族協和」と「内鮮一体」の虚構—朝鮮人の陸軍軍官学校への入校（1939～1945年）

第3章 朝鮮人部隊「間島特設隊」の虐殺経験（1938～1945年）

補論 間島特設隊のもう一つの軍事経験—間島における朝鮮人抗日部隊鎮圧

第Ⅱ部 植民地解放後の満洲国軍出身朝鮮人と韓国軍（1945～1948年）

第4章 満洲国軍出身者の知られざる解放直後の「左翼」経験

第5章 韓国軍の民間人虐殺に満洲国軍出身者はいかにかわったのか—麗水・順天抗争時の鎮圧作戦から（1948年10月）

終章 満洲国軍朝鮮人の植民地解放前後史から見えてくるもの。

本書の内容は以下のとおりである。まず、序章において満洲国の軍隊で日本の軍事教育を受け、解放後に韓国でその経験を軍人として「活かした」朝鮮人たちの歴史を追うとし、そこには4つの視点あるとする。その4つの視点とは
①韓国という国家がどのような歴史的・社会的背景をもってつくられたのか。
②解放後の韓国において「親日派」が政権の中枢を占めた点。

③日本の植民地支配もまた、支配をより容易に行うためコラボレーターを作り出した。

④第二次世界大戦後の朝鮮半島、ないしは東アジアにおける米国のプレゼンスやヘゲモニーを批判的にみる視点。

であるとする。さらに満洲国軍に入隊した朝鮮人による解放前後（1932～1948年）の軍事経験を明らかにすることによって、日本の植民地下での朝鮮人による軍事経験が解放後の韓国にどのように引き継がれたのかを考察するとし、それを明らかにするため3つの仮説を立てている。仮説の内容は以下のとおりである。

仮説：満洲国軍朝鮮人による解放前後の軍事経験には

- 1) 虐殺をとまなう鎮圧作戦の指揮官
 - 2) 現場指揮官の裁量による「即決処分」を可能にした権限の存在
 - 3) 抵抗する民間人は「共匪」とみなし処分すべしという虐殺のイデオロギー
- という3つの連続性があり、その検証を行うことを本書の目的としている。

第I部は植民地下の朝鮮人と満洲国軍（1932～1945年）について、3章と補論で論じている。第一章では朝鮮人の中央陸軍訓練処（以下、中訓）への入校を追う。そこには日系と満系の区別があり、朝鮮人は満系とされた。「日系」は幹部候補生で朝鮮人が含まれる余地はなかったことを明らかにしている。第二章では、陸軍軍官学校受験の背景について方圓哲、金永澤、金潤根、金光植らのケースをもとに整理している。この中で金光植のみが「日系」として採用されている。金光植は徹底的に「日本人化」されたていた人物であり、ほかの陸軍軍官学校（以下、軍校）出身者とは共有できない差別経験があったことを、インタビューを通じて論じている。3章では間島特設隊の創設背景について、間島特設隊がもっていた民間人「即決処分」について述べている。間島特設隊に対しては抗日武装勢力の「即決処分」を可能にする「臨陣格殺」の権限を定めた「暫行懲治盗匪法」第7条・第8条が効力を有し、現場指揮官の裁量によって多くの「即決処分」が行われた。抗日武装勢力のみならず、民間人にも適用されたことを明らかにしている。さらに補論では、間島特設隊の朝鮮人抗日部隊鎮圧を、①訓練討伐期、②「天宝山戦闘」と「大沙河戦闘」における日本軍の大敗、③「吉林・間島・通化三省治安肅清」期の三期に分けて論じ、間島特設隊の民間人との接触経験についても言及している。地域の民間人から敵に関する情報収集活動の経験により、朝鮮人同士ということもあり「良好」な関係が形成される一方、中国人は非協力的であったことからその違いが民間人虐殺に通じていったとも指摘している。

第II部は植民地解放後の満洲国軍出身朝鮮人と韓国軍（1945～1948年）について、2章で論じている。第4章では解放直後の武力団体の混乱について論じたうえで、米軍政庁が1946年1月南朝鮮に南朝鮮国防隊以外の武力行為を禁止す

るが、それに先立ち 1945 年 12 月 5 日「軍事英語学校」（以下、軍英）を設立している。軍英卒業生には日本軍及満洲国軍出身者が極端に多いことを、資料から明らかにしている。一方で李奇建、方圓哲ら、1946 年 2 月にソウルから北朝鮮へ渡り、1947 年 8 月より約 5 か月間朝鮮人民軍創設に携わるも翌年、スパイ容疑で拘禁され、1948 年 9 月南朝鮮へ渡りのち韓国軍に入隊している事実に触れ、解放から南北政府樹立直後の時期までの武力団体をめぐる混乱を明らかにしている。第 5 章では満洲国軍出身朝鮮人の解放後の軍隊経験、序章で提示した仮設の検証を行っている。1948 年 10 月の麗水・順天抗争において、鎮圧作戦における実質の最高指揮官は満洲国軍出身の金白一であり、彼の「権限」の下で軍や警察による民間人「即決処分」が行われた。米軍は麗順抗争の蜂起軍を一貫して共産主義者とみなし、韓国軍による彼らに対する虐殺も黙認し、麗順抗争時の鎮圧作戦において韓国軍は蜂起軍に加わった民間人を、共産主義者であるとして虐殺した。この事実は「共匪」は殺さなければならないという日本軍による虐殺イデオロギーが解放後まで引き継がれたと論じている。

終章では結論として、序章で提示した仮説について、連続性がみられることを先行研究及び資料を通じて立証した。満洲国軍朝鮮人の解放前後史を通して見えてくるのは、日本の植民地支配によってもたらされた暴力の連鎖と、そのような暴力の継続が可能な解放後の空間を作り出した米国による新たな植民地主義構造であるとしている。以上が本書の内容の要約である。

本書の成果としては、以下の三点が挙げられる。第一に、満洲国軍の朝鮮人を通し解放前後史をみることで、植民地の連続性や南北分断以前からの朝鮮人の「分断」を浮き彫りにし、克服されない「植民地主義」とその背景にある「共匪」イデオロギーを明らかにした点である。第二に、朝鮮人に対する「排除」と「包摂」のメカニズムを明らかにし、満洲国や植民地朝鮮運営のコラボレーター、民衆虐殺の「駒」となった朝鮮人の姿を浮き彫りにした点である。第三に、満洲国軍出身者の口述史料を収集した点である。日本人かつ女性としてインタビュー時には様々な困難が伴ったと思われる。著者の史料収集への強い意志の結果によるものといえよう。

最後に本書の疑問点について、いくつか述べることにする。本書の 98 頁にて就学率のジェンダー問題を提示されている。これは男女間の差や階層把握のために必要ではあるが、分析が若干足りないのではないかと思われる。軍事エリートという選択肢がある男性に対し、女性にはその機会が与えられない。性別が異なる時点で得られる機会に差があるという点や、エリート男性であるからこそ軍校・中訓、さらには軍英を選ばざるを得なかった状況もあったのではないだろうか。また、第二章では金光植の「日本人化」についてたびたび言及されているが、本書でいう「日本人化」が何を示すのかが漠然としており、唯一彼が「日系」となれた背景が今一つ見えてこない。この点については、更に分

析を深める必要があるのではないだろうか。

満洲国軍出身朝鮮人が「即決処分」を経験したことにより、その経験は韓国軍にも引き継がれ、麗順抗争にも持ち込まれることとなった。「共匪」イデオロギーが持つ暴力性ととも、彼らの「出世欲」を満たす手段としてもそれらが用いられ、その結果民衆虐殺が行われた。これは李承晩政権後に続く朴正熙・全斗煥政権に連なる、植民地支配から独裁政権のコラボレーターとなった軍人の「暴力性」の連続を感じずにはいられない。

(2021年2月20日 有志舎 380頁 6,800円+税)

〈書評〉

趙 智英 著

『宇治拾遺物語』夢説話の研究

高橋 梓（日本学術振興会特別研究員 PD）

鎌倉初期に成立したとされる日本古典文学を代表する説話集『宇治拾遺物語』は、197 の説話のうち 25 話に夢が登場するという。本書は、これらの夢が登場する説話を「夢説話」とし、夢という側面から『宇治拾遺物語』に接近したものである。

先行研究では、『宇治拾遺物語』の説話の中には他の古典文学との同一説話・類似説話が存在するものがあると指摘されてきた。著者趙智英氏は、これらの同話・類話と「夢説話」を実際に比較することで、『宇治拾遺物語』における夢をめぐる描写の独自の意味について提示した。特に、本書の独自性は、朝鮮の伝承説話・口承文芸も比較対象としていることである。日本と朝鮮の史資料を比較対象としたことは、高い朝鮮語・日本語能力を持つ著者だからこそ可能だったといえるだろう。

また、日本の説話の内容を整理した表と朝鮮の説話の日本語訳を掲載した補注や、朝鮮の説話に登場する夢の類型をめぐる補論を収録した本書は、497 ページにもおよぶ大作である。評者は日本や朝鮮の古典文学を専門としないが、これらの補注・補論は本書の内容を理解する上で大きな助けとなった。

それでは、『宇治拾遺物語』において夢がどのような意味を持ったかについて、各章の内容を追いながら見ていきたい。第 1 章では、『宇治拾遺物語』の「夢説話」の特徴が、3つの基準（モチーフ・話形・ストーリー展開）によって提示されている。具体的には、夢の内容について俗人に語らせているということ（モチーフ）、「夢合わせ・夢解き型」が 2 つの説話にしか見られないのに対し「夢告げ型」が多くの説話に見られること（話型）、夢が人びとに何かを知らせる装置として用いられる「出来事の真実型」の説話が多く見られること（ストーリー展開）が特徴として示された。

第 2 章から第 4 章では、具体的な「夢説話」の分析が行われている。第 2 章では、「夢合わせ・夢解き型」に分類される第 4 話「伴大納言事」と第 165 話「夢買人事」を朝鮮の類話と比較しながら、それぞれの説話における夢の特徴について論じている。その結果、第 4 話では夢を語る相手を見極めるべきであるということが強調されていたことが浮き彫りになった。また、第 165 話では

夢の売買の行為が強調されていることが、朝鮮の類話との差異として提示された。

第3章では、「夢告げ型」の説話のうち、神仏の啓示が現実の行動に影響したという描写が見られるものについて論じている。第108話「越前敦賀女観音助給事」、第88話「自二賀茂社一御幣紙米等給事」、第131話「清水寺御帳給ル女事」は、貧しい者が神仏の力によって利益を得るという点で共通する。

『今昔物語集』や朝鮮の類話と比べると、これらの説話では観音利生を唱える靈驗譚として夢が描かれたのではなく、貧しさからの脱出という、人びとに希望を持たせるものとして夢が描かれていたというのが著者の主張である。

第4章では、「夢告げ型」の説話の第57話「石橋下蛇事」と第112話「大安寺別当女二嫁スル男夢見事」を取り上げながら、それぞれの説話のストーリー展開の特徴（「説明型」「暗示型」）について論じている。「説明型」に該当する第57話は、同話・類話が存在しない「孤立話」とされてきたが、朝鮮の説話・伝承と比較することで、蛇というモチーフが世俗説話的なものとして用いられていたことが明らかになった。また、第112話は、寺の財産を私用したことへの警告をめぐる夢が登場する「暗示型」の説話だが、『今昔物語集』の同話と比べると中心人物の立場があいまいなものとして描かれていた。著者は、第112話における夢を、仏教的な罪というよりは、俗人の恐怖心と利己心をあらわしたものとして解釈している。

このように、本書は夢という特徴に注目することで、『宇治拾遺物語』の読み直しを試みたものであるといえる。特に、これまで先行研究で同話・類話とされてきた説話と「夢説話」の差異を明らかにし、『宇治拾遺物語』の独自の特徴を提示したことは、当該分野における本書の大きな成果であると考えられる。

一方で、朝鮮近代文学を専門とする評者の立場から、いくつか疑問が残る部分もあった。第一に、全体を通して「夢説話」というテーマが把握しにくいものになっていると考えた。本書では、第1章で「夢説話」の類型化が行われているが、その中には第2章以降で論じられていない説話も多い。朝鮮を含むさまざまな同話・類話との比較・分析を行ったというのが本書の独自性であるといえるが、その結果同話・類話が存在しない「夢説話」は検討の対象から外れてしまったように思われる。しかし、『宇治拾遺物語』における「夢説話」の特徴をより立体的に把握するには、第1章で示したさまざまな類型の説話も含めた検討が必要ではなかっただろうか。

第二に、本書をとおして提示された『宇治拾遺物語』における夢の特徴が、同時代においてどのような意味を持つものだったのかについてなかなか見えにくかった。著者は、『宇治拾遺物語』の「夢説話」の特徴について、宗教的なものや仏教思想とは異なる「俗世的」なものとして説明しており、それを編者

の興味によるものであると述べている。しかし、そのような「夢説話」の特徴を編者の興味のあらわれとしてのみ解釈できるだろうか。近代文学研究と比べると資料的な限界があるかもしれないが、当時の人びとの置かれた状況や、同時代の文献における夢の表象を併せて検討することで、『宇治拾遺物語』の「夢説話」が「俗世的」なものとして描かれたことの意味についてより深く考察できるのではないかと考える。

第三に、『宇治拾遺物語』をめぐる研究はどのように行われてきたかについてである。本書によると、『宇治拾遺物語』をめぐる先行研究は1960年代から今日まで行われてきたようである。また、その中には韓国の研究者による研究もある。一方で、本書ではそれらの研究を、「夢説話」を本格的に論じてこなかったものとして同列に扱っている。しかし、先行研究が発表された時期によって『宇治拾遺物語』をめぐる評価も異なってくるのではないかと考える。そのような研究の流れにおける本書の位置を示すことで、古典文学研究者以外の読者も本書が持つ意味についてより理解できるのではないかと考える。

本書を読みながら、『宇治拾遺物語』の「夢説話」には多くの朝鮮の説話の類話があったことを知り、改めて朝鮮と日本の間を往来した人びとについて思いを馳せることになった。『宇治拾遺物語』をはじめ日本の古典文学が朝鮮の説話にどのような影響を受けたのかについて研究することは、これまでの「日本文学」あるいは「日本文化」の枠組みを問い直すことになるのではないかと、本書を読みながら考えた。

(2020年12月25日 金壽堂出版 497頁 3,600円+税)

研究会会則

第1章 名称および事務局

第1条

本研究会は、日本韓国研究会と称する。英語名は Japan Association of Koreanology (略称 JAK) とする。

第2条

本研究会は、主たる事務局を関西地区に置く。

第2章 目的および事業

第3条

韓国・朝鮮研究の発展に資することを目指し、言語・文学・歴史・文化・政治経済など多様な分野にわたって幅広く学術情報を発信することを目的とするとともに、1. 研究者相互の交流を通じた韓国・朝鮮研究の活性化、2. 若手研究者が活躍できる場の創出、3. 若手研究者への研究支援を研究会の理念として掲げる。

第4条

本研究会は、年2回の研究例会（3月と12月）と年に1回（8月）の研究発表大会を開催する。開催地、期日は運営委員会で定める。

第5条

本研究会は、年1回研究会誌（オンラインジャーナル）を発行する。

第3章 会員

第6条

本研究会の会員は次の通りとする。

1. 一般会員：本研究会の目的に賛同する個人および団体
2. 維持会員：本研究会の目的に賛同し、所定の維持会費を前納する個人および団体

第7条

会員は次の権利を有する。

1. 研究発表大会の予稿集および研究会誌などの配布案内
2. 研究会誌への投稿
3. 研究発表大会での発表、その他、本研究会の行う行事への参加
4. 役員選挙における選挙権ならびに被選挙権

第4章 入会および退会

第8条

本研究会に入会を希望する者は、所定の手続きにより申し込むものとする。本研究会会員で退会を希望する者は、その旨を本研究会に通知しなければならない。

第5章 役員

第9条

本研究会の役員は、会長1名、事務委員2名、編集委員2名、会計委員2名、企画委員2名、世話人若干名、顧問若干名とする。任期は2年とし、再選を妨げない。

第10条

本研究会の会長は事務局を置き、必要な事務担当者を委嘱することができる。

第11条

運営委員会および世話人会は、原則として研究会の際に開催する。ただし、本研究会の会長は必要に応じて臨時に召集することが出来る。

第6章 会則の改定

第12条

本研究会における会則の変更改定は、運営委員会の発議と世話人の3分の2以上の同意を得なければならない。

2020年12月27日 制定

2021年1月18日 改定

投稿規定

1. 投稿資格

投稿者は原則として日本韓国研究会（以下、本研究会）の会員に限る。

2. 投稿内容

他研究誌・学会誌などに未掲載のものに限る。原則として、本研究会の例会または大会で発表されたものとする。但し、本研究会の判断により、掲載が必要とされる場合はこの限りではない。

3. 使用言語

日本語や韓国・朝鮮語、英語（事前に相談する）とする。

4. 投稿原稿の種類

- ・研究論文：独創性を有する論文
- ・研究ノート：萌芽的な考察もしくは論考
- ・実践報告：実践活動から得た成果
- ・書評：出版物に対する短評

5. 投稿締切

毎年、6月末日とする。

6. 発行

毎年9月末日に本研究会のホームページにて電子化（pdf形式）して公開する。

7. 投稿方法

Eメールにて投稿を行う。

投稿時、以下の内容をメール本文に必ず入れること。

- ・投稿者の氏名（英文表記も含む）
- ・投稿者の所属
- ・投稿原稿の種類（研究論文、研究ノート、実践報告、書評）
- ・原稿のタイトル（英訳も含む）
- ・連絡先（メールアドレス）

送付先（編集担当）： jak-henshu(at)gmail.com * (at)は@に変更してお

送りください。

8. 著作権

掲載された原稿の著作権はすべて本研究会へ帰属するものとする。

9. 査読

掲載の採択可否について複数名による査読を行う。

10. その他

投稿要領で指定されているフォントまたは体裁以外の書式がある場合は、事前に相談すること。

運営委員

海外顧問	韓 昌勲（全北大学）、崔 順育（ソウル神学大学）
日本顧問	任 炫樹（帝塚山学院大学）、辻 大和（横浜国立大学）
会長	河 正一（大阪府立大学）
大会	高橋 梓（一橋大学大学院言語社会研究科研究員）
例会	飯倉 江里衣（神戸女子大学）、朴 天弘（東京大学）
企画	高橋 梓（一橋大学大学院言語社会研究科研究員） 金 根三（志學館大学）
編集	趙 智英（同志社大学）、崔 銀景（長崎外国語大学） 影本 剛（立命館大学ほか）、飯田 華子（関西大学博士後期課程）
広報	徐 明煥（昭和女子大学ほか）、小高 理子（朝日出版）
会計	朴 庚卿（明治学院大学ほか）、丹羽 裕美（ひろば語学院）
HP	楊 廷延（群馬県立女子大学）、趙 智英（同志社大学）
事務	渡邊 香織（千葉大学大学院博士後期課程） 仲島 淳子（近畿大学ほか）
語学世話人	崔 銀景（長崎外国語大学）、朴 天弘（東京大学）
文学世話人	趙 智英（同志社大学）、影本 剛（立命館大学ほか）
歴史世話人	飯倉 江里衣（神戸女子大学）、崔 誠姫（日本女子大学）
文化世話人	朴 庚卿（明治学院大学ほか）、鄭 敬珍（檀國大学）
政経世話人	金 根三（志學館大学）

日本韓国研究 第1号

発行日 2021年9月30日

発行 日本韓国研究会

〒599-8531

大阪府堺市中区学園町1番1号

大阪府立大学 高等教育推進機構

電話 072-254-9655

メール(事務局) [jak.jimu\(at\)gmail.com](mailto:jak.jimu@gmail.com) *(at)は@に変更してお送りください。

ホームページ <http://jak.main.jp/> (入会手続きは[こちら](#))

編集 崔銀景 趙智英

日本韓国研究会 
Japan Association of Koreanology

Journal of Koreanology in Japan

Vol.1

CONTENTS

〈Research Articles〉

- Absoluteness of Literature and Nation as Trivial Differences: Focusing on the Discourse of Kim Tong-ni on Literature and Nation Kyongche Kim
- Recognition of the Classics in Modern Korea: Focusing on “*Munjang*” (1939-1941) Yosuke Yanagawa
- A Study on the Translation of “No-gul-dae” in the Joseon Period: Focusing on the idiomatic expressions written in the translation of “No-gul-dae” Misoon Kim
- A Study of Language Use of Recast and Learners’ Self-repair Eunkyung Choi
- A Study on the Physical Contact Behavior in Interpersonal Communication between Korea and Japan-Using the drama “Good Doctor” (Korean / Japanese version)- Hyunsoo Yim

〈Special Contribution〉

- Response to Aggressive Utterances -A Study on the High School Student Survey- Jeongil Ha·Misoon Kim·Hirosuke Ogami

〈Book Review〉

- “*Transmission*” as the key to understanding *Zainichi Koreans* Rina Hong
- “*Colonial and Post-Colonial History of Koreans in Manchukuo Imperial Army : Military Experiences under Japanese Colonial Rule and the Continuity in Republic of Korea Armed Forces*” by Erii Iikura Seonghee Choi
- “*A study of Tales on Dreams Collected in Uji Shūi monogatari*” by Jiyoung Cho Azusa Takahashi

2021.9.30

日本韓国研究会

Japan Association of Koreanology

